

沖打越1号墳・沖打越中世墓 発掘調査報告

2012（平成24）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、三重県伊賀市神宇打越に所在する沖打越1号墳・沖打越中世墓の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、農免農道（依那古2期地区）整備事業に伴い、平成21年度と平成22年度に実施した。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター（調査研究I課）
平成21年度	主査　伊藤裕偉　同　奥田勝久
平成22年度	主幹　伊藤裕偉　技師　高松雅文
- 4 調査にかかる諸費用は、三重県農水商工部が全額負担している。
- 5 発掘調査にあたっては、地元の神地区・才良地区および伊賀農林商工環境事務所から多大な協力を受けた。
- 6 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 7 発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の方々から専門的な助言・指導を得た。

一瀬和夫　大江綾子	猿川真一　佐藤亜聖	（順不同・敬称略）
-----------	-----------	-----------
- 8 当報告書の作成業務は当センター調査研究I課が行った。報告文の作成は伊藤・高松および谷口文隆が行い、目次等に分担を示した。編集は伊藤が行った。

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図（平成19年測図）、農免農道（依那古2期地区）事業地平面図である。これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。
- 2 調査区の座標は、測地成果2000に対応した新座標第VI系で表記している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏7°00'（平成10年）である。

<遺構類>

- 3 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 4 土層図の色調と土質は、小山正志・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 當報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
- 6 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。
- 7 中世墓では、遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

S F	…焼土坑	S K	…土坑	S X	…経塚	火葬骨埋納遺構	…藏骨器埋納遺構
-----	------	-----	-----	-----	-----	---------	----------
- 8 遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している。

<遺物類>

- 9 當報告での遺物実測図類は実物の1/2・1/4・1/8などがあり、その都度指示した。
- 10 遺物の断面図は、土器は白抜きで、鉄製品・石製品は斜線で表現した。
- 11 當報告書での用語は、「つき」は「坏」、「わん」は「椀」に統一している。
- 12 遺物觀察表は、以下の要領で記載している。

番号	…挿図掲載番号である。
実測番号	…実測段階の登録番号である。
様・質	…「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。
器種など	…遺物の器種を示す。
グリット	…調査時に設定したグリット名を記した。
遺構・層名	…遺物の出土した遺構や層名を記した。
法量(cm)	…遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。
調整・技法の特徴	…主な特徴を外側(外；)・内側(内；)で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。
胎土	…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密・粗」で区分した。
色調	…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度	…指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。
特記事項	…遺物の特徴となる事項を記した。

<写真図版>

- 13 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
- 14 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	伊藤 (1)
1 調査の契機と経過	
2 調査の経過と法的措置	
3 発掘調査と記録の方法	
4 整理作業とその方法	
5 出土遺物の分析と保存処理	
II 遺跡と周辺の諸環境	伊藤・谷口 (7)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
3 近隣の発掘調査	
III 調査区の概要と層位的特徴	伊藤 (11)
1 調査区の概要	
2 調査地の地形と基本層位	
IV 沖打越 1 号墳の遺構	高松 (13)
1 概要	
2 調査区の層位	
3 墳丘	
4 東周溝の遺物出土状況	
5 埋葬施設	
V 沖打越 1 号墳の出土遺物	高松 (29)
1 概要	
2 沖打越 1 号墳の遺物	
3 古墳築造以前の遺物	
VI 沖打越中世墓の遺構	伊藤 (40)
1 概要	
2 丘陵頂部の遺構	
3 丘陵南斜面の遺構	
4 その他（石造物等の出土状況）	
VII 沖打越中世墓の出土遺物	伊藤 (50)
1 概要	
2 中世墓群上面で用いられた遺物	
3 藏骨器として用いられた遺物	
4 経済容器として用いられた土器	
5 金属製品類	
6 石塔・石仏類	
7 碓石経	
8 その他	
VIII 古墳と中世墓の自然科学分析	伊藤・圃パリノ・サーヴェイ (61)
1 分析の目的と結果の認識	
2 科学分析報告	
IX 調査のまとめと検討	高松・伊藤 (87)
1 沖打越 1 号墳	
2 沖打越中世墓	

挿 図 一 覧

- 第1図 沖打越地区調査区周辺地形図
第2図 座標とグリッドの関係
第3図 調査地の位置と周辺遺跡
第4図 沖地区周辺の発掘調査地点
第5図 調査区周辺地形測量図
第6図 沖打越1号墳調査後墳丘測量図
第7図 沖打越1号墳墳丘復元図
第8図 調査区土層図(1)
第9図 調査区土層図(2)
第10図 沖打越1号墳東周溝周辺平面・土層断面図
第11図 沖打越1号墳東周溝出土状況図
第12図 沖打越1号墳埋葬施設1平面・土層断面図
第13図 沖打越1号墳埋葬施設2平面・土層断面図
第14図 沖打越1号墳埋葬施設形成過程
第15図 墳輪模式図
第16図 沖打越1号墳出土遺物実測図(1) 墳輪(1)
第17図 沖打越1号墳出土遺物実測図(2) 墳輪(2)
第18図 沖打越1号墳出土遺物実測図(3) 鉄製品・土器他
第19図 経塚SX5甕の破片散布状況
第20図 沖打越中世墓構造構配図
第21図 沖打越中世墓 丘陵頂部平面・断面図
第22図 経塚SX5・火葬墓個別実測図
第23図 中世墓SX4蔵骨器の破片散布状況
第24図 火葬墓個別実測図
第25図 焼土坑SF15・27平面・土層断面図
第26図 藏骨器(63)の破片散布状況
第27図 沖打越中世墓出土遺物実測図(1) 土器類(1)
第28図 沖打越中世墓出土遺物実測図(2) 土器類(2)
第29図 沖打越中世墓出土遺物実測図(3) 鉄製品・石塔類
第30図 沖打越中世墓出土遺物実測図(4) 石仏
第31図 沖打越中世墓出土遺物実測図(5) 繪石経
第32図 不動寺周辺出土遺物実測図 瓦類
第33図 沖打越1号墳と関連古墳編年案
第34図 経塚想定復元図
第35図 沖地区周辺の中世前期遺跡

写 真 一 覧

- 写真1 酷暑対策
写真2 現地説明会
写真3 調査の状況(D区)
写真4 南方上空から沖地区方面を望む
写真5 表土下の水平堆積層(E区東壁北部)
写真6 出土人骨(1)
写真7 出土人骨(2)

- 写真8 出土人骨(3)
写真9 出土人骨(4)
写真10 出土炭化材(1)
写真11 出土炭化材(2)
写真12 花粉分析プレラート内の状況・植物珪酸体
写真13 沖打越南中世墓の石仏
写真14 沖地区の縄形座

表 一 覧

- 第1表 沖打越1号墳出土遺物観察表(1)
第2表 沖打越1号墳出土遺物観察表(2)
第3表 沖打越中世墓構造一覧
第4表 沖打越中世墓出土遺物(土器)観察表
第5表 沖打越中世墓出土鉄製品一覧
第6表 沖打越中世墓出土石塔・石仏一覧

- 第7表 沖打越中世墓出土繩石経一覧
第8表 瓦類一覧
第9表 骨同定結果(1)
第10表 骨同定結果(2)
第11表 骨同定結果(3)
第12表 骨同定結果(4)

第13表 骨同定結果(5)	第17表 炭化材同定結果
第14表 骨同定結果(6)	第18表 灰像分析結果
第15表 中世出土骨の遺構別・部位別数量(1)	第19表 土壤理化学分析結果
第16表 中世出土骨の遺構別・部位別数量(2)	第20表 花粉分析結果

写 真 図 版 一 覧

表紙 沖打越1号墳全景	写真図版11 沖打越中世墓 全景(1)
写真図版1 調査前風景	写真図版12 沖打越中世墓 全景(2)
写真図版2 沖打越1号墳 墳丘	写真図版13 沖打越中世墓 個別遺構(1)経塚・火葬墓
写真図版3 沖打越1号墳 埋葬施設(1)	写真図版14 沖打越中世墓 個別遺構(2)火葬墓
写真図版4 沖打越1号墳 埋葬施設(2)	写真図版15 沖打越中世墓 個別遺構(3)火葬墓
写真図版5 沖打越1号墳 埋葬施設(3)	写真図版16 沖打越中世墓 個別遺構(4)焼土坑
写真図版6 沖打越1号墳 周溝	写真図版17 沖打越中世墓 出土遺物(1)集合・土器類
写真図版7 調査区土層・範囲確認調査坑	写真図版18 沖打越中世墓 出土遺物(2)土器類
写真図版8 沖打越1号墳 出土遺物(1)	写真図版19 沖打越中世墓 出土遺物(3)礫石経
写真図版9 沖打越1号墳 出土遺物(2)	写真図版20 沖打越中世墓 出土遺物(4)石造物
写真図版10 沖打越1号墳 出土遺物(3)	

I 調査の契機・経過と行政的諸手続

1 調査の契機と経過

a 総説

ここで報告する沖打越1号墳・沖打越中世墓は、平成21・22年度農免農道事業（依那古2期地区）に伴い、発掘調査（記録保存）を実施したものである。同事業にかかる発掘調査は、伊賀市沖地区では山神遺跡（平成7年度）に続き2地点目である。

b 事前協議の経過

沖打越1号墳・沖打越中世墓の所在する才良・沖地区西部丘陵は、昭和52年度に刊行された上野市編『上野市南部都市開発区域埋蔵文化財第一次調査報告』（1978年、以下「上野1978報告」）で、多数の遺跡・古墳の存在する地域とされていた。上野1978報告は、平成4年3月に刊行された上野市教育委員会編『三重県上野市遺跡地図』（1992年、以下「上野1992報告」）では、一部のみが表記されるに止まり、遺跡番号も付与されていないが、全体が埋蔵文化財包蔵地と同等の扱いがなされている。

当該丘陵部を通過する農免農道に関しては、上記上野1978報告の状況を踏まえつつ、路線内の分布調査を平成17年度に実施した。その結果、上野1978報告で認識されていた古墳（横穴式石室墳）などを改めて確認することとなった。

三重県埋蔵文化財センター（以下、「当センター」と事業部局である県農水商工部農山漁村室と事業実施機関の伊賀農林商工環境事務所（以下、「伊賀農林」）は、この成果をもとに協議を重ね、古墳と考えられる地点を極力事業地内から除外し、路線変更を重ねる中で遺跡の現状保存に努めた。しかし、それでもいくつかの遺跡・古墳については記録保存とせざるを得ない状況にあった。

c 範囲確認調査と本発掘調査

上記協議を経て、当センターでは沖打越1号墳・沖打越中世墓の範囲確認調査を平成21年2月23日に行つた。実施面積は12m²であった。この結果、ここに火葬骨を埋納した鎌倉時代墳の中世墓が確認さ

れ、事業地内の約630m²に対して本調査が必要であると認識するに至った。この結果をもとに、当センターと伊賀農林等が協議を重ね、平成21年度に本調査を実施することとなった。

2 調査の経過と法的措置

a 発掘調査の経過

沖打越中世墓の本調査は平成21年度に実施し、当該年度内に完了する予定であった。しかし、中世墓の調査途中で下部に古墳（沖打越1号墳）が確認されたため、引き続き平成22年度にも調査を継続することとした。なお、平成21年度の調査は、同一事業地内にある才良吉田谷古墳群などと併行して実施している。

平成21年度（第1次調査） 平成21年度の発掘調査は、「沖打越中世墓・吉田谷1号墳埋蔵文化財発掘調査業務」として、発掘調査補助業務の委託を行つた。平成21年10月16日に一般競争入札を実施し、㈱島田組が落札した。契約期間は同年10月19日から翌22年2月26日（契約変更により延長後）である。

当調査にかかる平成21年度の経過は以下の通りである。最終調査面積は556m²である。

なお、調査区のある丘陵部は保安林指定されている。そのため、平成21年10月26日付けで森林法にかかる保安林内作業許可申請を事業者である県知事名で提出し、同年11月11日付けで許可を得ている。10月16日 発掘調査委託業務（補助委託）を㈱島田組が落札。

10月20日 現地確認（伊賀農林・㈱島田組・当センター）。調査地内の伐採や作業工程について協議。

・調査経過（平成21～22年）

11月6日 発掘調査用具の資材搬入。

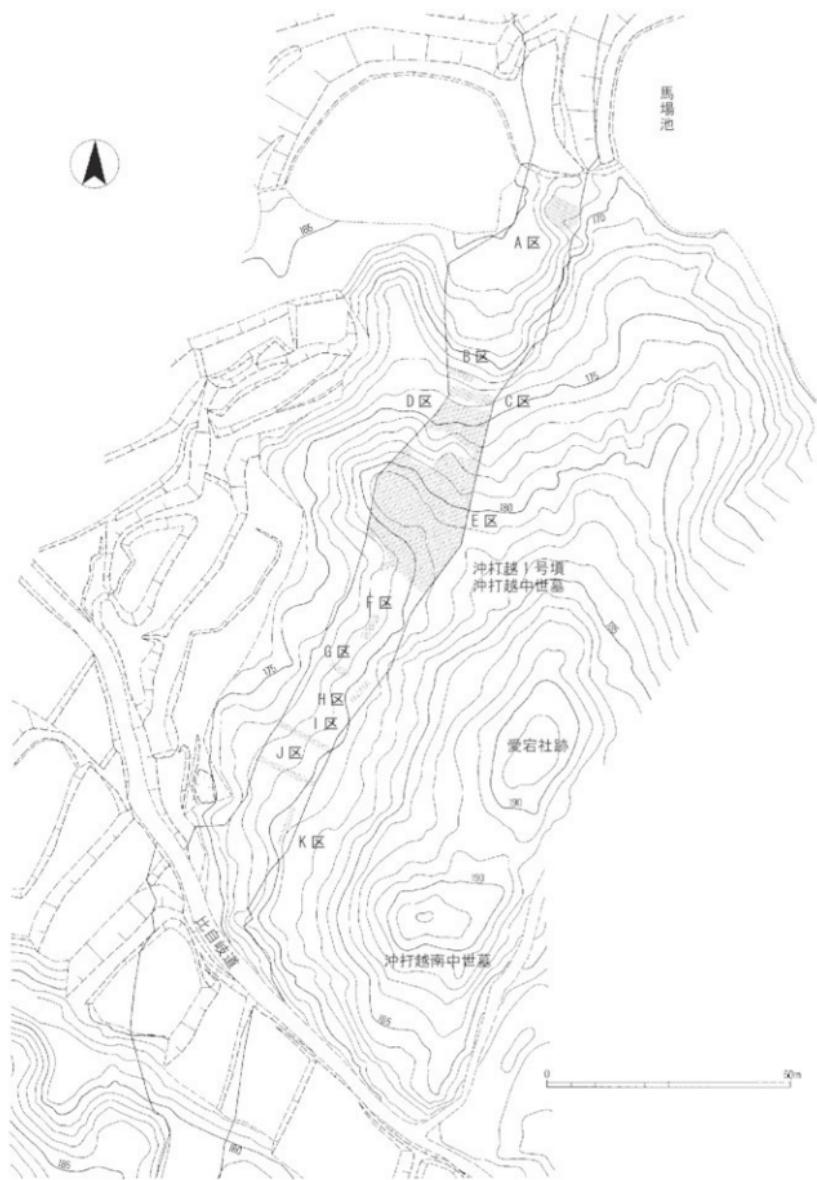
11月19日 事業地内立木の伐採範囲を明示。

11月20日 立木の伐採を開始（伊賀農林による）。

11月25日 立木の伐採、ほぼ終了。

11月27日 調査基準点の設置。

12月1日 調査区の設定。



第1図 沖打越地区調査区周辺地形図 (1 : 1000)

- 12月4日 土量管理用測量の実施。
- 12月9日 調査前の段階確認実施。
- 12月14日 調査グリッドの設定。
- 12月17日 調査区掘削をA区から開始。遺構なし。
- 12月18日 B・C区の掘削。陶器片数点のみ。
- 12月21日 D区の掘削。遺構・遺物なし。
- 12月24日 D区の掘削終了。流路を確認。
- 1月5日 E区の掘削開始。頂部にて集石および人骨埋納土坑確認。埴輪片も出土。
- 1月6日 E区の調査続行。人骨埋納土坑5箇所以上確認。中世墓の下部に古墳の埋葬施設らしき輪郭を認識（沖打越1号墳）。
- 1月8日 E区の北斜面の掘削。遺構・遺物なし。
- 1月15日 E区で石塔確認。小礫群あり。焼土坑S F 15を確認。茶臼跡と考えられる。
- 1月18日 火葬骨埋納土坑の一部を写真撮影。
- 1月19日 S F 15から鉄釘出土。体部完形の藏骨器S X 9を確認。中世墓群の実測図を作成。
- 1月26日 S F 15実測。現地説明会の資料提供（伊賀市政記者会）。新聞各社、発掘調査現場へ来訪。
- 1月29日 現地説明会準備。
- 1月30日 現地説明会を開催。吉田谷古墳群とあわせ、157名の参加があった。
- 2月1日 E区の立面図作成。S X 5の水輪・地輪に墨書き字を確認。
- 2月5日 平板による等高線測量（-8日）。
- 2月10日 E地区の写真および遺物取り上げ。
- 2月12日 火葬骨埋納土坑の補足調査。
- 2月18日 機材の撤収。
- 2月19日 発掘調査現場の引き渡し（伊賀農林へ）。
- 3月8日 業務完成検査（㈱島田組、於：三重県埋蔵文化財センター）
- 平成22年度（第2次調査）** 平成22年度は、前年度に沖打越1号墳の存在が明らかになったことから、前年のE区を中心とした本調査とともに、改めて事業地内の範囲確認調査を実施することとした。
- 当該年度の発掘調査は、「沖打越中世墓・才良吉田谷古墳群ほか埋蔵文化財発掘調査業務」として、発掘調査補助業務の委託を行った。平成22年6月21日に一般競争入札を実施し、㈱アーキジオが落札した。契約期間は同年6月22日から同年10月29日（契約変

更による延長後）である。

当調査にかかる今年度の経過は以下の通りである。最終調査面積は、本調査部分で538m²、範囲確認調査部分で約50m²の、合計588m²である。

なお、前年と同様に、森林法にかかる保安林内作業許可申請は平成22年6月23日付けで事業者である県知事名で提出し、同年7月21日付けで許可を得た。
・調査経過（平成22年）

6月21日 発掘調査委託業務（補助委託）を㈱アーキジオが落札。

7月2日 現地確認（伊賀農林・㈱アーキジオ・当センター）

7月20日 発掘調査用具の資材搬入。

7月21日 調査前段階確認のうち、作業開始（酷暑の日）。E区北東斜面部から古墳時代の土師器高杯出土。

7月22日 やはり酷暑！1号墳墓壙の検出。F・G・H区の調査前段階確認と、G・H区の掘削開始。

7月23日 酷暑！中世墓S X19-24の検出および実測、火葬骨取り上げなど。

7月26日 1号墳墓壙の輪郭ほぼ確定。丘陵北斜面東寄りから五輪塔の水輪出土。

7月27日 1号墳墓壙の検出状況写真。G区掘削終了。遺構・遺物なし。

7月28日 1号墳東周溝を確認。1号墳墓壙埋土上にて中世墓S X25を確認（頸骨のみか）。F区掘削。

7月30日 1号墳墓壙の南側にもう一つの墓壙を確認（埋葬施設2）。G・H区の掘削後段階確認。



写真1 酷暑対策（シートの庇）

8月2日 1号墳墓壙掘削するも壙輪片のみで副葬なし。東周溝内から壙輪・土器（小形丸底壺）などをまとめて出土。調査区に設置した温度計が37℃を指す。作業エリアの上にブルーシートで底を作る（写真1。9月下旬までこの底は威力を發揮）。

8月3日 1号墳墓壙から刀子出土するも、他に目立った遺物なし。調査区の温度計は38℃。

8月4日 1号墳墓壙の上部土層図作成。丘陵北斜面から弥生末一古墳初頃の台付甕片出土。I区の調査前段階確認。

8月5日 SX5から墨書の見える礫石経出土。「朝」「盡」などあり。1号墳墓壙から鉄鏹出土。F区の掘削後段階確認。

8月6日 本日も酷暑！1号墳埋葬施設2の棺痕跡を検出。掘削するも副葬品なし。

8月9日 今日は比較的涼しい（30℃以下か）。埋葬施設2の棺内に遺物なし。J・K区の調査前段階確認。

8月10日 1号墳埋葬施設1、頂部から約1m下げるも副葬品なし。

8月11日 1号墳埋葬施設1の墓壙脇にピットを検出。棺痕跡明瞭に確認。一部掘削するもやはり遺物なし。

8月12日 酷暑（35℃以上）。1号墳埋葬施設1の掘削続行するも、やはり遺物なし。

8月18日 酷暑（35℃以上）。1号墳埋葬施設1、やはり遺物はない。

8月19日 酷暑。1号墳埋葬施設1から、人骨片らしきものを確認。遺物はない。

8月20日 I区掘削開始。1号墳周溝の土層セクションを取り外す。

8月23日 調査区の温度計は40.5℃。東周溝内から砥石出土。

8月24日 1号墳埋葬施設1の土層図作成。I区掘削終了、J区開始。

8月25日 東周溝の写真撮影と実測図の作成。

8月27日 丘陵南斜面にて五輪塔の火輪が出土。炭屑もある。K区掘削開始。

9月1日 丘陵南斜面の掘削。炭屑は2基目の茶毬跡と確認。J・K区掘削終了。調査区の温度計36℃。

9月2日 一瀬和夫氏（京都橘大学教授）による調査指導。



写真2 現地説明会

9月3日 焼土坑SF27写真。調査区の温度計38℃。

9月7日 SF27ほかの実測。I・J・K区の掘削後段階確認。

9月10日 1号墳埋葬施設内の土層観察用ベルトの除去。やはり遺物なし。土壌サンプルなどを採取。

9月13日 ラジコンヘリによる上空からの写真撮影。その後、全景写真などを撮影する。

9月14日 写真撮影の続き。

9月15日 現地説明会のための資料提供（伊賀市政記者会）。

9月17日 現地説明会の準備。

9月18日 現地説明会開催。126名の参加があった。

9月21日 周溝内遺物の取り上げ。

9月22日 1号墳ほかの等高線測量。

9月24日 調査区土層図作成。今日は異様に涼しい。

9月27日 1号墳墓壙の棺据形を掘削。遺物ない。

10月5日 E区の終了後段階確認。

10月6日 朝は寒いぐらいに涼しくなった。現場の片付け、範囲確認調査区の埋め戻しなど。

10月8日 丘陵北斜面の残存部を重機で掘削。石仏2体と五輪塔部材（火輪2個）出土。現場撤収。

10月19日 発掘調査現場の引き渡し（伊賀農林へ）。

11月9日 業務完成検査（㈱アーキジオ、於：三重県埋蔵文化財センター）

b 発掘調査の普及・公開

当該発掘調査にかかる普及・公開事業として、現地説明会を開催した。前述のように、平成21・22年度のそれぞれに実施し、参加者は157名（平成21年度）、126名（平成22年度）であった。また、調査成果報告

会として平成23年4月16日に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重2010」にて、調査成果の概要報告と遺物展示を行った。

他には、三重県埋蔵文化財センターHPで発掘調査情報を提供した。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法(以下、「法」)の諸通知は、以下により行われている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項(県教育長あて県知事通知)

平成21年10月9日付、賀農環第734号

・法第99条第1項(県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告)

平成21年11月2日付、教理第295号

平成22年7月14日付、教理第93号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知(伊賀警察署長あて県教育長通知)

平成22年3月15日付、教委第12-4428号

平成23年2月22日付、教委第12-4407号

3 発掘調査と記録の方法

a 堀削の方法

範囲確認調査では、地表下約10cm前後で黄灰色土を確認している。発掘調査ではそれを参考に、全体を人力掘削した。

当地の地盤は脆弱な砂礫層で、丘陵頂部では表土直下で確認できた。しかし、丘陵頂部から遠のくほど厚い堆積土が見られ、最も深いところでは2m近いものとなった(第III章参照)。

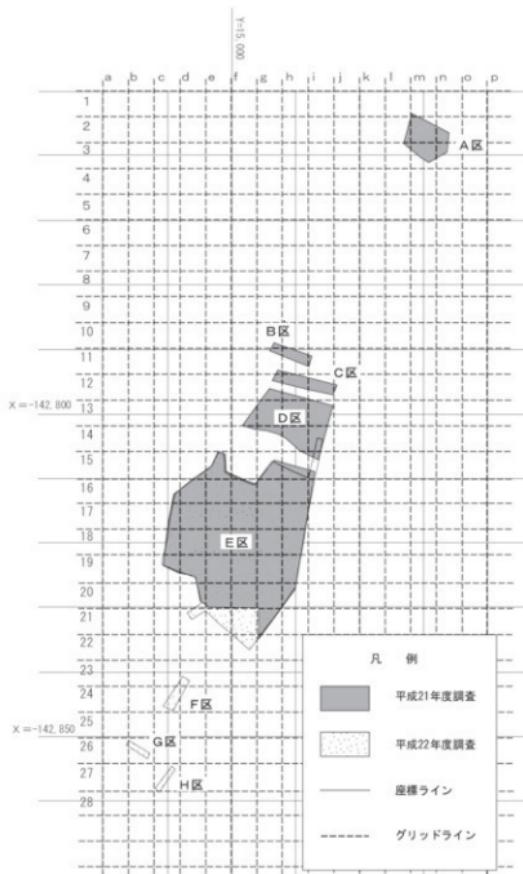
b 地区設定

平成21年度(第1次調査) 事業地内には、範囲確認調査を実施した地点(調査のE区)以外に、いくつかの平坦地が見られた。その箇所が中世墓として利用されていた可能性も考えられたため、それらをもとにA-Eの5地区を設定した(第1・2図)。

平成22年度(第2次調査) 平成22年度は、前年度に設定したE区の調査と、E

区よりも南部にF-K区の範囲確認調査区を設けて実施した。なお、E区北斜面部は一部前年度のD区にまで及んでいたが、調査の便宜上、E区に含めた。

グリッドの設定 上記調査区のうち、A-E区については国土座標(第VI系)の軸線を基準に、全調査区を通じて行った。調査区内のグリッドは4m四方とし、西→東方向にアルファベットを、北→南方向に数字を付与した(第2図)。



第2図 座標とグリッドの関係

なお、F～K地区は範囲確認調査区で、結果的に遺構・遺物が確認できなかったこともあり、グリッド表記はしていない。

c 遺構番号

中世墓に関する遺構番号は、平成21・22年度を通じて連番で付与した（第3表）。沖打越1号墳については、埋葬施設1・埋葬施設2と周溝のみが相当するため、あえて番号を付与しなかった。

d 出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、小地区単位で取り上げている。それぞれの遺物には専用のラベルを現地で付与したうえで、洗浄などの作業を行うため当センターへ搬送した。

e 遺構図面

遺構検出段階で、1/40の略測図（遺構カード）を作成している。遺構カードはグリッド単位で作成し、遺構・出土遺物・埋土の状況等を適宜記録した。

遺構カードとともに、調査区全体の遺構配置を見るための遺構配置図（1/100）を作成した。

発掘調査終了後に、正確な実測図を作成した。調査区の平面図は、主要遺構部分を1/10で手書き実測した。調査区の土層図は1/20で作成した。

f 遺構写真

遺構関連の写真是、調査区全般写真や重要な遺構については、4×5判および6×7判（プローニ）撮影し、調査の進捗状況などを中心とした細かな記録には35mm版を撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。また、デジタル画像と動画も適宜撮影した。

4 整理作業とその方法

a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分（A遺物）と、報告書未掲載分（B遺物）とに区別して保管している。

b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレイス図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×9判（プローニー）で撮影した。遺物写真的撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

5 出土遺物の分析と保存処理

a 出土資料の科学分析

今回の発掘調査では、出土人骨・土壤・木炭の分析を実施した。分析は平成22年度の委託業務として実施し、㈱バリノ・サーヴェイ株式会社が受託した。その報告は第VII章に掲載した。

b 保存処理

出土した鉄製品類に関しては、常態での保存が困難なため、保存処理を実施した。内訳は、沖打越1号墳出土鉄製品4点、沖打越中世墓出土鉄製品8点である。

保存処理の方法は、X線撮影やクリーニングなどの基礎作業の後、アクリル樹脂20%ナフサ溶液を含浸させる方法とした。

保存処理は平成23年度の委託業務として実施し、株式会社吉田生物研究所が受託した。（伊藤）

II 遺跡と周辺の諸環境

1 位置と地形

a 地形の環境

沖打越1号墳・沖打越中世墓は、三重県伊賀市沖字打越に所在する。三重県のなかでも旧伊賀国に相当する「伊賀地域」には、平成の大合併によって成立した伊賀市（上野町・伊賀町・阿山町・青山町・島ヶ原村が合併）と名張市があり、現在ではその大部分を伊賀市が占めている。伊賀地域は「伊賀盆地」と通称される盆地地形で、四方を山地に囲まれている。盆地特有の条件により、夏は暑く冬は底冷えのする気候である。

伊賀地域を流れる河川は木津川が中心である。木津川は伊賀地域南部を水源に、京都府を経て淀川へと合流する。淀川は大阪湾へと注ぐ。三重県のなかでも、大阪湾に至る水系はこの旧伊賀国域のみである。伊賀地域と関西（近畿）地方との強いつながりは、この地形的特徴からも窺われる。

沖打越1号墳・沖打越中世墓の所在する神地区は、木津川本流域（伊賀では長田川とも呼称）沿いである。神地区は、当地で最も広い平野部を形成する伊賀盆地のうち、その中南部にある。当遺跡は、木津川東岸の標高約200mの丘陵地にある。遺跡からは、この盆地を広く俯瞰することができる。ちなみに、当遺跡から木津川をさかのぼると、阿保・比土・古郡・上神戸・比自岐といった小盆地が連なっている。

2 歴史的環境

三重県北西部に位置する伊賀地域は、先述のように総じて近畿地方の影響が強い。この傾向は、歴史的に見ても同様で、とくに弥生時代以降の状況に顕著に窺える。時代を追って概観しよう¹⁰⁾。

a 弥生時代以前

木津川上流部の比土遺跡（比土）では、約25,000年前の九州姶良火山灰層上面からサヌカイト製の翼状剝片が出土している。他には、田中遺跡（猪田）

からチャート製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、とくに後期に相当する時期の遺跡が目立つ。田中遺跡・才良遺跡（才良）・森脇遺跡（市部）などがあり、森脇遺跡からは河川沿いの貯蔵穴群が検出されている。中谷遺跡（比土）からは石器とともに晚期の突帯文土器が出土している。

弥生時代では、澤田遺跡（市部）・山神遺跡（神）・森脇遺跡などがある。これらの遺跡は、盆地縁辺部に点在する傾向が窺われ、やや高所を指向する当時の住環境が想定できる。弥生時代前期に相当する遺跡は知られていないが、ほぼ同様な立地と想定される。沖地区よりも上流部にあたる阿保盆地と比土・古郡盆地からは突線鉢付式銅鐸が出土しており、銅鐸を象徴に小盆地を単位とした集団の結合があつたと考えられる。伊賀の弥生土器は概して大和・近江地域との共通性が高いが、少量ながら伊勢湾沿岸部からの搬入品と考えられるものもある。

b 古墳時代

この時期を代表するのが、比自岐盆地に造成された石山古墳（前方後円墳、全長約120m）である。4世紀後葉頃と考えられるこの古墳は、石製腕飾類や鉄製武器を中心とした多量の副葬品で知られ、当時の伊賀盆地南部における王墓と考えられる。また、同じ盆地の低地部には6世紀前半の前方後円墳である王塚古墳（全長約48m）があり、石山古墳と系列を同じくする人物が被葬者と見られる。

比土・古郡盆地の東部には、5基の前方後円墳を含む美旗古墳群が形成されている。この地域では、美旗古墳群に代表される首長墳の形成が続く。比土・古郡小盆地の東側丘陵麓には、首長居館と水源地祭祀施設を融合した遺跡として著名な城之越遺跡（比土）がある。4世紀後葉から5世紀前半を中心とした城之越遺跡は、これら複数の小盆地に閑与した首長の存在が想定される。

さて、比自岐盆地を含めた伊賀盆地南部では、才良古墳群や片瀬古墳群などが知られていたが、時期的に石山古墳と王塚古墳との間を埋める古墳は、これまで今ひとつ不明確だった。しかし、今回調査した沖



第3図 調査地の位置と周辺遺跡（国土地理院 1/50,000「上野」「名張」より）

打越1号墳をはじめ、近隣再分布調査の結果、才良東部の丘陵中に4世紀から7世紀に及ぶ大規模な古墳群の存在が確認された。古くから知られている山梶玉を出土した折川山神社古墳⁽¹⁾以外にも、才良吉田谷1号墳からは金銅装馬具や金環が発掘調査で出土している⁽²⁾。このように、6世紀後葉から7世紀前葉にかけての優秀な副葬品を伴う古墳が才良東部丘陵中で確認されたことから、石山古墳・王塚古墳と、財良寺跡（才良庵寺）との間をつなぐ集団の存在が浮かび上がりつつある。

c 古代（奈良・平安時代）

古代律令期の沖地区は、『倭名類聚抄』⁽³⁾記載郷に当たれば、伊賀国伊賀郡神戸郷に属すると考えられる。この時期を代表するのは、南隣の才良地区にある財良寺跡（才良庵寺）と、北隣の市部地区にある森脇遺跡である。財良寺跡では7世紀後葉から中世に至る瓦類が出土しており、比較的長く継続した寺と見られる。また、鎌倉時代の沖・才良地区付近には「吉田寺」のあったことが知られる⁽⁴⁾。才良地区的南部、才良吉田谷古墳群の存在する場所は小字「吉田谷」で、南隣の折川地区にも「吉田」と呼ばれる集落があるため、「吉田寺」はこのあたりのどこかと考えられるが、未だ特定には至っていない。森脇遺跡は7世紀から10世紀に及ぶ大規模集落で、規格的な建物配置から、都衙規模の官衙か、あるいは有力豪族の屋敷地と見られている。当地が「市部」という地名であることや、平安期の和歌にも詠まれた「あれそこの森」の比定地とも重なることから、単なる地区施設ではないであろう。

なお、比士・古郡盆地にあたる「古郡」は、古代の都制における郡家（都衙）との関連も考えられているが、それに該当する遺跡は今のところ見られない。ただ、当地の東端にあたる城之越遺跡からは、「庭」の墨書きある奈良時代の須恵器が出土している。古墳時代に起源を持つ遺跡であるが、奈良時代にまで何らかの機能や意識が継続していたことも考えられる。

d 中世（鎌倉・室町・戦国時代）

中世の伊賀は、莊園社会から台頭してきた「悪党」と呼ばれる在地勢力（鎌倉南北朝期が中心）と、「惣国」（戦国末期）に代表される。また、半町規模の小規模方形城館が多数密集する景観は、室町期以降に

次第に醸成された、伊賀の中世を代表する景観となっている。さらに、仏教を中心とした宗教が在地に深く根ざすのが鎌倉時代以降の特徴である。

伊賀では南都律宗系の寺院が複数存在している。南北朝末期に成立した『西大寺諸国末寺帳』⁽⁵⁾に記載される不動寺は沖地区にあり、近隣の無量寿福寺も同史料にその名がある。これら律宗系寺院の地方への浸透と呼応するかのように、13世紀後葉頃から火葬墓が急増する。今回報告する沖打越中世墓も、この影響を受けて成立したと考えられる。

鎌倉時代後期から南北朝時代頃の動向は、遺跡としてはよく分からことが多いが、今に残る石造物には良好なもののが数多く見られる。前出の不動寺や無量寿福寺には、大型の五輪塔や層塔などがある。他にも、長隆寺（森寺）の建長4（1252）年銘層塔残欠、清岸寺（摺見）の阿弥陀三尊石龕佛（鎌倉時代後期）など、見るべきものが多い。

室町時代の後半から戦国期に至る時期には、数多くの石造物が造られる。南北朝時代頃までの石塔類の多くが供養塔であったのに対し、15世紀代以降は火葬墓とも連動しつつ、五輪塔と小形石仏を中心に、少量の宝篋印塔などが墓標として用いられるようになったと見られる⁽⁶⁾。これらは、当初は地域の有力者を中心とした墳墓であったものが、次第に村や集落毎の惣墓へと移行する中で増加したと考えられる。沖地区とその近隣でも、寺院墓地を中心に多数の石造物を見ることができ、中世の面影を知る重要な資料となっている。

沖地区付近の集落遺跡としては、南部の才良遺跡や木津川を挟んで西方の澤田遺跡などが知られる。これらの遺跡からは、掘立柱建物を中心とした建物群や井戸・区画溝などの付帯施設が確認されている。沖地区北方にある小泉氏館跡（依那具）では、鎌倉時代の集落跡から室町戦国期に方形城館へと移行した状況が確認されている⁽⁷⁾。なお伊賀では、鎌倉期を中心とした大規模な屋敷は今のところ確認されていない。

e 近世（織豊期・江戸時代）

織豊期の伊賀は、織田信長軍團による伊賀惣国一揆の壊滅（天正伊賀の乱）と、その後に入部した織田信雄の支配、さらには豊臣政権下で入部した筒井



第4図 沖地区周辺の発掘調査地点

定次の支配に代表される。比自岐川が木津川と合流する地点に所在する丸山城跡は織田信雄による築城されたものである。天守台と耕形虎口を伴うこの城跡は、石垣こそ今は確認できないものの、織豊系城郭の特徴を有している。

織田信雄の後に伊賀に入部した筒井定次は伊賀上野城を拠点として伊賀北部支配を進める。江戸時代には藤堂高虎が入部し、津・上野城下町を整備して藩領の機能を整えている。筒井氏・藤堂氏段階に相当する神地区周辺の遺跡については今のところよく分かっていないが、先述の中世石塔群から継続する石造物（板碑形墓標や小形石仏）が各地の寺院や現行墓地などに数多く見られる。

なお、室町戦国期に起源を持つ方形城館も、今までその遺構を残すものが多い。方形城館の軍事性

は近世段階で失われるであろうが、その屋敷機能は近世以降も継続していると考えられる。

3 近隣の発掘調査

沖打越1号墳・沖打越中世墓の近隣では、これまでに2箇所の発掘調査が実施されている（第4図）。その概要を見ておく。

馬場遺跡 平成3年度県営圃場整備事業に伴って実施された^⑨。少量だが6世紀前半を中心とした遺物があり、堅穴住居と見られる遺構もある。

山神遺跡 平成7年度農免農道整備事業にともなって実施された^⑩。弥生時代後期前半を中心とした良好な土器類のほか、古墳時代前期末から中期初頭と考えられる堅穴住居が確認されている。

近隣既調査区との関係 近隣既調査区のなかでとくに注目するのが山神遺跡である。山神遺跡では、沖打越1号墳の時期とほぼ重なる時期の遺構・遺物が確認されている。沖打越1号墳の造営に、山神遺跡を形成した人々が何らかの関与をしていた可能性は高いであろう。

（伊藤・谷口）

＜註＞

- (1) 以下、遺跡を中心とした記述に関しては、伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）を参照した。
- (2) 小林行雄編『世界考古学大系3日本Ⅲ古墳時代』（平凡社、1959年）
- (3) 平成21年度三重県埋蔵文化財センター調査。現在の資料としては、『吉田谷1号墳発掘調査発見地説明会資料』（三重県埋蔵文化財センター、2008年1月）がある。
- (4) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成集名類聚抄』（1968年、聯川書店）
- (5) 大田壯一郎「中世仏教の展開」（『伊賀市史』第1巻通史編古代中世、伊賀市、2011年）
- (6) 松尾剛次「西大寺末寺帳考」（同氏著『勅進と破滅の中世』吉川弘文館、1995年）
- (7) 織川真一「伊賀の石造文化」（前掲『伊賀市史』第1巻通史編古代中世）
- (8) 三重県埋蔵文化財センター「小泉氏館跡」（『荒木・西明寺地内遺跡群発掘調査報告』2007年）
- (9) 三重県埋蔵文化財センター「平成3年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊」（1992年）
- (10) 三重県埋蔵文化財センター『火山道路・山神道路・良福寺跡・高寺南遺跡』（1996年）

III 調査区の概要と層位的特徴

1 調査区の概要

a 調査区の設定

沖打越1号墳・沖打越中世墓の発掘調査は、平成20年度に実施した範囲確認調査の結果を受け、次のような区分をした。

まず、事業地内に遺構・遺物の存在が考えられる地点をA区からE区の5地区に区分した。そして、新たに範囲確認調査が必要と考えられる地点をF区からK区の6地区とした(第1図)。A-E区の調査は平成21年度に、平成22年度はE区の継続調査とF-K区の調査を実施している。

A-D地区は、平成20年度の範囲確認調査で中世墓が確認されたE地区の北側にあたる部分である。この地区は、E地区を最高所として数段の平坦地となっていた箇所にある。北側に不動寺を臨む位置でもあることから、E地区から雑壇状に中世墓が展開している可能性を考えての調査区設定である。

結果的に、明確な遺構・遺物が確認されたのはE区のみで、A-D地区に見られた平坦地は、中世墓に伴うものではないことが判明した。この平坦地は、後述する中世墳の洪水によって形成されたと考えられる。

E区の遺構・遺物に関しては後述(第IV-VIII章)



写真3 調査の状況 (D区)



写真4 南方上空から沖地区方面を望む

するので、ここではそれ以外の調査区を概略的に見ておく。

b 各調査区の概要

A区 今回の発掘調査区のなかで、最も北に位置する。馬場池の南西脇に、半島状に突き出た丘陵尾根の先端にあたる。

不動寺を北に臨む良好な地形であり、中世墓に関する遺構・遺物の存在が想定された。しかし、表土直下に軟質の泥岩層(地山)が確認され、遺構は確認できなかった。

出土遺物は微量で、古墳時代頃かと思われる土師器片が出土したのみである。

B-C区 この3地区は、E区(沖打越中世墓の本体)北側にあたる。調査前にはそれぞれの調査区が平場(テラス)にあたる雑段状の地形であったため、中世墓の造作による地形と想定して調査を行った。

調査の結果、テラスは自然の土砂崩落によって形成されたものと判明した。遺構は確認されなかつたが、B・C区からはE区の中世墓から流出(ないしは投棄)したと考えられる中世土器片が数点出土している。

F-K区 この6地区は、E区の南側にあたる。小規模な尾根稜線上を中心に設定した範囲確認調査区である。

J区では、地表下約20cmほどで地山(花崗岩)に達した。これ以外の調査区では、I区で地表下約60cm、F・G区で地表下約100cm、H区で地表下約180cmまで、それぞれ出土を確認した。いずれの調査区

も標高の低い側を中心に厚い堆積が確認できる。この流出土は、第8図でいう第2～4層に相当するものである。

なお、いずれの調査区からも遺構・遺物は確認できなかつたため、面的な発掘調査は実施しなかつた。

2 調査地の地形と基本層位

a 調査区周辺の地形と地質

つぎに、A～K区を通じた地形的・層位的特徴について見ておく。第2章で見たように、沖打越1号墳・沖打越中世墓は沖地区集落を臨む尾根頂部を中心形成されている。ここからは木津川沿いに広がる伊賀南部の盆地への眺望がすこぶる良い。E区（丘陵頂部）の標高は約182mである。

調査地の表層地質は、大部分が泥岩・砂岩・礫岩を中心とした堆積岩およびその煤乱土で構成されている。また、南部に設定した調査区の一部では花崗岩煤乱層が見られた。

古墳と中世墓のあるE区周辺は堆積岩層が見られる。いわゆる「古琵琶湖層」である。この堆積岩層は極めて脆弱で、岩質が固まらないうちに隆起したことを見している。

花崗岩煤乱層は、調査地南端にあたるJ・K区で見られた。同様な岩盤は、一連の調査として実施している才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群でも確認できる。

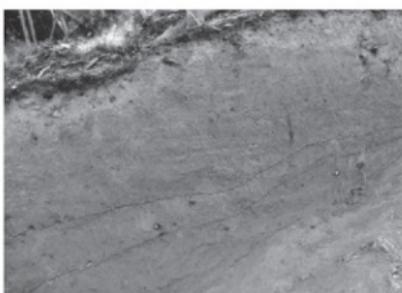


写真5 表土下の水平堆積層（E区東壁北部）

b 調査区の基本層位

当地の表層層位は、E区の頂部、すなわち丘陵頂部とそれ以外とで大きく分かれる。

丘陵頂部では、堆積土としては表土層程度であり、表土直下が地山となる。

この一方、丘陵斜面ではかなり厚い堆積土が確認できる。堆積土は、E区北端部で現表土から2m近くなる。堆積土の最下層付近から埴輪の出土が確認された。つまり、古墳が築かれた5世紀初頭から約1,600年の間に、丘陵上部から大量の土砂が流出したことになる。このことは、古墳が築かれた時期の地形環境と現在とでは大きく異なっていることを示している。丘陵の上部は概ね現状よりも高く、その幅も今より広かつたと考えてよいだろう。

丘陵根部の堆積土は、最下層部分に灰褐色・黒褐色土層が堆積している。これらには埴輪片が含まれており、古墳築造以後の堆積土であるといえる。

その上部には、黄色褐色土の堆積が見られる。この層は、古墳周囲の埋土にも同質のものがある。上層部には中世土器片を含むため、中世前期以降に丘陵の上部から崩落した土砂であると考えられる。

その上には、黄灰色系のシルトと砂の互層が見られる。この層は、部分的に1m以上の堆積を見せる。この層をよく見ると、水平に堆積を見せる部分がいくつかあり、それが3～4層重なっているところもある（写真5）。このような層は、E地区南部やH地区などでも見られる。層の状況から見て、この互層は洪水層ともいえる土層であろう。おそらく、B～D区の連続するテラス状地形も、この洪水層を基礎としていると考えられる。

I～K地区を中心とする南部調査地は、先述のように花崗岩の煤乱層が見られる。この部分も層位的には水平堆積のある互層が見られる点では、他の調査区と同様である。

（伊藤）

IV 沖打越1号墳の遺構

1 概要

沖打越1号墳は墳丘長24m、円丘部長19m、突出部長5mの不定形な造出し付円墳の可能性が考えられる（第5-7図）。墳丘では自然流出が激しいこともあり、明確な盛土を確認することができなかつた。外表施設として、古墳の東側に周溝が巡り、墳頂に埴輪が並んでいたと考えられる。さらに墳頂では、墓壙を設けて木棺を直葬する埋葬施設を2基検出した。遺物は、周溝・埋葬施設を中心に埴輪・土師器・鉄器等が出土した。

2 調査区の層位

沖打越1号墳のあるE区では、調査区東壁・南壁によって土層堆積状況の全体的な把握を行った（A-F間）。さらに、古墳の南北横断図・東周溝の東西横断図によって個別の堆積状況を図示している。

a 北側斜面

沖打越1号墳の北側斜面にあたる（第8図A-B間）。この北側斜面において基本層序をとらえておく。まず、表土下には橙色で粒度の粗い第2層がみられた。シルトが混じるもの、主体は中粒砂から粗粒砂でしまりの弱い層である。第2層では水平を基本とする堆積層が幾重にも積み重なっていることが観察できた。これは地山がきわめて脆い堆積層で構成されているために、大雨の度に崩落を繰り返した結果と考えられる。第2層については細分の意義を見出せなかつたので、一括りで認識した。

第2層の下には第3・4層の堆積が確認できる。第4層にも第2層と同様の堆積状況が観察できる。したがって第4層も第2層と同様の理由で、一括りで認識した。第4層の下には第5・6層、丘陵頂部付近では第7-9層がみられる。いずれも比較的粒度の粗い堆積層である。第9層の下には第10層が確認でき、他より粒度の細かいことが特徴といえる。第1-10層からは中世の遺物が確認された。

さらに盆地側では第11-13層が確認された。このうち第11層は暗褐色の堆積土で他と異なる色調を呈する。これに類似する層として第13層があげられるが後者は黄褐色系の色調が強い。第11-13層の出土品は古墳時代の遺物に限られる。従つて、出土品から第2-10層と第11-13層に大別できる。

第11-13層の下では橙色系の色調で細粒砂から中粒砂を主体とする第14層が確認された。なお、第14層からの出土品は確認されなかつた。

これらの下層において地山の第15-17層が確認された。地山は褐色系の細粒砂から粗粒砂を主体とするもので、一部にシルトを含む。地山は古琵琶湖層群上野黒瀬層部層と呼ばれる堆積層と考えられ、比較的粒度の粗い砂質の部分が沖打越1号墳の立地する丘陵を形成している。

北側斜面では、堆積が2mにも及ぶ箇所がある。地山が脆いこともあり、丘陵の崩落とそれによる堆積が顕著だったことが分かる。出土品は第1-10層に中世の遺物が含まれるもの、第11-13層では古墳時代の遺物に限られた。なお、これらの層のうち古墳の盛土と判断できる層は確認できなかつた。

b 南側斜面

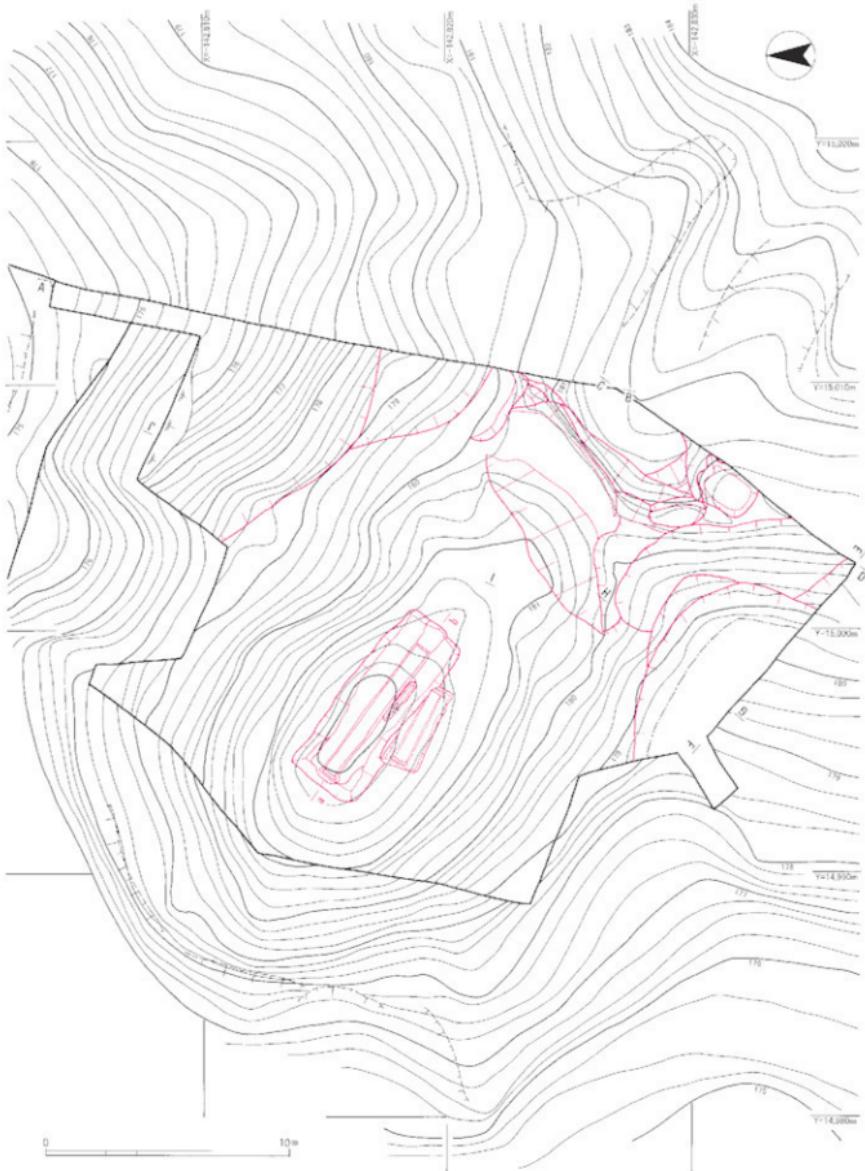
南側斜面は、沖打越1号墳の立地する丘陵の南斜面をさす（第8図C-F間）。基本層序は北側斜面と類似するが、緩斜面のために中世墓関連の遺構がいくつか形成されている。したがつて、北側斜面と異なる特徴を中心に南側斜面の土層を見ておく。

表土下では凹地に堆積した状況を示す第18-19層、これらの下では第20-23層が確認された。これらの層は北側斜面で確認された第2層に類似する第26層よりも上層である。この点から比較的新しい時期に堆積したと想定される。

南側斜面では東周溝に接して土坑が検出されており、その堆積層が第24・25層である。土坑からの出土品が確認されなかつたため、時期は不明である。第26層より下の堆積状況は南壁での観察が中心となる。第27-29層は大雨の度に崩落を繰り返した堆積土で、このうち第29層は幾つもの水平堆積が観察され、第



第5図 調査区周辺地形測量図 (1 : 300)



第6図 沖打越1号墳調査後墳丘測量図 (1:200)



第7図 沖打越1号墳填丘復元図 (1 : 300)

2層と類似する。この第29層の下端が中世の遺構面に相当する。

第29層の下には第30・31層が確認された。このうち第31層からは古墳時代前期の高坏（第18図41）が1点出土した。流れ込みと考えられるが、坏部の大半が残存していることから、近隣の高所に当該期の填丘墓・集落などの存在が推測できる。第30・31

層には中世の遺物が含まれないことから、中世より前代、古墳時代に堆積した可能性が考えられる。

さらに下層には赤褐色系の色調を呈する第32・33層が確認され、これらの堆積土の下で地山の第34層が確認された。第32・33層において明確な遺物は認められなかった。

北側斜面(A-B断面)

[表土] 9. 10/96/8 明黄地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

1. 7.5/96/1 黄灰 中粒砂

[中世の遺物を含む層] 2. 7.5/96/8 程 中粒砂～粗粒砂 (シルトやや混じる)

cm 別度の白色砂が水平に施す) 3. 10/96/6 明黄地 細粒砂 (シルトやや混じる)

4. 10/97/6 明黄地 中粒砂～粗粒砂 (シルトやや混じる)

5. 10/95/8 黄地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

6. 7.5/96/8 程 細粒砂 (シルト混じる)

7. 10/95/8 黄地 細粒砂 (シルト混じる)

8. 7.5/95/6 明地 中粒砂～粗粒砂 (シルト混じる)

[古墳時代の遺物を含む層] 11. 10/93/4 明地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

10. 10/94/4 に5% 黄地 細粒砂 (シルトやや混じる) 地
100m 来と考へた長径) 1 [古墳時代の遺物を含む層] 100m

100m 來と考へた長径) 1 cm 別度の繊維状の纖維を含む)

11. 10/93/4 明地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

12. 7.5/96/8 黄地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

13. 10/95/8 黄地 細粒砂～中粒砂 (シルトやや混じる)

14. 7.5/96/8 程 細粒砂 (シルト混じる)

15. 10/91/6 黄地 細粒砂～粗粒砂 (しまりあり)

16. 10/91/6 黄地 細粒砂～粗粒砂 (しまりあり)

17. 7.5/95/8 明地 細粒砂～粗粒砂 (しまりあり) し
まりあり)

18. 10/95/8 黄地 シルト～粗粒砂 しまりややあり

19. 10/95/6 明黄地 粗粒砂 (洪水砂) シルト混じる

20. 10/95/6 明黄地 細粒砂～粗粒砂 (シルトやや含む)

21. 10/95/4 に5% 黄地 細粒砂 (シルトやや含む)

22. 10/95/6 黄地 中粒砂 しまりやや含む)

23. 10/95/4 に5% 黄地 細粒砂～中粒砂

24. 10/97/6 明黄地 砂質土 (細粒砂混じり)

25. 10/95/6 明黄地 中粒砂～粗粒砂

26. 7.5/96/4 に5% 黄 地 細粒砂～粗粒砂 (洪水砂)

27. 2.5/96/6 明黄地 中粒砂質シルト (洪水砂)

28. 10/95/6 明黄地 粗粒砂質土 (洪水砂)

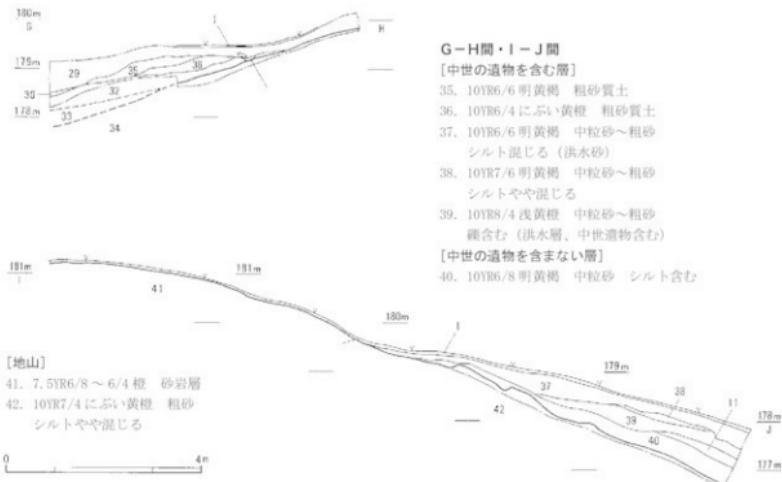
29. 10/95/4 に5% 黄地 粗粒砂および粗粒砂質シルトの

互層 (洪水砂)

30. 10/95/8 黄地 粗粒質シルト

31. 10/95/4 黄 地 相砂質土 岩混じる

第8図 調査区土層図(1) (1 : 100)



第9図 調査区土層図(2) (1:100)

c 墳丘南北断面

墳丘の南北断面を図化した土層である（第9図GーJ間）。東壁・南壁土層と同様の基本層序であるため、異なる点のみ報告しておく。第35・36層は明黄褐色からにぶい黄桜色の色調を呈する粒度の粗い砂質土である。中世墓の造成に伴う堆積層ととらえておく。

北側斜面では、墳丘付近において表土を除去すると直ちに地山が検出された。標高179m付近において傾斜が緩くなり、それより低い部分において堆積土が確認できた。したがって、墳丘付近は堆積土の流出が激しいことがうかがえる。

第37～39層は、明黄褐色から浅黄桜色の色調を呈し、中粒砂から粗粒砂で構成される粒度の粗い堆積層である。東壁の第2層におよそ相当する。第39層の下には第11層、さらに第40層が確認できた。この第40層は東壁の第12層に相当する。出土遺物として、第39層までに中世の遺物が含まれる。

d 東周溝の東西土層

東周溝は大量の土砂によって埋没していたために調査前の平面図では認識できなかった遺構である。東

G-H間・I-J間

[中世の遺物を含む層]

- 35. 10YR6/6 明黄褐色 粗砂質土
- 36. 10YR6/4 にぶい黄桜 粗砂質土
- 37. 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂～粗砂
シルト混じる（洪水砂）
- 38. 10YR7/6 明黄褐色 中粒砂～粗砂
シルトやや混じる
- 39. 10YR8/4 浅黄桜 中粒砂～粗砂
礫含む（洪水層、中世遺物含む）

[中世の遺物を含まない層]

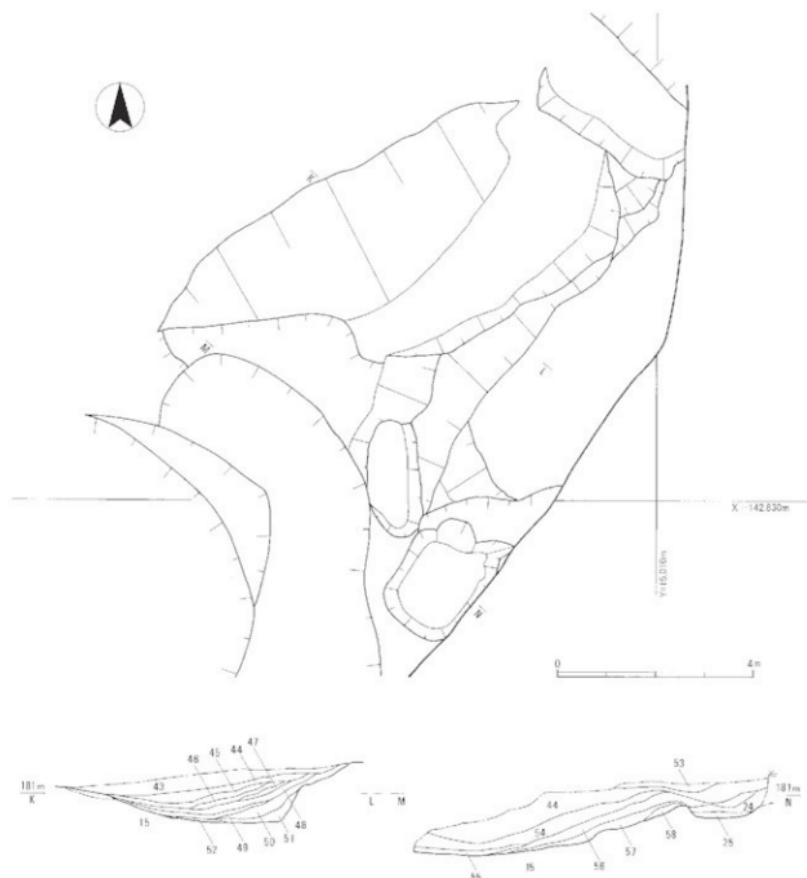
- 40. 10YR6/8 明黄褐色 中粒砂 シルト含む

周溝では表土を除去すると、砂質の強い明黄褐色土で構成される第43層が検出された（第10図K-L間）。この層では幾つもの水平堆積が観察できる。北側斜面の第2層と類似した堆積状況といえる。第44～47層は黄色を基調とする砂質土である。このうち第44層は、第20層に対応する。第43～47層において中世の遺物が観察できる。

第47層の下層では第48～51層が確認された。黄褐色系砂質土を基本とするが、下層に向かうにつれて灰色の色調が強くなり、粒度も粗くなる傾向にある。このうち第48・49層は、レンズ状の堆積状況を示しており、周溝全体を覆うように堆積する。第50層は丘陵側からの堆積が顕著で、東周溝上端を埋没させている。第51層は地山の崩落土と考えられる。これらの層から古墳の築造後、短期間のうちに周溝の埋没が始まったことがうかがえる。

第51層の下には、ごく薄い第52層が墳丘側のみで確認された。この第52層の上面において墳丘から流れ込むように埴輪・土器などが多数出土した。

これらの堆積状況から、古墳築造後、墳丘側から



K-L間

【中世の遺物を含む層】

43. 2.5Y6/8 明黄褐色 土 (1cm以下の円縁を含む。砂層との互層 (水平堆積)。砂質多い)
 44. 2.5Y7/8 黄 砂質土 (1cm以下の円縁を含む。砂質)
 45. 2.5Y7/8 黄 砂質土 (第44層より円縁少ない。砂質)
 46. 2.5Y7/8 黄 砂質土 (1cm以下の円縁を含む。第44層に類似)
 47. 2.5Y5/6 黄褐色 砂質土 (1cm以下の円縁を含む。砂質)
- 【古墳時代の遺物を含む層】
48. 2.5Y5/4 黄褐色 砂質土 (1cm以下の円縁を含む。2.5Y4/4 オリーブ褐色土を含む)
 49. 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質土 (1cm以下の円縁・埴輪・土器を含む。砂質)

50. 2.5Y5/6 黄褐色と 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂質土 (1cm以下の円縁を含む。粗砂多い)
51. 7.5Y6/1 灰と 2.5Y7/8 黄 粗粒砂質土
52. 2.5Y7/6 明黄褐色 中粒砂

M-N間

【中世の遺物を含む層】

53. 10YR7/8 黄褐色 砂質土 (赤褐色混じり。粗粒砂多い)
 54. 10YR7/8 黄褐色 砂質土 (粗砂多い)
 55. 10YR6/6 明黄褐色 砂質土 (褐色粒混じり。粗粒砂多い)
 56. 5YR5/8 明赤褐色 砂質土 (粗粒砂多い)
- 【中世の遺物を含まない層】
57. 10YR6/6 明黄褐色 砂質土 (粗粒砂多い)
 58. 記入もれ

第10図 沖打越1号墳東周溝周辺 平面・土層断面図 (1:100)

埋土がまず流入したといえる。その後、第50・51層にみられるように丘陵側から堆積した。相対的に丘陵側からの供給が多かったことが分かる。出土遺物については、第47層より上層で中世の遺物が確認され、下層は古墳時代の遺物に限定された。

a 東周溝南側の東西土層

東周溝内の堆積状況と比較するために、溝の南側において東西方向の土層を記録した（第10図M-N間）。第54・55層は砂質土で第29層に対応する。第56層は調査区東端で検出した土坑の埋土の一部をなす。第57層は明黄褐色系の色調を呈し、この層の堆積後に土坑が形成されたことが分かる。出土遺物は、第53～55層において中世の遺物が確認された。

f 小結

以上をまとめると、表土の下には、中世の遺物を含む第2～10・18～29・35～39・43～47・53～55層、古墳時代の遺物を含む第11～13・48～52層、遺物を含まない第14・32・33層、地山の第15～17・34・41・42層等にまとめることができる。中世の遺構面は第29層下端、古墳時代の遺構面は、ほぼ地山直上ということができる。なお古墳の盛土とみられる土層は確認されなかった。

3 墳丘

沖打越1号墳では調査の結果、丘陵と古墳を画する周溝、2つの堅穴系の埋葬施設を検出した。しかし、古墳に伴う盛土は残存しないことが判明した。この点をふまえて、平面測量図をもとに等高線の傾斜変化をとらえるとともに、検出した周溝から墳形・規模を復元したい。

a 基底ラインの推定

墳丘の盛土は既に流出していたため、等高線の変化から墳頂を求めてみよう（第6図）。まず北側斜面では標高175.8～178.6mにおいて急傾斜が認められるのに対して、標高178.6～179.4m付近では傾斜が緩やかになる。さらに標高179.4～181mにおいて再び急傾斜となり、墳頂の平坦面に至る。南側斜面では、標高179m付近でわずかに傾斜が緩やかになる。

調査区外では、北西の178～179.25mにおいて緩

傾斜が観察できる。調査区の西では墳頂に向かう小さな谷状地形が認められる。これは小規模な地滑り等による自然崩落・流出で生じた地形と推測される。この点から、谷状地形より南の標高178.0～178.75mで観察できる張出し状の地形は、自然崩落・流出以前の地形といえる。標高178.75mより高い部分では等高線が北北西に伸びていることから、上部と下部で反映している地形が大きく異なっている。したがって、標高179m付近から上部を墳丘と想定できる。以上の諸点から、沖打越1号墳は標高179m付近を基底としていたと判断したい。

b 東周溝

平成22年度の調査で新たに検出した遺構で、調査前は大量の土砂によって埋没しており、古墳と丘陵を結ぶ尾根状を呈していた。東周溝は丘陵先端を利用して古墳を築造した際に掘削されたと考えられる。周溝の範囲は、墳丘の自然崩落・流出が著しいために、明確にとらえることができなかつた。ただし、現地形から判断すれば、周溝が全周する可能性は低く、盆地に面した部分は地山削り出しによって墳頂を整形していたと推察しておく。

東周溝は上端幅約4.5m、下端幅1.5～2m程度、深さ80cmである。墳丘側の傾斜はなだらかで、斜面上端は直線状を呈し、下端は円弧を描くようにめぐる。丘陵側は角度60度以上の急傾斜で、上端・下端ともに両端が墳丘側に向かう「コ」の字状を呈する。埋没過程の検討から、「コ」の字状の地形は周溝掘削時を反映していると考えられる。東周溝の特徴から墳丘側の下端を墳頂とすることが許されよう。

c 墳丘規模

以上の点から、沖打越1号墳の基底は標高179m付近に求めることができ、東周溝では墳丘側斜面の下端を墳頂としていたと考えられる。この場合、墳丘規模は南東～北西方向の長軸で約24m、南西～北東方向の短軸で約17mの規模を有する。古墳の基底は東西において高低差が生じるが、これは丘尾切削によつて古墳を築造したためと判断される。

こうした評価と盛土が確認できなかつた点を考慮すれば、沖打越1号墳の墳頂は地山の削り出しによつて形成されたと推察される。

d 墳形

上記において墳丘規模が確定したので、次に墳形の手がかりを示しておく。調査後の平面図を一見すると楕円形墳ともとらえうる。楕円形墳は古墳時代前期から中期前半の丹後・丹波地域で確認されている¹⁰⁾が、地域が限定される。そこで平面図をさらに検討するとともに、東周溝における埴輪等の出土状況も加味しながら墳形をとらえてみよう。

まず南側斜面では、埋葬施設南側の標高180.2 mにおいて等高線がくびれ状にめぐる。ただし、中世墓関連の造成に伴って、古墳時代の旧状が改変されている可能性は考慮しておく必要がある。

一方、埋葬施設1の北東と東周溝の北西において谷状地形がみられる。前者は標高179.6 m～180.2 m、後者は標高180.4 m～180.8 mの等高線に反映している。両者はとともに自然崩落・流出によって生じた地形と考えられる。したがって、北側斜面では墳形を確定するまでの手がかりが既に失われていると考えておく。

次に、東周溝における埴輪・土師器等の出土状況について検討してみよう。東周溝の埴輪・土師器・鉄器・砥石は、墳丘側から流れ込むような出土状況を示す。この点から沖打越1号墳には埴輪を並べていたと考えられる。さらに土師器・鉄器・砥石の出土から、東周溝の古墳側には祭壇のような空間が設けられていたと推察できる。東周溝の丘陵側斜面が直線状である点も考慮すれば、沖打越1号墳は円丘部に突出部を設けた造出し付円墳に復元できる。この場合、円丘部は直径19 m、造出し部は5×10 mとなろう。ただし、造出し部を丘陵側に設けたことになり、やや不自然な印象を受けることが当復元案の難点といえる。

e 小結

上記の評価が許されるならば、沖打越1号墳の墳形・規模は、きわめて不定形ながらも墳丘長24 m、円丘部長19 m、造出し部長5 mといえる。古墳の成形は、基底部を中心とした地山削出しを基本としていたと考えられる。規模が異なるものの、兵庫県茶すり山古墳のような事例¹¹⁾が思い描かれるが、地山の軟弱さもあって、成形の痕跡が不明瞭である。

なお、沖打越1号墳において盛土は確認できなかつ

た。古墳時代中期以降は、粒度の異なる盛土を互層にすることで摩擦係数を高めたり、高さ1 mほどの小丘を多数築いてその間を埋める工法の採用などによって、強固な盛土を築くようになる¹²⁾。本墳で盛土が確認されなかつたことを勘案すれば、仮に盛土が行われていた場合も、簡便な工法で行われていたことだろう。

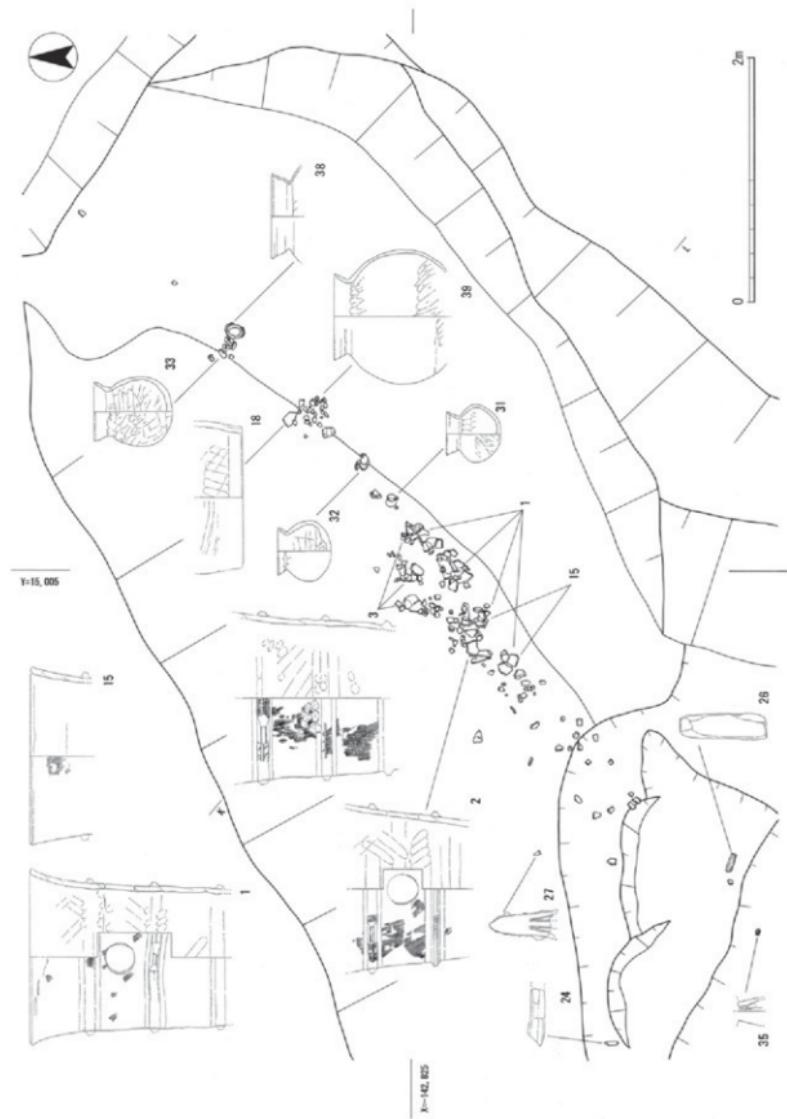
4 東周溝の遺物出土状況

沖打越1号墳では、東周溝において多数の出土品が確認された（第11図）。これらは、周溝底のなかでも墳丘側に偏っており、古墳築造後にわずかに形成された堆積層（第10図第52層）で確認された。出土位置・層位的関係から、古墳築造当初からこの地点に据え置かれたものではなく、墳丘方向からの流れ込みの結果と判断される。底部と考えられる円筒埴輪片の出土が限られていることも、この判断を支持する証左であろう。

東周溝の出土品として円筒埴輪・土師器・鉄製品・砥石などがある。図化した資料は土師器甕2点、小型丸底壺3点、高杯1点、円筒埴輪10点、不明形象埴輪1点、鐵鏃1点、小刀あるいは刀子の破片1点、砥石1点である。型式学的な検討から時期が判別できる資料は、いざれも古墳時代前期後半から中期前半に絞れる。東周溝の出土品は同時期性の強い資料といえる。

次に東周溝の出土状況について詳しく検討してみたい。元位置を保っていないため、墳丘上での配列などを読み取ることは難しいが、溝中央付近に円筒埴輪がみられ、北側で土師器がまとまる傾向にある。円筒埴輪が密接して並べられて、その内外に土師器などが配置されていた場合、東周溝の土師器と折り重なるような出土状況を示すだろう。しかしそのような出土状況は確認されなかつた。したがって、沖打越1号墳での円筒埴輪の配置点数は非常に限られていたと推測できる。なお、東周溝以外でも円筒埴輪が出土していることから、沖打越1号墳では墳頂に円筒埴輪がめぐらされていたが、その間隔は広かつたと想定しておく。

この他、東周溝と埋葬施設1墓壙内再掘削埋土（第



第11図 沖打越1号墳東周溝出土状況図 (1:40)

12図第15～20層)の埴輪を比較すると、後者において赤色顔料が残り、摩滅も少ないという特徴が得られた。この点から、東周溝の出土品において摩滅が進行するよりも前に、埋葬施設1の再掘削が行われたと推察される。よって、埋葬施設1では初葬と近い時期に再掘削が行われたと考えておきたい。

5 埋葬施設

a 基本層序と埋葬施設の先後関係

沖打越1号墳では、2つの埋葬施設が確認された(第12・13図)。いずれも墓壙を設けて木棺を直葬する埋葬施設で、東西方向に主軸をとる。埋葬施設1・2は、墓壙が一部重複していたために先後関係を把握できた。土層断面の詳細な観察もふまえると、埋葬施設1の形成→埋葬施設2の形成→埋葬施設1の再掘削という関係をとらえることができた。

b 土層断面

土層断面は、埋葬施設の長軸とそれに直交する方向で作成した。土層は大きく分けて、中世墓に関連する第4～8層、埋葬施設1の再掘削後に堆積した第15～20層、埋葬施設1の木棺に関連する第21～27層、埋葬施設2の木棺に関連する第29～32層、埋葬施設1の最初の埋土に相当する第33～37層にまとめることができる。

なお、土層断面図は平成20年度試掘による図面を活用して、第1・2層を合成したために、一部整合を欠く。ただし、第2層は中世墓やそれに関連する土層と考えられるため、大勢を把握する上で大きな問題はなかろう。以下では、土層のまとまりごとにその特徴を示しておく。

第1・2層の下層では第4～8層が確認された。褐色系の色調で細粒砂から中粒砂を主体とする。これらの層は中世墓とそれに関連する土層である。

中世墓に伴う土層の下には黒褐色粗粒砂の第9層が確認された。第9層は埋葬施設1主軸に沿うように確認された細長い凹地への堆積層である。この第9層からは標高181.6mにおいて古墳時代の刀子が出土した。この刀子は切先を西、背を南に向けて、ほぼ水平の状態で出土した。

第9層の下には、黄褐色の粗粒砂で構成される第

15層が広い範囲で確認された。この層は細分が可能だったが、細分に意義を見出せなかつたため、ひとつのまとまりとして扱った。第15層からは埴輪の細片と鉄鎌1点が検出された。このうち鉄鎌は古墳時代の直刃鎌であり、標高181.7m付近において出土した。先述の第9層の刀子とともに、木棺の主軸に沿うようにして同程度の高さで検出された。第9・15層は色調が異なるものの、刀子・直刃鎌の出土状況から、再掘削後の埋め戻しに際して何らかの祭祀が執り行われた可能性が考えられる。

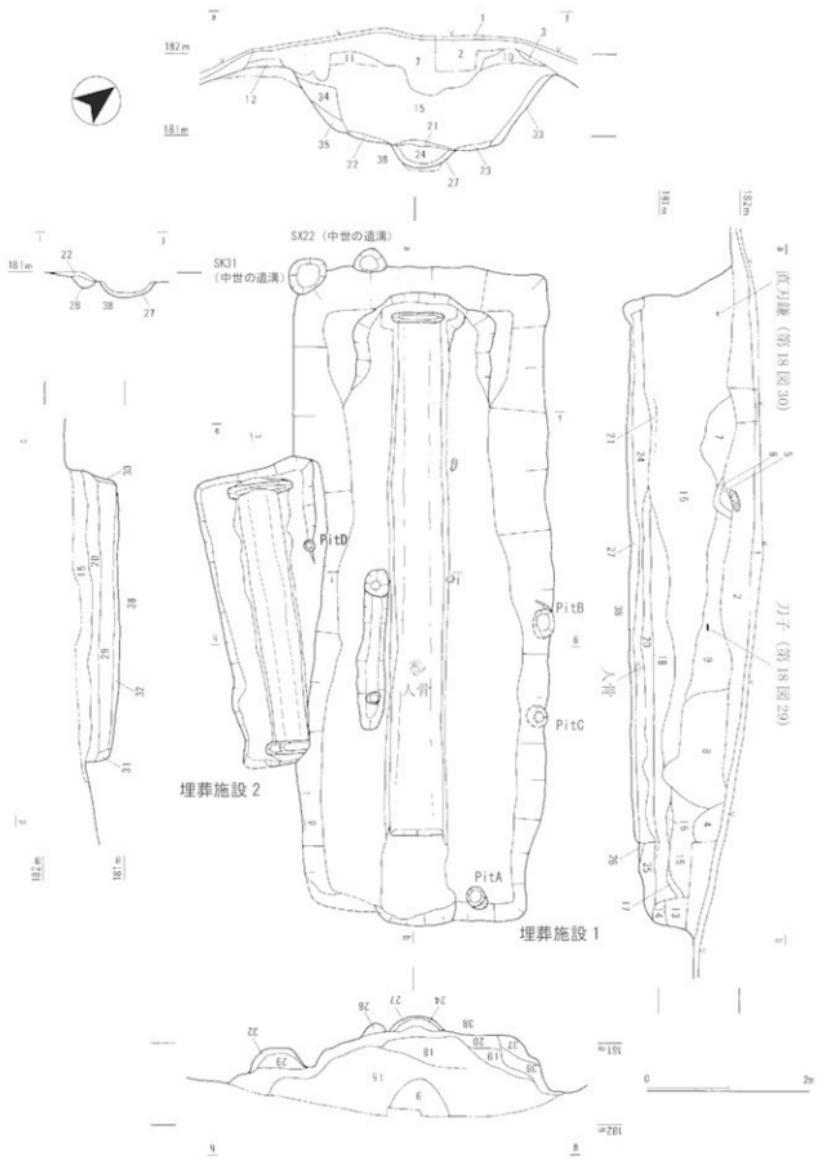
この下層にある第16～20層も第15層と同じ性格の堆積層である。特に第18層は色調・粒度において第15層に類似している。第15～18層に関しては埴輪片が含まれていることから、埋葬施設1の再掘削および再度の埋め戻しは古墳がいったん完成した後に行われたと考えられる。

埋葬施設1の木棺に関連する土層として第21～27層があげられる。このうち第21層はごく一部でとらえたに過ぎないが第22・23層の流出土あるいは木棺を被覆していた可能性が考えられる。第22・23層は埋葬施設1の西半部で認められた厚さ10cmほどの土層であり、他と異なってしまいを有していた。この点から両層の上面は作業面として機能していた可能性を想定できる。第24層は埋葬施設1の木棺内埋土、第25・26層は木棺裏込土、第27層は木棺を据える際に安定化を図った棺底の置き土と考えられる。

埋葬施設1の木棺南側では第28層を埋土とする南側土坑が検出された。この土坑は第22層の下で検出されたことから、埋葬施設1の再掘削の初期段階か、埋葬施設1の最初の掘削に伴う遺構といえる。

埋葬施設2に関しては、第20層下において木棺に關わる第29～32層が確認された。第29層は木棺内埋土、第30・31層は木棺の裏込めに相当し、第32層は棺底の置き土にあたる。なお、第20層は埋葬施設2付近のみ色調がやや異なった。この部分は埋葬施設2の埋土として分離できる可能性があったが、明確な分層が困難であったため、一括りとした。

埋葬施設2の形成よりも先行する土層として、埋葬施設1の第33～37層が確認された。これらの層は埋葬施設1の最初の掘削・埋土に伴うもので、いずれも灰黄褐色の粗粒砂を主体としており、埴輪片



第12図 沖打越1号墳埋葬施設1 平面・土層断面図 (1:60)

埋葬施設 1・埋葬施設 2

[表土]

1. 7.5YR3/2 黒褐色 中粒砂
- [中世墓に関連する土層]
2. 橙色砂質土 (試掘時)
3. 7.5YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂
4. 7.5YR4/4 棕褐色 中粒砂
5. 7.5YR5/6 明褐色 中粒砂
6. 7.5YR4/6 棕褐色 中粒砂

7. 7.5YR5/4 にぶい褐色 細粒砂
8. 7.5YR5/6 明褐色 粗粒砂
- [古墳時代～古代に形成された土層]
9. 10YR3/1 黒褐色 粗粒砂
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
11. 10YR5/2 灰褐色 中粒砂
12. 7.5YR6/8 橙褐色 細粒砂
13. 10YR5/8 黄褐色 中粒砂

14. 10YR4/6 棕褐色 中粒砂

[埋葬施設 1 の再掘削後の埋土]

15. 10YR5/8 黄褐色 粗粒砂
直刀鎌・埴輪を含む
16. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒砂
17. 10YR4/4 棕褐色 粗粒砂
18. 10YR5/8 黄褐色 粗粒砂 長径 1 cm 以下の繩を 2% 程度含む
19. 7.5YR6/8 橙褐色 粗粒砂

20. 10YR6/6 明黄色 粗粒砂 南側付近では 7.5YR6/8 橙の色調を呈する

[埋葬施設 1 の北側木棺に関連する土層]

21. 10YR6/4 明黄色 粗粒砂 (2.5Y7/1 白灰 中粒砂混じり)
22. 10YR6/8 明黄色 粗粒砂 しまりややあり
23. 10YR6/6 明黄色 粗粒砂 しまりややあり

24. 10YR6/6 明黄色 細粒砂～中粒砂
粘質ややあり (木棺内埋土)

25. 10YR5/8 黄褐色 粗粒砂 長径 2 cm 以下の繩を 5% 程度含む (木棺裏込)
26. 10YR7/6 明黄色 細粒砂 粘質ややあり (木棺裏込)

27. 10YR7/2 にぶい黄褐色 細粒砂～中粒砂
長径 1 cm 以下の繩を 2% 含む
(棺底の置き土)

[南側土坑に関連する土層]

28. 10YR5/6 黄褐色 中粒砂～粗粒砂 粘質ややあり

[埋葬施設 2 の木棺に関連する土層]

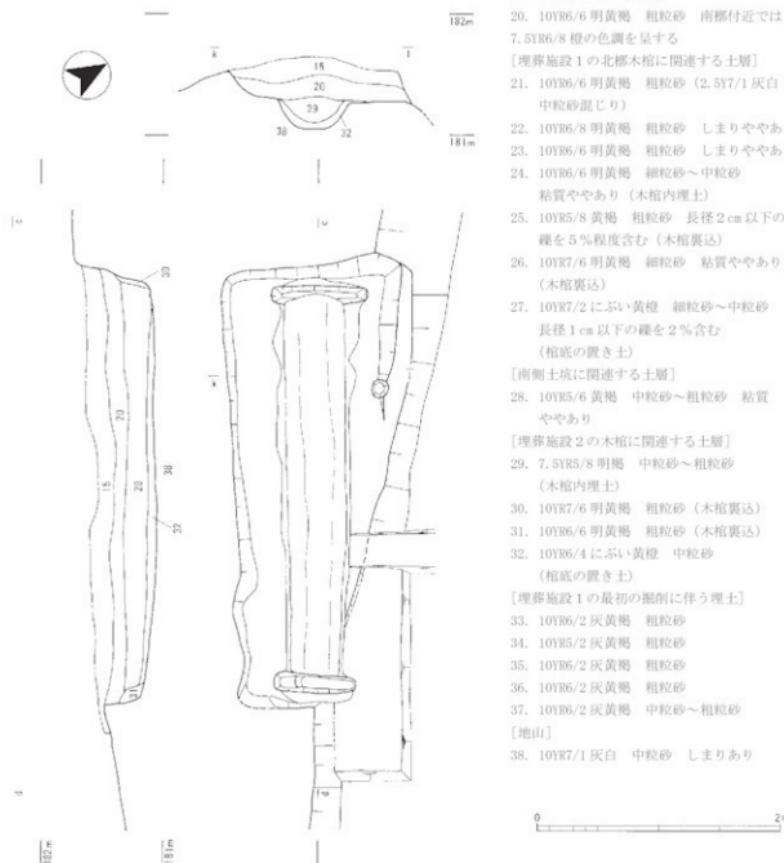
29. 7.5YR5/8 明褐色 中粒砂～粗粒砂 (木棺内埋土)
30. 10YR7/6 明黄色 粗粒砂 (木棺裏込)
31. 10YR6/6 明黄色 粗粒砂 (木棺裏込)
32. 10YR6/4 にぶい黄褐色 中粒砂
(棺底の置き土)

[埋葬施設 1 の最初の掘削に伴う埋土]

33. 10YR6/2 灰褐色 粗粒砂
34. 10YR5/2 灰褐色 粗粒砂
35. 10YR6/2 灰褐色 粗粒砂
36. 10YR6/2 灰褐色 粗粒砂
37. 10YR6/2 灰褐色 中粒砂～粗粒砂

[地山]

38. 10YR7/1 灰白色 中粒砂 しまりあり



第 13 図 沖打越 1 号填埋葬施設 2 平面・土層断面図 (1 : 40)

は含まない。第33～37層は地山の第38層に似ていることから、墓壙を掘削した際に生じた土をそのまま埋土に利用したと考えられる。

以上の土層が確認されたが、全体的な特徴として粒度が粗いこと、しまりがほとんど認められないこと、構成物・粒度・色調が地山に類似していることがあげられる。したがって、埋土は墓壙掘削で生じた土を利用していたと考えられる。さらに埋葬施設2の形成や埋葬施設1の再掘削において、埴輪を含む表土などの土と混ぜ合わされた結果、黄褐色系の色調を帯びたと推測される。出土遺物は第1～7層において中世の遺物、第1～18層において古墳時代の鉄製品や埴輪片が確認された。

c 埋葬施設1

埋葬施設1は竪穴の墓壙をもち、木棺を直葬する埋葬施設である（第12図）。埋葬施設1は2度掘削されている。最初の掘削に伴う墓壙は上端の長軸8.17m、短軸3.15m、下端の長軸7.64m、短軸2.02m、深さ1.02mの規模を誇り、断面は逆台形を呈する。主軸は座標北に対して53度西に傾く。土壟断面の検討から、墓壙は検出した最も高い部分か、それよりわずかに高い位置から掘り込まれたと推測される。再掘削に伴う墓壙は、ほぼ同じ規模だが上端短軸2.54m、下端短軸1.72mであり、短軸においてやや縮小する。検出された木棺がどちらの墓壙に帰属するのかは後述するとして、ひとまず、以下に木棺の特徴をまとめておく。

墓壙底の中央には、木棺を安置するために長さ7.6m、最大幅81cm、断面半円形の掘り込みが設けられている。この掘り込みに長さ6.5mの木棺が据えられたが、西側に偏っているため、東端から約1mに残余のスペースが生じている。

棺床をなした掘り込みは東西において形態が異なる。東端は同じ幅を保ちながら墓壙東壁に突き当たり収束する。一方で、西端では長軸に直交する方向に両端が15cm突出しており、さらに10cmほど深く掘り込まれている。これは木棺の長側板を小口板で挟み込む形態であったためと推測される。

木棺は掘り込みの断面形から削竹形木棺と考えられる。木棺は長さ6.5m、東端の幅66cm、西端の幅52cmの規模を有する。西小口では、長側板をはさむ

ようにして小口板が据えられている。東小口では小口板の設置方法について手がかりが得られなかったが、長側板が小口板を挟み込んでいた可能性を想定すべきかもしれない。なお、木棺設置の際には、棺底に安定化を図るための置き土、両小口に裏込土が施されていた。

この木棺内では、副葬品・赤色顔料は検出されなかった。なお、墓壙東端から西へ3.2m付近において人骨が検出されており、遺骸は棺の東寄りに安置された可能性がある。棺を据えた際の掘込みは、東側において標高180.76m、西側において180.68mであり、東側の方が8cm高い。棺の幅も東側の方が14cm広いことを勘案すれば、東頭位の可能性が高い。ただし、後述の南棺では西頭位と推測されることから、両者について整合性が必要となる。

この他、埋葬施設1の墓壙内における構造として南側土坑が検出された。この構造は、東西方向に主軸をもつ長さ1.96m、幅約30cm、深さ最大21cmの細長い土坑である。この土坑からの出土物は確認されなかった。この土坑は埋葬施設1の最初の掘削に伴うのか、再掘削に伴うのかが明瞭ではないため、その性格・評価は不明とせざるを得ない。

d ビット

埋葬施設1の墓壙の北東隅に1ヶ所、北壁面に2ヶ所、埋葬施設2との間に1ヶ所の4ヶ所でビットを検出した（Pit A-D）。Aは直径24cm、垂直かやや北東に傾く。Bは長径35cm、垂直かやや南側に傾く。Cは長径27cmで南傾する。Dは直径13cmと小さく、北傾する。埋土はA・Dはにぶい黄橙系色の繊粒砂から粗粒砂、B・Cが灰黄褐色の繊粒砂から中粒砂・粗粒砂で構成されている。後者の方が灰色の色調を強く帯びており、両者は埋葬施設1墓壙の最初の埋土にあたる第33～37層や地山の第38層に類似している。

検出したビットの位置関係と傾きから、掘立柱建物などを想定することは困難であろう。埋土の特徴を考慮すれば、埋葬施設1の最初の掘削・埋葬と近い時期にビットが設けられたととらえておきたい。

このビットの性格については、立柱を伴う葬送儀礼などの可能性が考えられる。木柱事例とその性格・研究史については岡林孝作氏が的確にまとめている¹⁶⁾。

このなかで岡林氏は、棺の周囲を取り囲むように並ぶ柱・杭について、埋葬とそれのかかわる儀礼の場に仮設の遮蔽物を設けて区域標示する場合があることを指摘している。沖打越1号墳の事例がこれに該当する可能性もある。いずれにしても沖打越1号墳における立柱の評価は、今後の研究に託されよう。なお、埋葬施設1の再掘削が最初の墓壙よりわずかに狭い範囲を見事に掘削しており、何らかの目印があったことが推察される。立柱はこの目印として設置された可能性も考慮すべきといえる。

e 埋葬施設2

埋葬施設1の形成後に埋葬施設2は造営された。その後、埋葬施設1が再掘削されるに及んで、埋葬施設2の墓壙が一部遺失している。墓壙は検出した面において長さ3.64m、幅1.51m、深さ64cmであり、墓壙底面では長さ3.5m、幅1.3mの規模を有し、断面は逆台形を呈する。主軸は座標北に対して60度西、埋葬施設1主軸に対して7度南にとる。

墓壙底には、長軸に沿って断面半円形の掘り込みが確認できた。この掘り込みは木棺を安置するための回みで、第32層は棺底を安定させるための置き土、第30・31層は木棺裏込土と考えられる。

木棺は断面形から割竹形木棺と考えられ、長さ3.37cm、西側の幅51cm、東側の幅41cmの規模を有する。木棺の両端には、溝状の掘り込みが設けられていることから、長側板を挟むようにして小口板が据えられていたと考えられる。西小口では長側板と小口板がほぼ同じ高さか、わずかに小口板が浅い位置に据えられている。東小口では、溝状掘り込みが段を有していることから、小口板が凸字状を呈していた可能性がある。ただし段は南側でのみ確認されているにとどまるため、不定形な小口板の形状にあわせて掘り込みが行われたのみかもしれない。木棺内において、副葬品ならびに赤色顔料の塗布などは認められなかった。棺幅から推測すると被葬者の頭位は西頭位となる。しかし、棺底は東小口のほうが4cm高いことが難点といえる。埋葬施設2は盃掘されていなかつたが、人骨・副葬品・赤色顔料などは確認されなかった。

f 円筒埴輪の配列

沖打越1号墳では円筒埴輪・形象埴輪が出土した。いずれも原位置を保っていないこと、埴輪を据える

際の掘り形が検出されなかつたことから、配列等に関する手がかりは得られなかつた。埴輪の多くは東周溝で出土したが、埴丘西側においても少量ながら確認できた。自然崩落・流出によって埴丘の多くの部分が遺失しているものの、埴頂には円筒埴輪が巡っていたと想定できるだろう。ただし、東周溝における出土状況から埴輪を密接して並べていたとは考えにくく、芯々間距離を広くとった配置がなされていたと考えられる。

g 埋葬施設・堆積層の形成過程

以上から、次のような埋葬施設の形成順序が復元できる（第14図）。

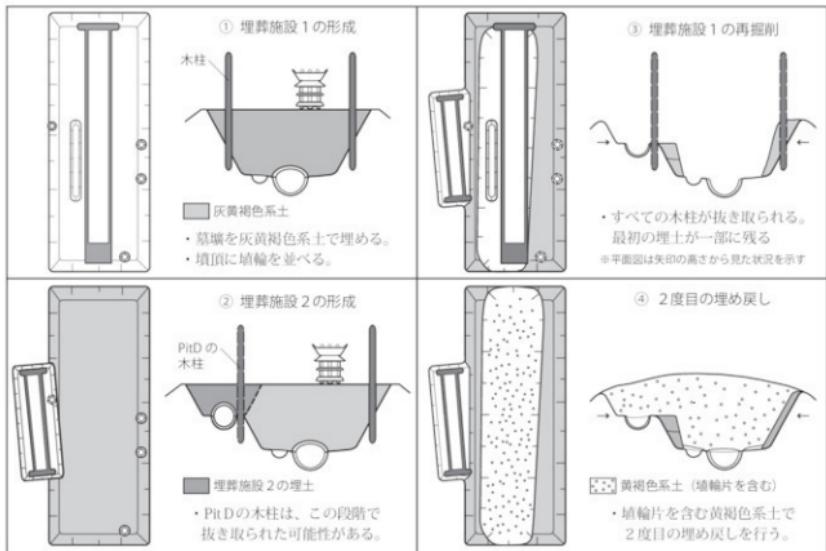
埋葬施設1の形成 埋葬施設1の墓壙が掘削され、最初の埋葬が行われる。埋め戻しの際には、木柱が数本立てられたと推察される。埋土は、地山由来の灰黄褐色粗粒砂で、しまりはほとんど認められなかつた。細かな土層単位も認められなかつたことから、墓壙の埋め戻しはそれほど丁寧ではなかつたと推測される。

埴輪の配置 墓頂には円筒埴輪が配列される。この埴輪は埋葬施設1の再掘削において一部損壊したようで、埋土に混じっていた。なお、埋土に形象埴輪片が含まれていることから、家形埴輪等の配置も考慮する必要がある。

埋葬施設2の形成 次に埋葬施設2が形成される。なお、埋葬施設2墓壙の掘削に際してピットDの木柱は抜き取られた可能性がある。この段階までに木柱がすべて抜き取られたと想定すれば、木柱は葬儀礼に伴うものと評価されよう。

埋葬施設1の再掘削 埋葬施設1が再度掘り返される。木柱がこの段階で抜き取られたと想定するなら、再掘削のための目印として据えられていたと評価できる。埋め戻しに用いられた黄褐色系の粗粒砂は、地山由来の灰黄褐色粗粒砂に表土などの堆積土が混じたものと推測される。2度目の埋め戻しにおいても、しまりを有する土層や細かな単位を示す堆積状況は確認できなかつた。

なお、この埋め戻しに伴う土層には、古墳時代の鉄器と埴輪片が混じるもの、他の時代の遺物は含まれなかつた。埴輪片には、細かなハケメが観察できるものや赤色顔料が残るものが多いことから、風雨にさらされた期間は短いと考えられる。したがつ



第14図 沖打越1号埴輪施設形成過程

て、埋葬施設1の最初の形成から時間を探ることなく埋葬施設1の再掘削が行われたと考えられる。

次に、埋葬施設1の木棺の帰属時期について考えておきたい。埋葬施設1では、木棺設置のための掘り込みに対して木棺が1mほど短いことから、再掘削に際して新たな木棺が据えられた可能性を考えられる。掘り込みの東端が浅いことを積極的に評価すれば、最初の掘削に伴う木棺は、現状でとらえた木棺よりもわずかに高い位置に設置されていたが、埋葬施設1再掘削・木棺再設置によってすべて失われたと推測できる。検出した木棺の帰属時期を示す手がかりは非常に限られているが、ひとまず再掘削に伴うものと考えておきたい。なお、検出した木棺が最初の掘削に伴うものであったとしても、再掘削において木棺が乱されていない点を高く評価しておきたい。

最後に再掘削を行った理由について考えてみたい。再掘削の理由として、まず古墳時代の盗掘があげられる。しかし、墓壙底面や木棺が荒らされていないため、その可能性は低いといえる。次に改葬などの

葬制に伴う行為が想定できるが、人骨の出土をどのように評価するのかが課題として残る。いずれにしても、類例を集め、その評価を今後試みたい。

(高松)

＜註＞

- (1) 与謝野町編『加悦町史』資料編第1巻(2007年)
- (2) 兵庫県教育委員会『茶ナリ山古墳』(2010年)
- (3) 稲口吉文「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』1997年)
- (4) 同林孝作「木柱・木樋と葬送祭祀」『古墳時代の考古学』3、同成社、2011年)

V 沖打越1号墳の出土遺物

1 概要

沖打越1号墳に伴う出土遺物として、埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）、鉄製品（鐵・刀子・直刃鎌）、砥石、土師器（小型丸底壺・高杯・甕）などがある。これらは、いざれも古墳時代中期初頭（4世紀末頃）におさまる同時期性の強い一群である。これらは種類別に特徴をまとめ、各資料の出土位置は第1・2表に委ねたい。

その他、沖打越1号墳には伴わない繩文土器や土師器なども出土しており、あわせて報告する。

2 沖打越1号墳の遺物

a 円筒埴輪

沖打越1号墳の円筒埴輪は出土量が限られており、図化は細片を含めて21点にとどまる（第16・17図）。資料的な制約をふまえつつ、形態・器面調整などの要素ごとにまとめておく。なお、個別の特徴については第1表を参照されたい。

形態 円筒埴輪のうち最も遺存の良い1・3から、3条4段構成だったと推測される。全体の形状は寸胴で、口縁部は外反か直立、底部は直立かやや外方に傾く。透かし孔は円形が確認されており、突帶は台形を呈する。成形に関しては内輪接合が観察された。

法量 口縁部径は1・13・15が35～36cm程度、口縁部高は1・15において12cm程度の値を示す。胴部径は1において28～30cmで、1段につき1cmずつ拡大している。2では胴部径30～33cmで3cmの拡大がみられ、3では胴部径30～34cmで2cmずつ径が増す。突帶間隔については1～3において13cmの値を示す。

これらの値をもとにすれば、口径35～36cm、器高48cm以上、口縁部高12cm、突帶間隔13cm、底径29cmの円筒埴輪が復元できる。底部高が突帶間隔と同程度かやや広いことを考慮すれば、本来の器高は54cm程度だったと推定される。

口縁部 口縁部は緩やかに外反する1・15と、まっ

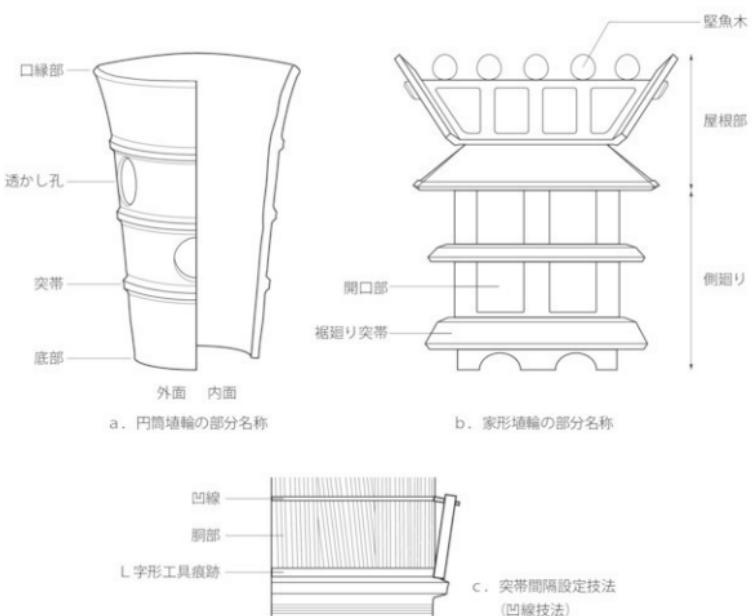
すぐ立ち上がる13・14が認められたが、外方へ屈曲する個体は認められなかった。端面は明瞭なものと不明瞭なものが認められる。なお、12は外反が著しく口径も大きいことから、朝顔形円筒埴輪の可能性を考慮すべきかもしれない。

突帶 突帶は断面台形状のものが多く、1・2・3・9がこれに該当する。石山古墳でみられる断面方形で突出度が高い突帶は認められず、8のような突出度のやや高い台形を呈するものが1点、1のような緩やかな台形を呈するものが19点、10のようなナデによって各辺がくぼみM字形に近い台形を呈するものが3点という被片での比率を示す。なお、11は形象埴輪に伴う小突帶の可能性もある。

突帶間隔設定技法 突帶間隔設定技法とは、突帶を一定の間隔をもって水平に貼り付けるために何らかの規格工具を用いて器面に目印をつける技法をさす¹⁰。方形刺突技法¹¹、凹線技法¹²等に大別される。沖打越1号墳では1～3・5・6の突帶が剥離した部分で凹線技法が観察できた。この技法は第15図の復元案にあるような工具を用いて器面にヨコ方向の凹線をめぐらすもので、この凹線を目印に突帶を貼り付ける。なお凹線を施した際に、突帶上辺に工具下端が接して圧痕が残る。1・2にはこの圧痕ととらえる小さな段が観察できる。このような技法で設定された突帶間隔は、口縁部で約12cm、段間で約13cmである。

透かし孔 透かし孔を確認できた資料は1・2にとどまり、いざれも円形を呈する。残存部分をもとにすれば、各段2孔を施し、段の上下で90度方向を達えて穿つ配置と推測される。

外面調整 外面調整としてナデ・タテハケ・ヨコハケが認められる。突帶の剥離部分にタテハケが観察できることから、1次調整にタテハケが行われたと考えられる。突帶貼付け後の2次調整として5～7においてヨコハケが観察できる。このうち5は静止痕が確認できることからB種ヨコハケといえる¹³。6についてはA種ヨコハケとみなしておく。ハケメの条線密度は10本/cm程度の1・2・15・19、11～



第 15 図 増輪模式図

12 本/cm の 4・5、13 本/cm 程度の 3・6・7・12 であり、比較的細かい。

ナデに関してはユビナデのほか、板状の工具によるナデの可能性を持つ調整が 18において観察できた。このほか 3 には器面がはじけ飛んだような剥離部分が認められ、焼成時の破裂痕の可能性がある。破裂の程度にもよるが、沖打越 1 号墳ではこうした個体も製品として並べていたと考えられる。

内面調整 内面調整にはナデ・板ナデ・オサエが観察できる。成形においてヨコ方向あるいはナメ方向のナデが施されたのち、突帯の貼り付けに対応するヨコナデ、ユビオサエが施されたことが観察できる。

赤色顔料 外面に赤色顔料が残る個体がある。器壁の状態に影響されるため、すべての個体に塗布されていたのかは明らかではない。なお、赤色顔料は埋葬施設 1 からの出土品に限られる傾向にある。この点は、長年の風雨にさらされる前に埋葬施設 1 の再

掘削・埋め戻しが行われた可能性を示唆する。埋葬施設の形成順序を考える上での手がかりとなる傾向である。

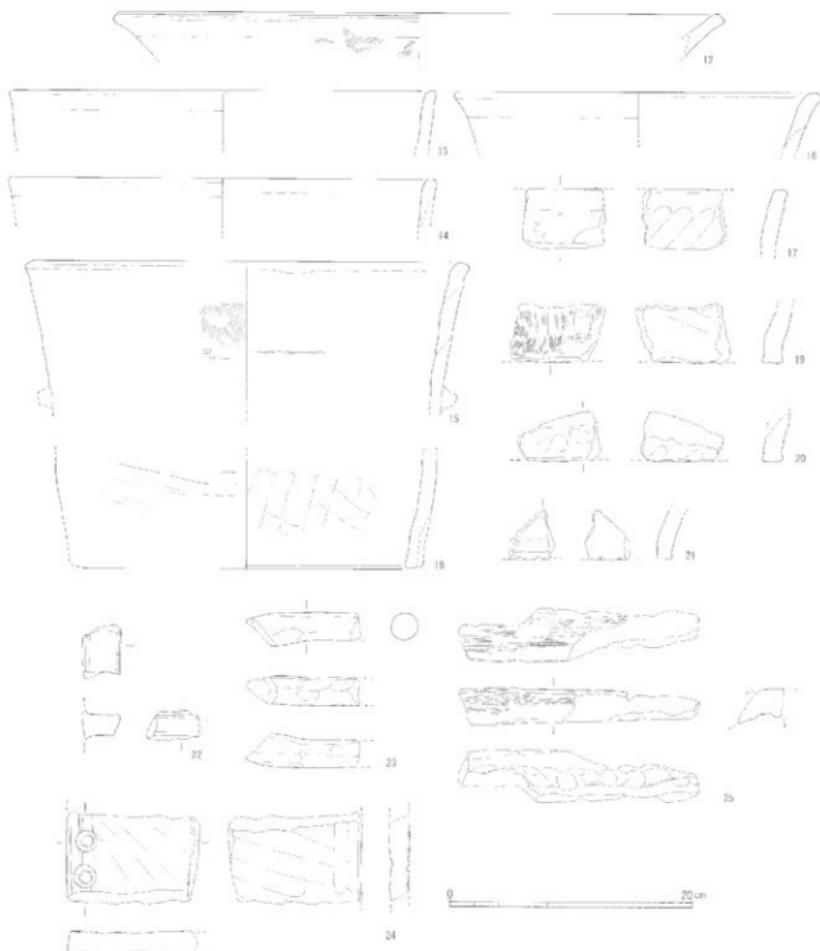
焼成 焼成はいずれも土師質の仕上がりで、黒斑を有する個体が認められた。焼成が良好で堅緻な個体は認められなかったことから、いわゆる野焼きによつて焼成されたと考えられる。

埴輪の配列 原位置を保った円筒埴輪は検出されなかつた。このため埴輪の配置・樹立間隔・樹立方法は不明である。出土量や検出地点から判断すれば、古墳をめぐるように配列されたが、個体間の距離は広かつたと想定できる。

分類 外面調整からみた場合、タテハケのみの 1・4・2 次調整としてヨコハケが認められる B・B 种 ヨコハケをもつ 5 の 3 つに分けることができる。口縁部については外反・直立と端面の有無の組み合せによって分類を試みることも一案であろう。ただ



第16図 沖打越1号填出土遺物実測図(1) 墓室(1) (1 : 4)



第17図 沖打越1号墳出土遺物実測図(2) 填輪(2) (1:4)

し、沖打越1号墳の円筒埴輪は突帯間隔が揃い、その設定技法も共通していることから、個体差の少ない資料といえる。外面調整を中心とした分類は、この点をふまえた評価が求められよう。

時期 円筒埴輪は3条4段構成をとり、円形の透かし孔を各段2ヶ所、段の上下で90度方向を並べて穿つ配置と考えられる。器面調整にB種ヨコハケが認められること、黒斑の付着から野焼きによる焼成と考えられることから、沖打越1号墳の埴輪は川西宏幸氏のⅢ期に相当する。特に5はB b種ヨコハケの可能性が高い^⑩。

また、突帯間隔は古墳時代中期を通して狭くなる傾向にあり、B c種ヨコハケ出現以降、特に顕著となる^⑪。これは突帯間を一周のヨコハケで整えることを目指したことに起因するのだろう。沖打越1号墳の埴輪における突帯間隔は約13cmである。近隣の石山古墳では約14cm、殿塚古墳の陪冢にあたるわき塚1号墳では約12cmの値を示すことから、石山古墳→沖打越1号墳→わき塚1号墳の順となろう。さらに石山古墳ではB種ヨコハケが確認されていないこと、逆三角形・四角・円形の透かし孔が認められること^⑫、殿塚古墳において円形の透かし孔、口縁部が屈曲する口縁部が確認されている。わき塚1号墳ではB b種ヨコハケ、女良塚古墳では黒斑を有するものの堅敏な焼成の円筒埴輪が知られている^⑬。したがって石山古墳→殿塚古墳→沖打越1号墳→わき塚1号墳→女良塚古墳という新古をとらえておきたい。

以上の検討から、沖打越1号墳の埴輪は川西宏幸氏によるⅢ期、埴輪検討会のⅢ期2段階^⑭に相当し、『前方後円墳集成』(以下、「集成」)の5期^⑮ととらえることができるだろう。

b 形象埴輪

形象埴輪として家形埴輪が出土している。このほか、いずれの種類とも判別できなかった破片も出土しており、あわせて報告しておく(第17図)。

22は埋葬施設1の第15層から出土した。ナデによつて調整が施されており、表面にはベンガラと思われる赤色顔料の塗布が確認できる。家形埴輪の楕円形突帯と考えられ、外側に水平に伸びて終わる直線的なつくりといえる。

24は家形埴輪の壁にあたる破片である。E区e18

グリッドの表土から出土しており、墳頂からの転落と考えられる。図化した外面の左側は開口部にあたる。外面の左端には縱方向の沈線を2条施した後、その上から竹管を押し付けることで円形文を2ヶ所施している。右端は破断しているものの、縱方向の沈線が1条確認できる。これらの沈線に挟まれた部分は剥離によって黒色を呈している。この部分には幅7cmの柱を粘土貼付けによって表現していたと推測される。内面にはナデによる調整が観察できる。24の類例として、石山古墳の平地式切妻造りの家形埴輪があげられる^⑯。

23は東周漢第52層から出土した断面円形の棒状製品である。ナデ・オサエによる調整が施されており、この調整による不明瞭な面が観察できる。23は家形埴輪の堅魚木や水鳥形埴輪の脚などの可能性が考えられる。沖打越1号墳の確実な形象埴輪が家形埴輪に限られていることから、前者の可能性を考えておきたい。なお、堅魚木の初出として石山古墳が知られており^⑰、23が堅魚木とすれば、早い時期の採用例として評価できよう。

25は埋葬施設1の第15層から出土した破片である。図示した上面には条線密度12本/cmのハケによる調整と赤色顔料の塗布が確認できる。斜面部分は接合していた面で剥離しており、ハケによって一旦調整されたことが観察できる。下面には、接合痕とオサエ・ナデによる調整がみられる。25は家形埴輪における屋根と側廻りの接合部あるいは側廻りと据廻り突帯の接合部、蓋形埴輪の笠部と台部の接合部などの可能性が考えられる。直線的な形状を示すことから、家形埴輪の可能性を考えておきたい。

c 鉄製品・砥石

沖打越1号墳では鉄製品が4点、砥石1点が出土した。出土層位および型式学的な検討から、いずれも沖打越1号墳に伴うと考えられる(第18図)。

27は東周漢第52層より出土した。残存長5.2cm、鐵身幅2.1cm、鐵身厚0.3cm、頭部幅0.7cm、頭部厚0.4cmである。鐵身の平面形はややふくらを有した柳葉形を呈し、腸抉をもつ。鐵身の断面はレンズ状を呈する。腸抉は1.8cm以上と比較的深く、やや外側に広がる形状である。腸抉は繩状工具により頭部から切り離すことで作り出されたと考えられる。頭部

は軸状をなし、断面は長方形を呈する。頭部の残存に恵まれないが、頭部は直線状をなし、関部を有して茎部に至ると考えられる。なお、脇抉切り離しの形状をそのまま残すことで頭部に山形突起が形成される型式も知られているが、本例はこれには該当しないと考えておく。本例の類例として、兵庫県茶すり山古墳⁽¹⁰⁾、大阪府盾塚古墳⁽¹¹⁾、東京都野毛大塚古墳⁽¹²⁾などがあげられよう。

28は小刀あるいは刀子と考えられる。東周溝第52層より出土した。残存長5.3cm、刃部幅1.6cm、厚さ0.3cmである。断面は楔形だが、背側の稜が不鮮明でやや鈍丸の形状を呈する。

29は刀子である。埋葬施設1の第9層より出土した。切先をわずかに欠損しているが、ほぼ完形をとどめる。長さ6.5cm、刃部幅1.1cm、厚さ0.3cm、茎部幅0.8cm、厚さ0.3~0.4cmである。刃部のうち、切先からゆるやかに弧を描き、関部付近ではやや内湾する。関部は斜闊で、茎部には茎部孔や木質は確認できなかった。刃部の断面は楔形で、茎部は長方形を呈する。29は刀子のなかでも小型の部類に属する。類例として大阪府豊中大塚古墳⁽¹³⁾、大阪府交野東車塚古墳⁽¹⁴⁾、岐阜県星飯大塚古墳⁽¹⁵⁾などがあげられ、古墳時代中期初頭に多い事例といえる。

30の直刃鎌は埋葬施設1の第15層より出土した。大きさは長さ9.4cm、刃部幅2.6cm、厚さ0.3cmで、背・刃ともに直線的で短冊状の全形を呈する。基部については、一辺を全体に折り返すことで柄への装着がなされたと考えられる。なお、基部には明瞭な木質は認められなかった。魚津知克氏による分類に従えば直刃鎌A1類に相当する⁽¹⁶⁾。

26の砥石は東周溝第52層より出土した。大きさは長さ14.2cm、幅4.3cm、厚さ1.4cmで、灰色を呈する。原材料は、ごく弱い熱変成を受けて片岩化した泥質砂岩である。現状で、たいへん脆くなっている。砥石としての使用面は一面で、中央付近が緩やかにくぼんでいる。長軸に沿って使用したと考えられるが、岩質が脆いために表面の風化が著しく、明瞭な擦痕を固化できなかった。

鉄製品の時期 以上の鉄器について型式学的な検討からその時期についてふれておく。まず、鉄鎌は脇抉を有する柳葉形だが、長身化が進みつつあること、

脇抉が深くなりつつあること、頭部が扁平な長方形であることが特徴といえる。杉山秀宏氏による編年⁽²⁰⁾と照らし合わせると、IV~V期すなわち中期初頭から前葉と考えられる。

小型の刀子は出土時期が比較的限られており、中期初頭から中期前葉にみられる。直刃鎌については古墳時代の当初からみられるものの、中期前葉を下限として急速に姿を消す型式である。

上記の諸点から鉄器から見た沖打越1号墳は「集成」の4期⁽²¹⁾、和田晴吾氏による編年5期⁽²²⁾を上限とし、「集成」の6期すなわちTK73型式期⁽²³⁾を下限とすることができる。

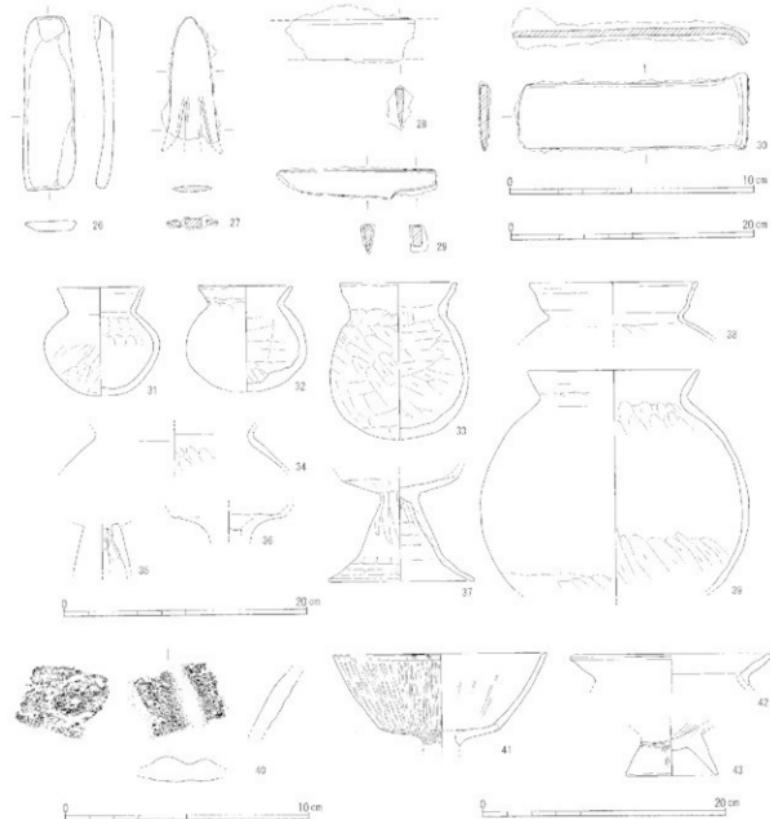
d 土師器

沖打越1号墳では東周溝を中心に土師器が出土した。その器種と点数は小型丸底壺3点を含む壺類4点、高杯3点、甕2点である(第18図・第2表)。

小型丸底壺 31~33は東周溝第52層より出土した。31は口径7.0cm、体部径9.5cm、口縁部高2.0cm、器高8.8cmの大きさである。口縁部は直線的に外方へ立ち上がり、体部は球形を呈する。体部径は口径を上回り、体部の中位よりやや上で最大径に至る。口縁部は短く、器高に対して1:4.4の比率を示す。体部外面の下半は右上がりのナデ、上半に横方向主体のナデが観察される。内面にはナデ・オサエが見られる。口縁部には内・外ともに横方向のナデが施される。

32は口径7.8cm、体部径10cm、口縁部高1.5cm、器高8.7cmである。口縁部は短く外方にのび、体部は球形を呈する。体部径は口径を上回り、体部の中位で最大径に至るが、なだらかな肩の形状によってやや下ぶくれ気味の印象を受ける。口縁部高と器高の比率は1:5.8の値を示す。体部径は口径を凌ぐ。体部外面はナデ・オサエ、内面はナデによる調整が観察できる。頭部付近はナデが施されており、明瞭な棱線をもたない。口縁部には横方向のナデがみられる。

33は口径9.6cm、体部径11.4cm、口縁部高2.5cm、器高12.8cmである。口縁部は外上方に立ち上がり、体部は綫長の球形をなす。体部径は口径を凌駕する。口縁部高と器高は1:5.12の比率である。肩はなだらかで、体部中位において最大径へと至る。体部外面にはケズリ、内面にはケズリ・ナデが施されている。頭部外面にはナデによる調整がなされており、明瞭



第18図 沖打越1号墳出土遺物実測図(3) 鉄製品・土器他 (鉄製品1:2、縄文土器1:2、他1:4)

な棱線をもたない。内面には口縁部の下端が露出しており、接合の状態を明瞭に観察できる。口縁部は内・外面ともに横方向のナデで仕上げる。

壺 34 は北側斜面から出土した。頸部径は 12.8cm である。外面にはナデ、内面にはナデ・オサエによる調整が観察された。細片のため器形の綻り込みは難しいものの、二重口縁蓋の可能性をあげておきたい。

高環 35-37 のうち、35・36 は東周溝第 52 層、37

は北側斜面から出土した。35 は脚柱上端で径 3 cm である。脚柱部は直線状かわずかに内湾気味に広がる。摩滅が激しいものの、外面にナデ、内面にオサエとシボリ痕が観察できる。

36 は脚柱上端付近で径 4.6 cm である。内面の観察から、脚部から杯部にかけて継続的に成形し、杯底は粘土円板の充填によって形成したと推測される。

37 は脚据部径 12 cm、接合部径 3.2 cm、脚部高 7.2 cm

である。37は有段高坏と呼ばれるもので、平坦な坏底から段を経て、口縁部に至ると思われる。脚部は裾部に向かってなだらかに広がっており、脚柱と裾部の間には明瞭な屈曲は認められない。脚部外面はヨコナデの後、接合部に縱方向のナデを施したことかが観察できる。内面には横方向のナデとシボリ痕が確認できる。坏部は摩滅が著しく調整は不明である。坏部と脚部の接合は、完成した坏部を脚部上に載せるように接合する手法がとられたと考えられる。なお、脚部の内面頂部には、中央に軸芯痕と考えられるくぼみが認められた。

甕 38・39は東周講第52層から出土した。38はいわゆる布留形甕で、口径13.8cm、頭部径11cm、口縁部高2.8cmである。口縁部はわずかに内湾しながら外方に伸びる。端部は内面に強く内傾。肥厚させており、外面はシャープにおさめる。頭部は強いナデが施されている。内・外面ともに摩滅が著しいため、調整はナデのみ確認できた。

39は口径14cm、頭部径12cm、体部径22cm、口縁部高2.2cmの大きさである。口縁部は「く」の字形で、直線的かやや外反気味に開く。端部を上方につまみ上げようとしたためか、先端付近はやや薄くなっている。体部は球形を呈する。体部外面の下半には板ナデ、上半にはナデ・オサエによって仕上げる。口縁部は、内・外面ともに横方向のナデが確認できる。なお、体部には幅2~3cmの粘土紐を右上がりで巻き上げた痕跡が観察できる。

土師器の時期 神打越1号墳に伴う土師器について時期的な位置づけを試みておく。31~33は寺沢薫氏のいう小型丸底壺E・Fに相当し、布留3~4式に見られる³⁰⁾。38は布留形甕で口縁部はg4にあたり、布留2~4(古)式に多く見られる。これらの点から神打越1号墳の土師器は布留3~4(古)式と評価できる。これは、城之越遺跡のIV-a層やIII層において31~33の類品が出土し、IV-a層を布留2期併行期、III層を布留3~4期併行期とされていること³⁰⁾ともおおむね対応する。

なお、「集成」2期後半から3期に位置づけできる京都府平尾城山古墳では布留2式、「集成」3期の奈良県行燈山古墳では布留2式、「集成」3期後半~4

期前半の東大寺山古墳では布留2式、「集成」4期後半の津堂城山古墳では布留3式の土師器が出土している³⁰⁾。後述するように、神打越1号墳は「集成」5期と評価できることから、「集成」5期と布留3~4(古)式の対応関係を示すことになる。

3 古墳築造以前の遺物

その他、古墳に伴うものではないが縄文土器1点、高坏1点、甕2点が出土した(第18図)。

縄文土器 40はE区e21グリッドから出土した。外面には大きな楕円文を押型によって施し、内面に斜方向の条線を施す。条線の間隔は比較的密といえる。40は縄文時代早期にみられる高山寺式土器³¹⁾と考えられる。高山寺式土器は胴部が張らない円錐形で、外面の楕円文が小さく、内面の条線が密なものが古段階とされる。一方新段階は胴部がふくらみをもち、楕円文が大きく、条線の間隔が広いか条線のないものとされる。40には楕円文が大きいことから新しい要素がうかがえるといえる。

土師器高坏 41は南側斜面第31層から出土した。口径17.6cm、脚柱上端径3cm、坏部高7.5cmである。坏部は段を有するもので、平らな坏底から緩やかに内湾しながら外上方に開く。坏部は深いため、口径と杯底の径の差は大きい。口縁部の立ち上がり角度は急である。端部は不明瞭ながら面を持ち、外面はわずかに外反する。外面には縱方向のミガキが施され、脚部に及ぶ。内面は摩滅が激しいものの、同様のミガキがわずかに確認できる。坏部と脚部の接合部は、脚部成形ののち坏部を巻き上げて成形したと考えられる。

41は伊勢湾沿岸地域でみられる高坏であるが、伊賀地域において在地化しているという³²⁾。この指摘をふまえると、41は石井智大氏による編年の様相IIIに相当し、布留0式に併行する時期と考えられる。

甕 42は北側斜面より出土した。口径16.6cm、頭部径12.4cm、頭部高2.0cmである。口縁部は外上方に直線的に立ち上がり、端部には端面が認められる。外面・内面ともに横方向のナデによって調整がなされている。42は弥生時代後期の甕と考えられる。

43は北側斜面から出土した。台付甕の脚台で、脚

台は直線状に広がり、端部はまるくおさめる。脚端径 7.6cm、脚部高 3.3cm の大きさである。外面に縱方向のハケと板オサエ、内面にナデによる調整が観察できる。43 は、体部底・脚台・脚端の形状から庄内式期かや下つて布留式前半期と考えられる。41～43 は沖打越 1 号墳よりも高所に先行する集落・墳墓の存在を示す資料といえる。

(高松)

<註>

- (1) 遠川哲朗「突帯-突帯間隔設定技法を中心として」『埴輪』第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会、2003 年)
- (2) 遠川哲朗「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元」『円筒埴輪論叢』1、埴輪検討会、1999 年)
- (3) 鍾正古「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺田境内 1』奈良市教育委員会、1998 年)
- (4) 川西安幸「円筒埴輪論叢」『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号、1978 年)
- (5) 一瀬和夫「古市古墳群における大型古埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』V、大阪府教育委員会、1988 年)
- (6) 川村和子「古市古墳群の埴輪生産体制」『西墓山古墳』藤井寺市教育委員会、1997 年)、上田睦「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『堅田直先生古希記念論文集』1997 年)、上田睦「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」(『埴輪論叢』第 5 号、埴輪検討会、2003 年)
- (7) 豊田祥三「石山古墳集の埴輪に関する覚書」『Mie history』vol. 15、三重歴史文化研究会、2004 年)
- (8) 豊田祥三「近代古墳の研究」『研究紀要』第 15～1 号、三重県埋蔵文化財センター、2006 年)
- (9) 墓輪検討会「円筒埴輪共通編年(案)」『埴輪論叢』第 4 号、2003 年)
- (10) 広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992 年)
- (11) 三重県埋蔵文化財センター『石山古墳』(第 24 回三重県埋蔵文化財展図録、2005 年)
- (12) 註 (11) 文献
- (13) 兵庫県教育委員会『史跡茶十リ山古墳』(2010 年)
- (14) 宮永雅雄編『盾環・鞍環・珠金環古墳』(由良大和古代文化研究協会、1991 年)
- (15) 野毛大塚古墳調査会編『野毛大塚古墳』(世田谷区教育委員会、1999 年)
- (16) 豊中市教育委員会『紙津豈中大塚古墳』(1987 年)
- (17) 交野市教育委員会『交野東車塚古墳』(2000 年)
- (18) 大垣市教育委員会『史跡豈坂大塚古墳』(2003 年)
- (19) 魚津知克「曲刃鍔と U 字形銀鏡先」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集、2003 年)
- (20) 杉山秀宏「古墳時代の鐵鏟について」『権原考古学研究所論集』第 8、吉川弘文館、1988 年)
- (21) 註 (10) 文献
- (22) 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 32 卷第 2 号、1987 年)
- (23) 田辺昭三『陶邑古窯址群 1』(平安学園考古学クラブ、1966 年)、同『須恵器大成』(角川書店、1981 年)
- (24) 古沢薰「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所、1986 年)
- (25) 伊藤裕像「城之越遺跡の古式土器」(『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1992 年)
- (26) 土師器の位置づけは柳本照男氏の研究による。柳本「土師器・須恵器」『古墳時代の研究』第 8 卷、雄山閣、1991 年)。各古墳の時期は『前方後円墳集成』編年(註 (10) 文献)をもとに、筆者の責で位置づけた。なお、「集成」4 期に関しては、古市古墳群にある津屋城山古墳の出現をもって後半とし、和田晴吾氏による編年(註 (22))の 5 期に相当する。
- (27) 中村貞史「和歌山県高山寺貝塚」(『探訪調文の遺跡』西日本編、有斐閣、1985 年)
- (28) 石井智大「伊賀地域における弥生時代終末期-古墳時代前期の土器編年」『研究紀要』第 19～1 号、三重県埋蔵文化財センター、2010 年)

第1表 沖打越1号出土遺物観察表(1)

No	実測番号	様・質・器種	出土地点	出土層位	法量	調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	29-1	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b7-h8-h10- h12	口径36.2、口縁 部高12、胴桿28 ~30、突帯間隔 13、13.5	外；ナデ・タテハケ→突帯間隔 設定(凹線技法)→突帯貼付 内；ナデ・オサエ	やや 密	外；10YR7/6明黄褐色 内；同上	良好	5/12		
2	31-1	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b8	胴径30~33、突 帯間隔13	外；タテハケ→突帯間隔設定 (凹線技法)→突帯貼付 内；ナデ	密	外；10YR8/6黄橙 内；7.5YR7/6橙	良好	2/12		
3	30-1	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b9-h11-h12	10回52層	外；タテハケ→突帯間隔設定 (凹線技法)→突帯貼付 内；ナデ・板ナデ	やや 密	外；7.SYR7/6橙 内；同上	良好	2/12	破裂痕？	
4	34-2	円筒埴輪	E区l16	北側斜面 8回2層	胴径31	外；タテハケ→突帯貼付 内；ナデ・オサエ	やや 粗	外；10YR7/6明黄褐色 内；同上	良好	2/12		
5	37-1	円筒埴輪	E区e17	試掘 8回2層	胴径31.6	外；タテハケ→突帯間隔設定 (凹線技法)→突帯貼付→B種 ヨコハケ 内；ナデ	密	外；10YR7/6明黄褐色 内；同上	良好	2/12	B種ヨコ ハケ	
6	38-1	円筒埴輪	E区f16	北側斜面 堆山上	胴径36.2	外；タテハケ→突帯設定技法 (凹線技法)→突帯貼付→ヨコ ハケ 内；ナデ	密	外；7.SYR8/6浅黄褐色 内；10YR5/3にぶい黄褐色	良好	2/12	A種ヨコ ハケ	
7	35-2	円筒埴輪	E区e17	北側斜面 表土	-	外；タテハケ・ヨコハケ 内；ナデ・オサエ	やや 粗	外；10YR7/4にぶい黄褐色 内；7.SYR7/4にぶい橙	良好	-	B a種ヨ コハケ？	
8	41-6	埴輪	E区g19	東周溝 突帯	10回52層	外；ナデ	密	外；7.SYR6/6橙 内；-	良好	-		
9	39-2	埴輪	E区e20	南側斜面 流出土	-	外；ナデ	密	外；10YR7/4にぶい黄褐色 内；-	良好	-		
10	39-4	埴輪	E区e21	南側斜面 流出土	-	外；ナデ	密	外；10YR8/4浅黄褐色 内；-	良好	-		
11	36-5	埴輪	E区d17	埋葬施設1 12回15層	-	外；ナデ	やや 密	外；7.SYR7/4にぶい橙 内；同上	良好	-	赤色顔料 墨	
12	31-3	埴輪	E区e15	北側斜面 標灰砂層	口径50	外；ナデ・ハケ 内；ナデ	密	外；2.SYR4浅黄 内；10YR7/4にぶい黄褐色 内；10YR7/4にぶい黄褐色	良好	9回37層 に相当		
13	41-2	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b8	10回52層	口径35.2	外；ナデ・ハケ 内；ナデ	密	外；10YR7/4にぶい黄褐色 内；同上	良好	1/12	
14	11	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b8	10回52層	口径35	外；ナデ	密	外；7.SYR6/6橙 内；同上	良好	1/12	
15	42-1	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b7-h8	10回52層	口径36.4、口縁 部高約12	外；ナデ・タテハケ 内；ナデ	密	外；10YR7/3にぶい黄褐色 内；同上	良好	1/12	
16	12	円筒埴輪	E区g19	東周溝 b8	10回52層	口径30	外；ナデ	密	外；7.SYR7/6橙 内；10YR7/4にぶい黄褐色	良好	1/12	
17	36-1	円筒埴輪	E区e17	東周溝 b8	10回52層	外；ナデ・ハケ 内；ナデ	密	外；2.SYR7/6橙 内；同上	良好	-		
18	40-1	円筒埴輪	E区g19	東周溝 底部	10回52層	底径29	外；ナデ・板ナデ？ 内；ナデ	密	外；2.SYR4浅黄 内；7.SYR7/6橙 内；10YR6/4にぶい黄褐色 内；同上	良好	1/12	
19	37-3	円筒埴輪	E区d17	表土	-	外；タテハケ 内；ナデ	密	外；10YR6/4にぶい黄褐色 内；同上	良好	-		
20	38-3	円筒埴輪	E区f20	東周溝 底部	10回52層	外；ナデ・オサエ 内；オサエ	密	外；7.SYR7/6橙 内；7.SYR7/6橙 内；10YR6/3にぶい黄褐色 内；同上	良好	-		
21	38-4	円筒埴輪	E区d17	包含層	-	外；ナデ・タテハケ 内；ナデ	密	外；10YR7/3にぶい黄褐色 内；10YR6/3にぶい黄褐色 内；7.SYR7/4にぶい橙 内；同上	良好	12回7層 に相当		
22	36-2	家形埴輪	E区d17	理葬施設1 12回15層	-	外；ナデ	やや 密	外；7.SYR7/4にぶい橙 内；同上	良好	-	赤色顔料 墨	
23	35-3	象形埴輪	E区f20	東周溝 h1	10回52層	外；オサエ・ナデ 内；-	やや 粗	外；7.SYR7/4にぶい橙 内；-	良好	-	堅魚木？	
24	37-2	家形埴輪	E区e18	表土	-	外；ナデ→沈線→円形文 内；ナデ	密	外；2.SY7/4浅黄 内；7.SYR7/6橙 内；10YR6/4にぶい黄褐色 内；同上	良好	-		
25	35-1	象形埴輪	E区d17	理葬施設1 12回15層	-	外；ハケ 内；オサエ・ナデ	やや 粗	外；10YR4/3赤褐色 内；7.SYR8/3浅黄褐色 内；同上	良好	-	赤色顔料 墨	
26	34-1	砾石	E区f20	東周溝 s1	10回52層	長4.2、幅4.3, 厚1.4	-	泥質 砂岩	-	-	弱い熱変成 を受ける	
27	44-1	鉄織	E区f20	東周溝 ii	10回52層	残存長5.2、幅 2.1、織身厚 0.3、頭部幅 0.7、頭部厚0.4	-	-	-	-		
28	44-3	鉄製品	E区f19	東周溝 10回52層	残存長5.3、刀部 幅1.6、厚さ0.3	-	-	-	-	-	小刀あるいは刀子	
29	44-2	刀子	E区e17	理葬施設1 12回9層	長6.5、刀部幅 1.1、刀部厚 0.3、底部幅 0.8、底部厚0.4	-	-	-	-	-		
30	44-4	直刀鍼	E区d17	理葬施設1 12回15層	長9.4、幅2.6, 厚0.3	-	-	-	-	-		

第2表 沖打越1号墳出土遺物観察表(2)

No.	実測番号	様・質・器種	出土地点	出土層位	法量	調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
31	32-1	土師器 小型丸底壺	E区g19	東周溝	口径7.0、頸部径 5.5、体部径 9.5、口縁部高 2.0、器高8.8	外；ナデ・オサエ 内；ナデ・オサエ	やや 密	良好	外；5YR7/4にぶい橙、 7.5YR7/4にぶい橙 内；同上	11/12	
32	32-2	土師器 小型丸底壺	E区g19	東周溝	口径7.8、頸部径 6.2、体部径10.0、 口縁部高1.5、器 高8.7	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや 密	良好	外；7.5YR5/1褐色 内；同上	1/12	
33	32-3	土師器 小型丸底壺	E区g19	東周溝	口径9.6、頸部径 7.8、体部径 11.4、口縁部高 2.5、器高12.8	外；ケズリ・ナデ 内；ケズリ・ナデ	やや 密	良好	外；7.5YR6/2灰褐色 内；7.5YR5/1褐色	4/12	
34	39-6	土師器 壺	E区l16	北側斜面 8段11層	頸部径12.8	外；ナデ 内；ナデ・オサエ	密	良好	外；7.5YR5/6明褐色 内；同上	1/12	
35	39-8	土師器 高杯	E区f20	東周溝	脚柱上端径3.0	外；ナデ 内；オサエ	やや 密	良好	外；10YR8/2灰白色 内；同上	2/12	
36	35-4	土師器 高杯	E区	東周溝	脚柱上端径4.6	外； 内；	やや 粗	良好	外；10YR7/3にぶい黄褐色 内；10YR7/2にぶい黄褐色	-	
37	34-4	土師器 高杯	E区h17	北側斜面 8段2層	脚端径12、接合部 の径3.2、脚部 高7.2	外；ナデ 内；ナデ	やや 粗	良好	外；7.5YR7/4にぶい橙 内；同上	5/12	
38	33-1	土師器 甕	E区g19	東周溝	口径13.8、頸部 径11.0、口縁部高 2.8	外；ヨコナデ 内；ナデ	やや 粗	良好	外；7.5YR6/4にぶい黄褐色 内；7.5YR7/4にぶい黄褐色	9/12	
39	33-2	土師器 甕	E区g19	東周溝	口径14.0、頸部径 12.0、体部径2.0、 口縁部高2.2	外；ヨコナデ・ナデ・板ナデ 内；ケズリ・ナデ・オサエ	やや 密	良好	外；10YR6/3にぶい黄褐色、 10YR5/2灰黃褐色 内；同上	3/12	
40	33-3	繩文土器 深鉢	E区e21	南側斜面 包含層	-	外；押型文 内；条線	やや 密	良好	外；10YR7/4にぶい黄褐色 内；同上	-	高山寺式
41	34-3	土師器 高杯	E区e21	南側斜面 8段31層	口径17.6、脚柱 上端径3cm、杯 部高7.5cm	外；ハケメ→ミガキ 内；ミガキ	やや 密	良好	外；7.5YR7/6橙 内；同上	5/12	
42	39-7	弥生土器 甕	E区h15	北側斜面 流出土	口径16.6、頸部 径12.4、頸部高 2	外；ナデ 内；ナデ	密	良好	外；10YR8/4浅黄褐色 内；7.5YR7/4にぶい橙	2/12	
43	32-4	土師器 甕	E区h16	北側斜面 流出土	脚端径7.6、脚部 高3.3	外；ハケ・板オサエ 内；ナデ・ハケ・板オサエ	やや 密	良好	外；7.5YR7/4にぶい橙 内；同上	脚端 3/12	

VI 沖打越中世墓の遺構

1 概要

沖打越中世墓は、沖打越1号墳の墳丘上を中心には形成されたものである。遺跡の範囲は、E地区とした調査区にはほぼ限定される。

確認された遺構は、丘陵頂部（1号墳の埋葬施設上）と丘陵の南斜面部に見られる（第20図）。丘陵頂部では、経塚1基を中心に、人骨を埋納した土坑を21基、無遺物の土坑12基を確認した。人骨埋納遺構には、藏骨器を納めたものと人骨をそのまま納めたものの2種類がある。

丘陵南斜面では、茶毘跡と考えられる焼土坑2基、焼石を含む遺構1基があった。これが今回の沖打越中世墓の発掘調査で確認された遺構の全てである。

遺構以外のことでは、丘陵の斜面部で関連遺物の散布が見られた。北側斜面では、五輪塔の部材（火輪）2個体、小型石仏2個体のほか、藏骨器等の土器片が見られた。東斜面の1号墳周溝埋土上層部では五輪塔の部材（空風輪2個体、水輪2個体）と藏骨器等の土器片、南斜面では五輪塔部材（火輪1個体）と小型石仏が見られた（第20図）。丘陵斜面部の出土石塔類は、丘陵頂部からの転落と考えられる。藏骨器等の破片も、盗掘や崩落に伴って周辺に散乱したと考えられる。

2 丘陵頂部の遺構

丘陵頂部の遺構は、沖打越1号墳の埋葬施設上を中心には形成されている。

（第20・21図）。遺構は、最高所付近に経塚（S X 5）を、その周間に火葬墓が配されている。

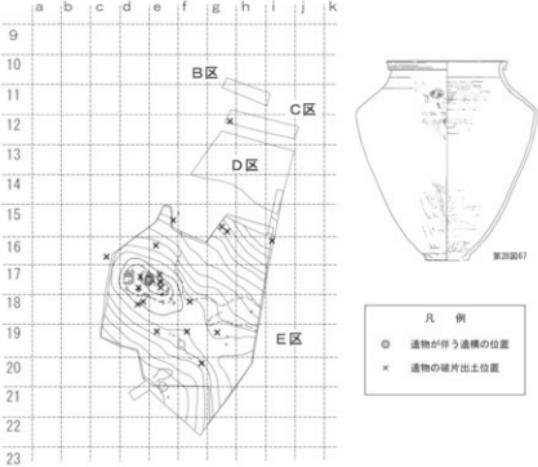
遺構の規模やおよその性格は一覧表（第3表）に示したので、ここではとくにふれる必要があると考えられる遺構とその状況に限定しておく。

a 経塚

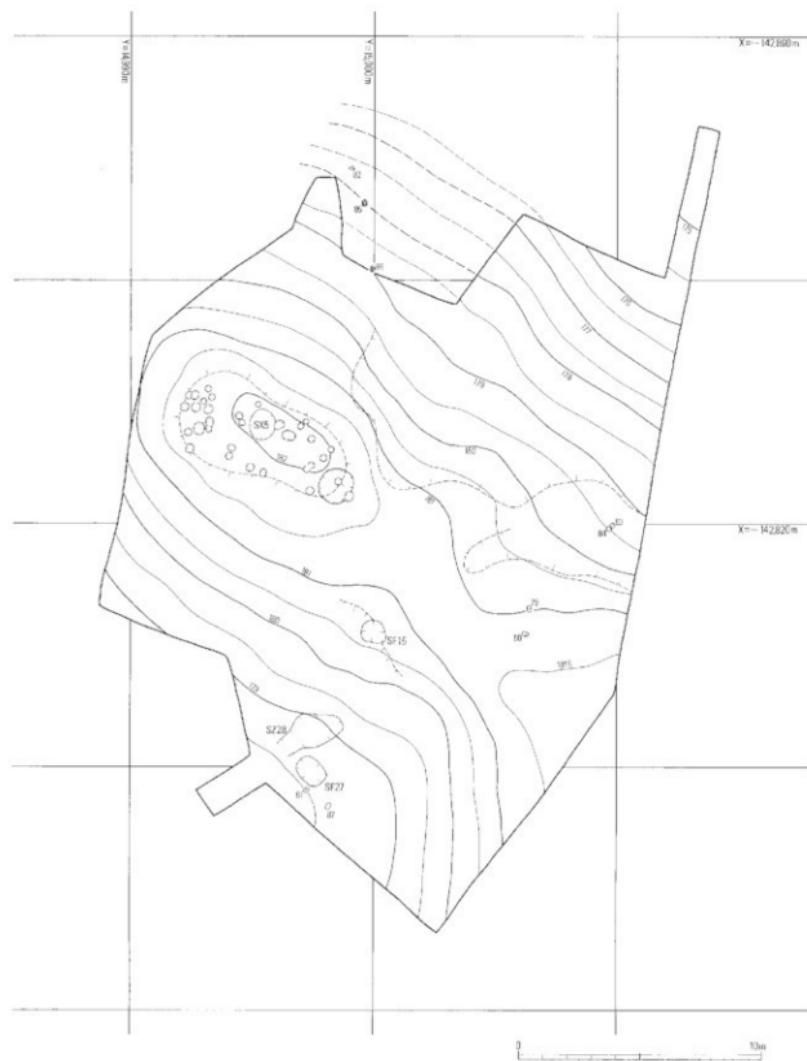
S X 5（第22図） 丘陵頂部の中心に造成された遺構である。表土直下から幅5cm前後の小礫が出土はじめ、10cmほど掘り下げた段階で水輪・地輪と大小様々な礫が散乱している状況が現れた。これらの石塔や礫に混じって、口縁部径約37cmの常滑産中形甕の破片が数点混じっていた。これらの礫・石塔を取り除くと、直径1.2m程度の断面描鉢形の土坑が確認された。この土坑内からも、数点の小礫が出土した。

小礫は、土坑内から出土したものうちの17点ほどに墨書が確認され、状況から見て一字一石経と考えられる。このことから、当遺構は礫石経を埋納した経塚であると判断した。

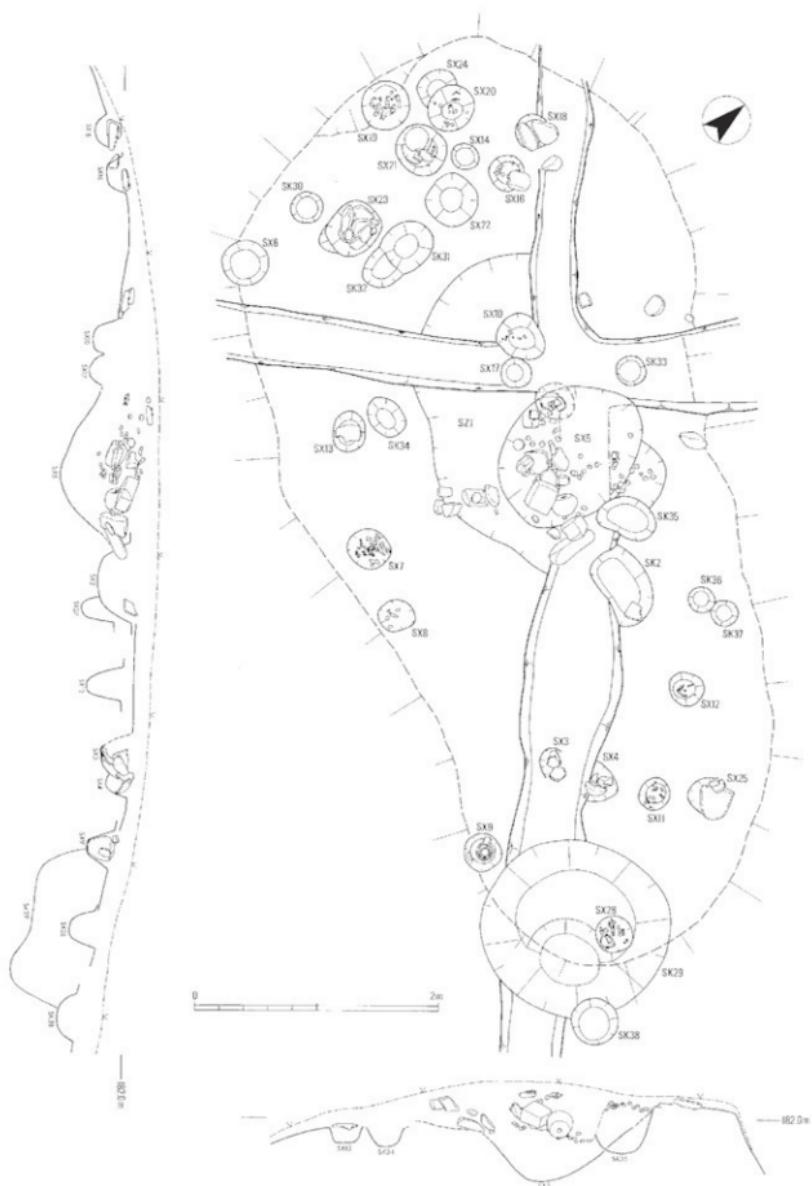
経塚S X 5の周囲で確認された状況から、この経塚は常滑産中形甕を容器として用いたもので、盗掘などによって甕の破片は周辺に散乱したものと考えられる。甕の散布は第19図のような状況であった。また、遺構上部で確認された大形の礫は、経石を納めた陶器甕の上部を整えるために用いられたと考えられる。さらにその上に石塔（五輪塔）を据え、経塚の標識

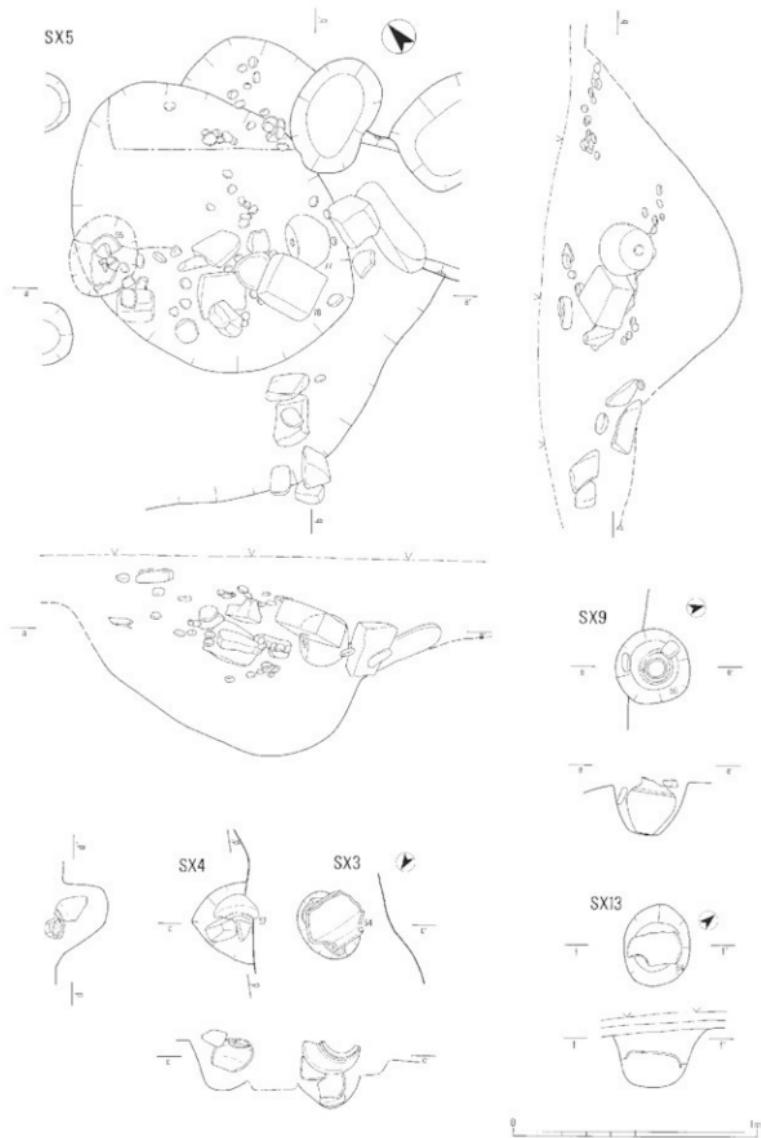


第19図 経塚S X 5 甕の破片散布状況



第20図 沖打越中世墓遺構配置図 (1:200)





第22図 経塚S X 5・火葬墓個別実測図 (1:20) 高さは全て 182.0m

になっていたと考えられる（第34図）。

経塚S X 5の時期は、作出する陶器甕の型式から、13世紀後葉頃の遺構と考えられる。

b 火葬墓

火葬墓には、藏骨器を伴うものと、人骨をそのまま埋納したものがある。前者を「藏骨器埋納土坑」、後者を「人骨埋納土坑」とする。

藏骨器埋納土坑（第22図）

藏骨器埋納土坑は3基確認されたが、原位置を留めない藏骨器が9個体以上あるので、元々は12基以上はあったと考えられる。3基の遺構は、丘陵頂部の最高所から東側へや下がった位置にまとまって確認された。

S X 3 「不識壺」と呼ばれる常滑産陶

器壺を藏骨器とする遺構である。陶器壺は破碎された状態で出土しており、搅乱しないはず壺に遭ったと考えられる。範囲確認調査坑の中にあり、遺構の形状は明確ではないが、直径約30cm程度の小ピット状と考えられる。遺構底面には、埋納された藏骨器を安定させるために置かれたと思われる幅10cm弱の川原石があった。藏骨器は、13世紀後葉から14世紀初頭頃のものと考えられる。

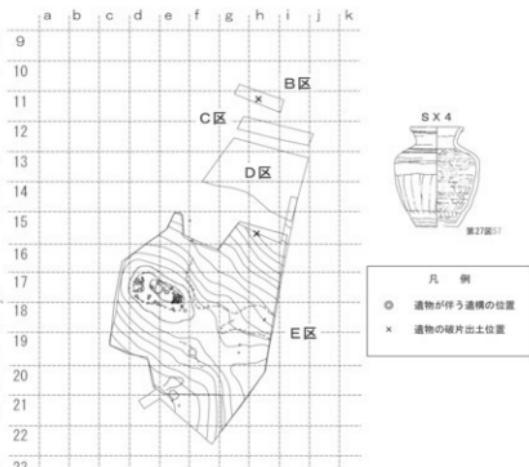
S X 4 常滑産陶器壺を藏骨器とする遺構である。壺に遭ったようで、体部下半分は無くなっているが、上半部はそのまま残されたようである。この遺構にも、底に幅10cm程度の川原石が確認された。藏骨器は、13世紀後半頃のものと考えられる。

なお、S X 4に納められていた陶器壺の破片は、丘陵北側斜面に散乱していた。最もも遠いものは遺構から30mほど離れて出土した（第23図）。

S X 9 常滑産陶器壺を藏骨器とする遺構である。口縁部は欠損しているが体部は完存しており、内部の人骨もほぼ埋納当時の状況が保たれていると考えられる。土器の肩部に幅10cm程度の川原石が据えられていた。藏骨器の形態はS X 4と同様で、13世紀後半頃のものと考えられる。

人骨埋納土坑（第22・24図）

人骨埋納土坑は18基確認され、全て火葬人骨であつ



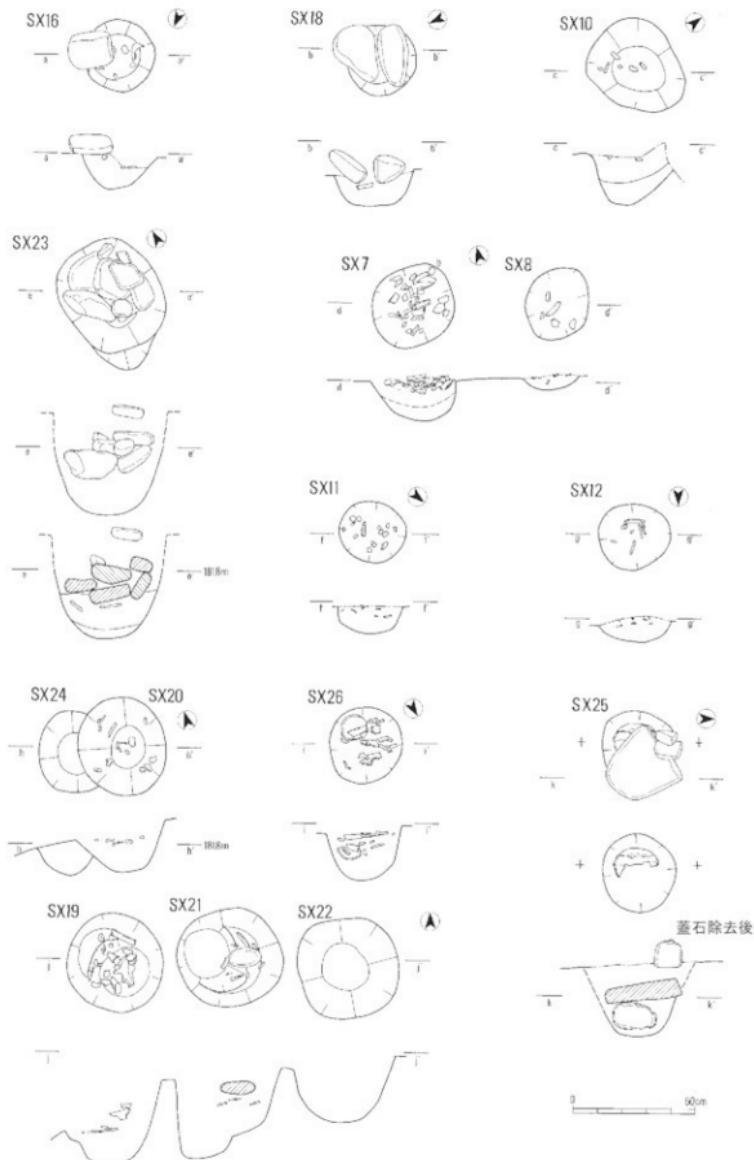
第23図 中世墓S X 4 藏骨器の破片散布状況

た。これらは、いずれも直径30~40cm程度の小ピット状の形態を呈し、深さは20~30cm程度のものである。なかには、20cm内外の川原石を伴うものも見られる。基本的な情報は第3表に示しているので、ここで特徴的な遺構についてのみ触れる。

蓋石を伴う土坑 火葬骨を埋納後、石を用いて蓋をしたと考えられるのがS X 16・18・21・23・25である。用いられている石は、いずれも川原石である。このうち、埋納骨を封鎖するような状態で石を配置しているのがS X 23・25で、S X 18もこれに類した状態と見られる。土坑上部に石を置いたように見えるS X 16も、遺構の遺存状態が悪いためにそう見えるだけで、本来はS X 23のような状態であった可能性も考えておくべきである。

S X 25は大きな平石を用いて蓋をしており、複数の小石を敷き詰めたものとは一線を画する施設といえる。

頭骨のみを埋納した土坑 一枚石の蓋を伴うS X 25からは、頭骨のみの埋納が確認された。調査時点では、歯牙の遺存も良好であったことから、頭部のみを土葬したもののと考えたが、分析の結果、火葬された頭骨であることが判明した（第7章参照）。いずれに



第24図 火葬墓個別実例図 (1:20) ※表示した高さ以外は全て182.0m

しても、頭骨のみがその形態を保ったままで埋納されていることは確かで、異様な埋納方法であることには違いない。

調査時点では、当該遺構の状況を正確に把握せず調査を行ってしまったが、下顎骨にあたる部位は見られなかった。頭骨は、北向き横位に置かれていた。**炭化材を伴う土坑** S X 10 と S X 17 には、火葬骨とともに炭化材が入っていた。とくに S X 10 は、火葬骨と炭化材が相半ばする状態であった。S X 10 の炭化材を分析した結果、焼土坑 S F 17 から出土した炭化材の組成に極めて類似していることが判明した（第Ⅷ章）。S X 10 からは鉄釘も 1 本出土している。これらの状況から、S X 10 に埋納された火葬骨および炭化材は、焼土坑 S F 17 から持ち込まれた可能性が高いと考えられる。

a 遺物等の見られない遺構

これら以外に、遺物（骸骨器）や火葬骨などが全く見られない遺構がいくつかある。これらには、明確なビット状を呈するものも含まれている。

この遺構は、後述する第4項 b の状況を踏まえれば、元々は屍骨器が納められていた土坑ではないかと考えられる。

これ以外では、S K 29 が注目される。S K 29 は経塚 S X 5 と規模が類似するため、S X 5 と同様の礫石經埋納土坑であった可能性があるが、内部からは土器片・火葬骨などは何も出土しなかった。

3 丘陵南斜面の遺構

丘陵南斜面では、焼土坑 2 基と焼石を含む落ち込み状遺構が 1 基見られた。これらは火葬に伴う茶毬の跡と考えられる。

a 茶毬跡と考えられる遺構

焼土坑 S F 15（第25図） 丘陵尾根線に近い位置にある。火葬に伴う茶毬跡と考えられる。東西約 1.15 m、南北約 1.0 m の不正方形で、斜面下方にあたる南部の壁面は流失していると考えられる。最もよく残っている遺構北壁付近で、遺構の深さは約 15 cm である。遺構底面および北壁側がよく焼けており、とくに底面の一部は黒一青黒色を呈し、よく焼け縮まっていた。

遺構埋土下層からは多量の炭化材とともに、鉄釘

が 7 本出土した。炭化材は、クリ・タケ・キハダ・カキなどがある（第Ⅷ章参照）。

焼土坑 S F 27（第25図） 南斜面の裾部にある。火葬に伴う茶毬跡と考えられる。東西 1.2 m、南北 0.96 m の隅丸長方形で、遺構面からの深さは約 0.3 m である。埋土下層（第3層）には炭化材を含むが、それほど多くはない。また、遺構の壁面もそれほど焼けてはない。炭化材を分析した結果、S F 17 とは異なり、マツを中心としていることが確認された（第Ⅷ章参照）。埋土第2層は遺構底面を掘り抜いているが、これは集骨の際の掘り込みに伴うものと考えられる。

遺構の時期を示す遺物は無いが、遺構の南外側からは室町期と考えられる五輪塔の火輪が出土している。また、遺構埋土中に見られた木炭はマツを中心としているもので、先述の S F 15 とは様相が異なっている（第Ⅷ章参照）。おそらく、S F 15 よりも新しい、15世紀を中心とした時期の遺構ではないかと考えられる。

b 茶毬跡に関連した遺構

落ち込み S Z 28（第25図） 南斜面の裾部からやや上がった位置にある。S F 27 に隣接する。茶毬跡に関連した施設と考えられる。

長軸約 3 m、幅約 1.5 m で、全体として中央が落ち込む構状を呈する。遺構の深さは 20 cm 程度である。遺構上部を中心に被熱痕のある川原石が見られ、その下部には不定形なビット状の遺構があり、炭化材が見られた。遺構そのものに被熱は見られないが、被熱痕のある複数の川原石の存在から、一種の茶毬跡である可能性も考えられる。

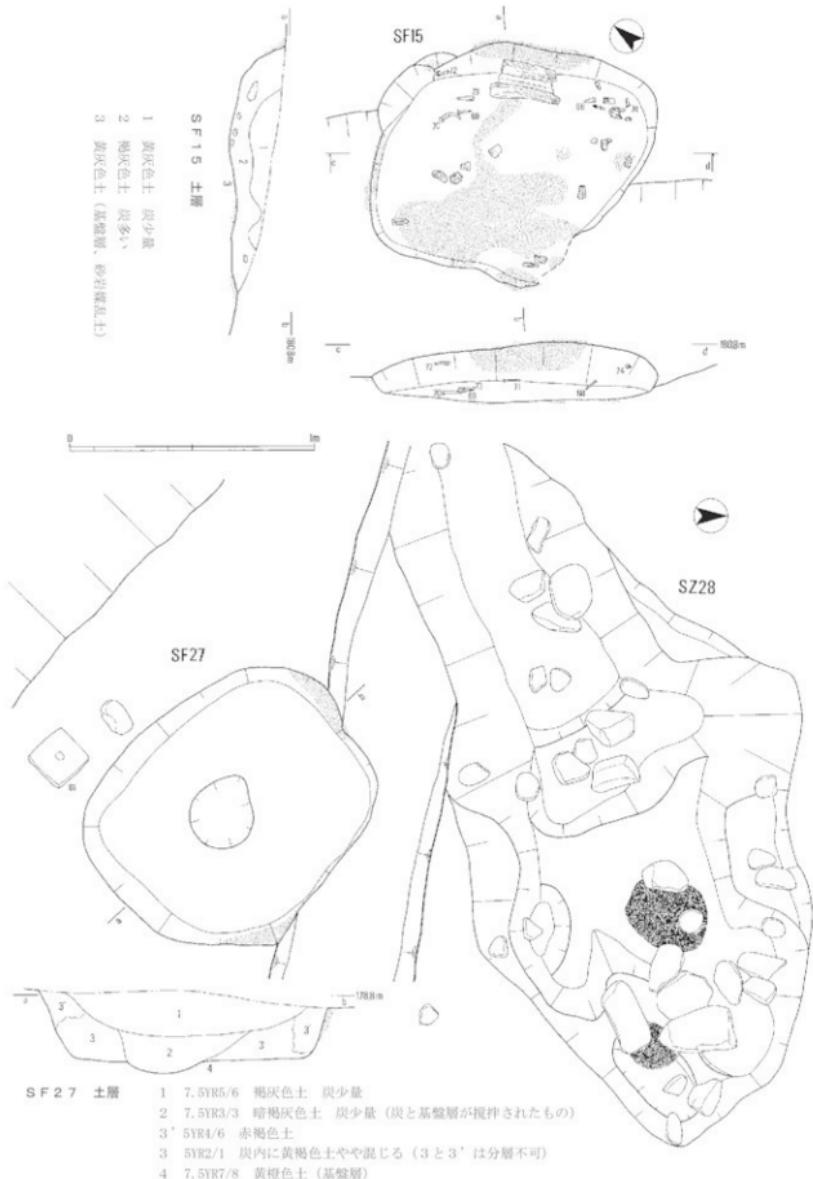
なお、S Z 28 から出土した炭化材を分析したところ、S F 27 の炭化材と同様な組成であった（第Ⅷ章参照）。遺構の位置関係と炭化材の組成の双方から、S F 27 と S Z 28 とは関連する遺構と見なすことができる。

4 その他（石造物等の出土状況）

遺構とは直接関係ないが、石塔類と土器類の出土状況からも遺跡の状況を見ておく。

a 石造物の出土地点

神打越中世墓に伴うと考えられる石造物には、五



第25図 烧土坑SF15・27 平面・土層断面図 (1:20)

輪塔と小型石仏がある。これらは、経塚SX5に伴うと考えられる五輪塔（水輪・地輪各1部材）以外は、丘陵斜面部から出土している（第20図）。

丘陵北斜面西部 丘陵頂部に近い北斜面西部からは、石仏2体、火輪2部材が出土した（第20図参照）。このうち、火輪1部材は経塚SX5に伴うものと考えられる

これらの石造物は、元々は丘陵頂部の経塚SX5とその周辺に立てられており、それらが転落したものと考えられる。

丘陵北斜面東部 丘陵頂部からやや離れた位置にある北斜面東部からは、五輪塔の空風輪2部材、水輪2部材がそれぞれ出土した（第20図参照）。このうち、空風輪2部材は尾根稜線上に近い位置から、経塚SX5に伴う陶器甕（第28図67）の破片とともに出土している。したがって、これらの石造物も元々は丘陵頂部に立てられていた可能性が高い。

丘陵南斜面 SF27の付近から、五輪塔の火輪1部材と石仏1体が出土した（第20図参照）。これらも元々は丘陵頂部に置かれていた可能性が考えられるが、調査区外東部の丘陵部にある沖打越中世墓方向からの転落である可能性もある。

b 土器類の出土土地点

藏骨器類 藏骨器および藏骨器と考えられる土器類は、同一個体と考えられる破片が調査区内に広く散らばっている状況が確認された。

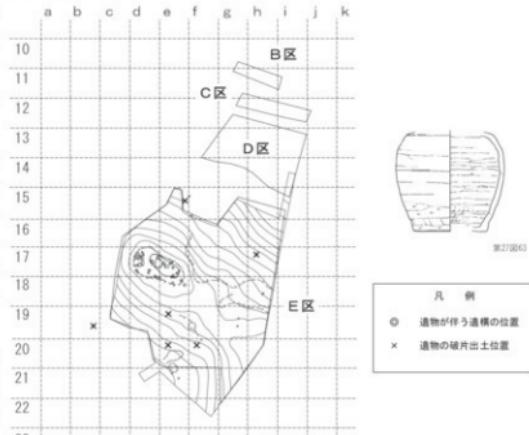
SX4やSX5の陶器壺・甕類の散布状況は、先に見た通りである（第19・23図）。他には、遺構に伴わない陶器壺も、広く散布している状況が確認できる。丘陵頂部の南北斜面に散在していた信楽産陶器壺（第27図63）は、出土地点がかなり離れていても接合した（第26図）。位置的に見て、丘陵頂部から四方にばらまかれたものと考えられる。

これらの状況から、沖打越中世墓はある時期に盜掘に遭い、破損した土器類が周辺に投棄されたと想定できる。調査は、この状態を確認したということになる。これを踏まえると、第2項c 第26図 藏骨器（63）の破片散布状況

で述べた藏骨器や火葬骨などの遺物が見られない土坑は、盜掘の際に藏骨器が引き抜かれた跡である可能性が高いものと考えられる。

土師器類 土師器皿類は、完全な形のものは無いが、丘陵頂部から集中して出土した。前述の藏骨器類の破片の出土状況と明確な違いがある。いくつかのものには灯明皿に用いたと考えられる痕跡があり、人骨埋納遺構の造成や、その後の墓参などに伴う遺物と考えられる。なお、後述のように、土師器皿類は藏骨器の示す時期よりも新しいものが複数あり、火葬骨埋納土坑に伴うものも含まれると考えられる。

（伊藤）



第3表 沖打越中世墓 遺構一覧

遺構名	性格	遺骨置地 座地・型式	時期	遺構規模 直径 (m)	遺構深幅 深さ (m)	遺構の特徴	出土人骨 (g) 乾燥時	人骨遺存状態	調査時の人骨状態	備考
S Z1	頭部の落ち込み						150	一部		複数時の落ち込みか 人骨は壇面時の複数か
S K2	土坑			0.6×0.4	0.28	楕丸長方形状	無?	目視確認不可	目視確認不可	遺構内にS X5 の便孔入る
S X3	藏骨器埋納土坑	常滑 6 a ~ 6 b	13c4/4	0.3	0.2	ビット状遺構に平石を置く 人骨・藏骨器を倒立させる	400	一部	壇内 白色	
S X4	藏骨器埋納土坑	常滑 6 a	13c3/4	0.3	0.18	ビット状遺構に藏骨器の半分を縦置(破断か?)	1,350	一部	壇内 白色	壇の半分は未確認
S X5	経塚	常滑 5 ~ 6 b	13c4/4	1.2×1.0	0.72	小溝状の大きめな穴口 石塔(木輪・地輪) 常滑中形横片	無	—	—	遺集の中部分は東西1.2m、 南北1.0m
S X6	人骨埋納土坑			0.37	0.23	ビット状	10	一部	微量 白色	
S X7	人骨埋納土坑			0.34	0.18	ビット状	3,000	一部欠か	微量 黑色	S X8 と並ぶ
S X8	人骨埋納土坑			0.28	0.08	ビット状	920	一部欠	微量 白色	S X7 と並ぶ
S X9	藏骨器埋納土坑	常滑 6 a	13c3/4	0.3	0.21	ビット状遺構に藏骨器を据え、周囲を石で固める	1,000	完存	壇内 白色	壇内に埋納時の人骨完存
S X10	人骨埋納土坑			0.42	0.2	ビット状	870	一部欠	多量の灰 釘1本 白色	灰多い
S X11	人骨埋納土坑			0.25	0.12	ビット状	1,020	一部欠	微量 白灰色	
S X12	人骨埋納土坑			0.28	0.08	ビット状	340	一部欠	微量 白色	
S X13	人骨埋納土坑		13c3/4	0.31	0.23	ビット状 土器器頭の底部片を蓋とする	2,700	ほぼ完存	微量 白灰色	土器器は南伊勢系か?
S X14	人骨埋納土坑			0.21	0.13	ビット状	20	一部	微量 白色	
S F15	焼土坑			1.15×1.0	0.21	壁面は赤~黒青色に強く焼けた	無?	目視確認不可	埋土から灰化材(竹拄 か)および釘7本出土	
S X16	人骨埋納土坑			0.28	0.14	ビット状 楕丸方形の石が上に乗る	690	一部欠	微量 白色	下顎骨あり
S X17	人骨埋納土坑			0.25	0.16	ビット状	5	一部	微量 白色	
S X18	人骨埋納土坑			0.28	0.2	ビット状 陶器形の円底石2個が上に乗る	2,500	ほぼ完存	微量 白灰色	上面に繩
S X19	人骨埋納土坑			0.39	0.34	ビット状(2段) 西側は土炒波出による破損	2,900	一部欠か	灰あり 骨盤あり	
S X20	人骨埋納土坑			0.4	0.26	ビット状 S X 2.4 より新	2,000	一部欠か	灰あり	
S X21	人骨埋納土坑			0.41	0.33	ビット状(2段) 土器に繩(1個)	6,550	ほぼ完存か	灰あり	
S X22	土坑			0.44	0.26	ビット状	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S X23	人骨埋納土坑			0.45	0.43	ビット状(椎円形) 土器を10個ほど縦で蓋	3,500	完存	灰あり	
S X24	人骨埋納土坑			0.33	0.27	ビット状 S X 2.0 より古	1,000	一部欠か	灰あり	
S X25	人骨埋納土坑			0.31	0.3	ビット状 3.0 cm大の石状石で蓋	450	完存?	調査時に一部欠損	埋納人骨は頭骨のみか?
S X26	人骨埋納土坑			0.32	0.22	ビット状	1,750	ほぼ完存	灰あり 骨は黒灰色	
S F27	焼土坑			1.2×0.95	0.3	楕丸長方形状 下部に炭層 壁面の焼けた跡は弱い	無?	目視確認不可	目視確認不可	土坑脇に玉輪軸(火輪)
S Z28	落ち込み			3.2×1.4	0.15	岩状の落ち込み、灰層伴う	無?	目視確認不可	目視確認不可	堆土内に被熱部のある繩を 数点合む
S K29	土坑			1.5×1.4	0.8	土坑状、遺物なし	無	—	—	経塚 S X 5 と関係か?
S K30	土坑			0.26	0.13	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K31	土坑			0.41	0.5	土坑状、遺物なし	無	—	—	S K32 と重複 藏骨器埋納土坑か?
S K32	土坑			0.29	0.41	土坑状、遺物なし	無	—	—	S K31 と重複 藏骨器埋納土坑か?
S K33	土坑			0.25	0.4	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K34	土坑			0.31	0.38	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K35	土坑			0.42×0.3	0.4	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K36	土坑			0.22	0.07	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K37	土坑			0.22	0.33	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?
S K38	土坑			0.39	0.31	土坑状、遺物なし	無	—	—	藏骨器埋納土坑か?

VII 沖打越中世墓の出土遺物

1 概要

沖打越中世墓から出土した遺物には、土器類（土師器・瓦器・瓦質土器・陶器）、金属製品類（釘）、石製品類（石塔・石仏・礎石経）などがある。土器類には、藏骨器として用いられたものと、供献・祭祀に伴うと考えられるものとがある。

出土遺物の時期は13世紀後葉から14世紀初頭頃を中心としているが、石仏と一部の土師器には15世紀後半以降のものもある。

以下、個々の遺物を見ていく。出土地点や属性の詳細は、後掲の出土遺物観察表（第4~8表）を参照されたい。また所属時期については、章末の文献を参照した。

2 中世墓群上面で用いられた遺物

土師器 44~49は土師器の皿類。44・45は小皿、46~49は皿に相当する。44~49の口縁部には油煙痕が見られ、灯明皿として用いられたと考えられる。形態から見て、44~47は13世紀後半から14世紀初頭頃のもの、48~49は15世紀後半代のものと考えられる。49は経塚S X 5の埋土中から出ているが、経塚を被壊（盜掘）した際に混入したものと考えられる。
瓦器 50~53は瓦器碗。50~52は浅い皿状を呈しているが、楕の形態変化によるものと考えられる。53は福田典明氏による8期、50~52は9期に相当する。53は13世紀後葉、50~52は13世紀末から14世紀初頭のものである。

3 藏骨器として用いられた遺物

藏骨器として用いられた土器には、陶器・土師器・瓦質土器がある。原位置を概ね保っていたのはS X 3(54)、S X 9(56)、S X 4(57)、S X 13(64)のみである。これ以外にも、本来は藏骨器として用いられていていたと考えられるものが調査区周辺部から散乱

した状態で出土している。ここでは、これらも含めて記述する。

陶器類 54~63は陶器類。63は信楽・伊賀産、他は知多（常滑）産である。

54は不識壺と呼ばれる短頸の壺。口縁部はN字状を呈する。頸部には焼成前に穿たれた円孔が2ヶ所ある。また、円孔とほぼ同じ箇所に、格子状枠内に「×」をあしらったスタンプ文を2箇所並べて押している。体部下半は縱方向の板ナデが見られる。類似する資料は、加世端1号窯跡・亀塚地5号窯跡（以上、いずれも愛知県常滑市）出土品に見られる。赤羽一郎・中野晴久氏による編年（以下、「常滑編年」）の6 a型式ないしは6 b型式に相当する。

55~57は玉縁口縁壺。55は弱い回転ナデにより、断面三角形状を呈する口縁部を形成するもの。肩部にはヘラ状工具による沈線が1条めぐっている。中田池A 2号窯跡（愛知県武豊町）出土品に類似するため、常滑編年の6 a型式に相当すると考えられる。

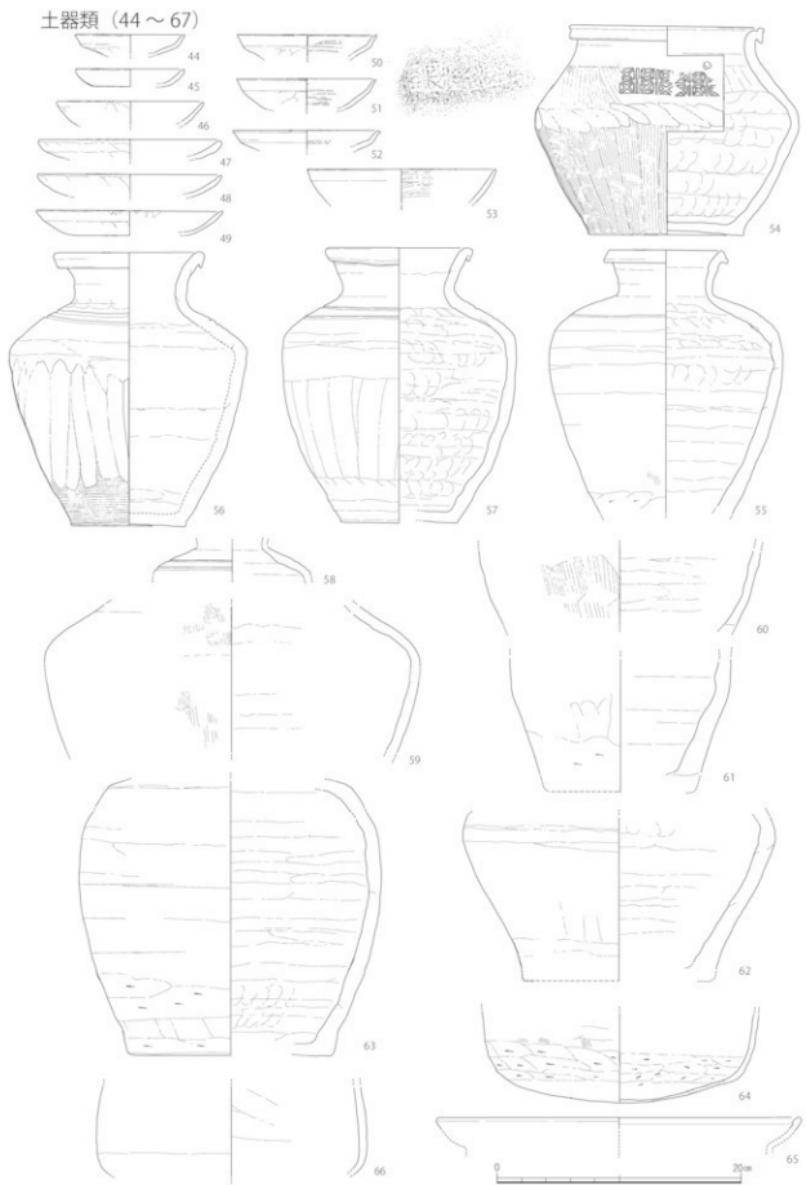
56は外反する口縁部に弱い折り返しで玉縁を形成する。肩部にはヘラ状工具による沈線が2条めぐるが、それぞれは個々に描かれている。小森B-1号窯跡（常滑市）出土品に類似し、常滑編年の6 a型式ないしは6 b型式と考えられる。57も56と同様な形態だが、玉縁伏口縁は57よりも丸い。上芳池3号窯跡・檜場御林A 1~5号窯跡の出土品に類似しており、常滑編年の6 a型式に相当すると考えられる。

58は壺の肩部。2条の沈線は、回転ナデを施す前に入れられている。やや異質な印象を持つため、知多（常滑）産ではないかも知れない。

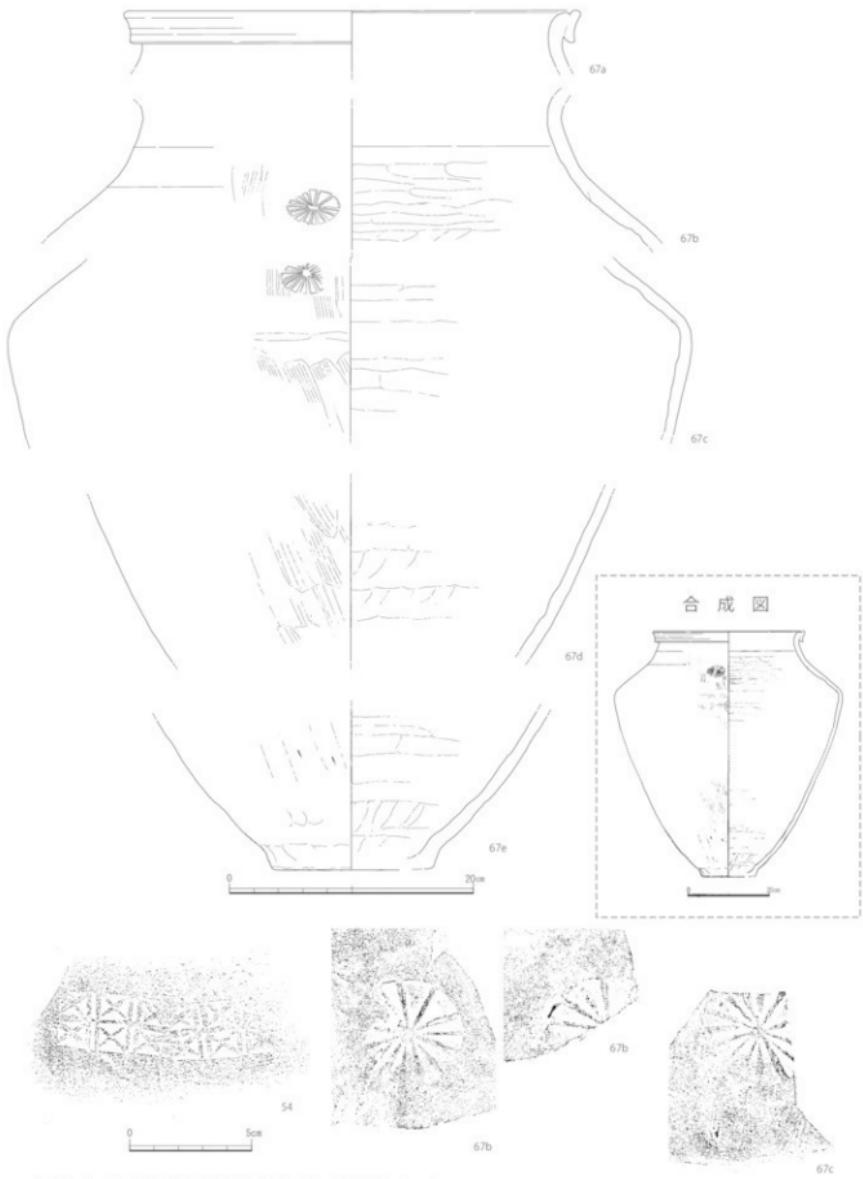
59~62は体部片。59は壺の肩部から体下半部にかけての破片、60と61は体部下半の破片である。59と60は、54と同様なN字状口縁を呈すると考えられる。61・62は玉縁状口縁になるものと考えられる。

63は信楽・伊賀産と考えられる壺の体部片。内外面ともに、横方向のナデを基調とした調整が見られる。素地は、知多（常滑）製品と異なり、白灰色系で緻密である。14世紀代のものか。

土師器 64は土師器鍋の底部。人骨埋納土坑である



第 27 図 沖打越中世墓出土遺物実測図(1) 土器類(1) (1 : 4)



第28図 沖打越中世墓出土遺物実測図(2) 土器類(2) (1:4)

S X 13 の蓋のような状態で出土したが、本来は藏骨器であった可能性もある。底部下半の外面に横方向の帯状ヘラケズリが見られ、全体に器壁も薄い。これらの特徴から、南伊勢系鍋と見られる。南伊勢系鍋の第1段階ではないしは第2段階に相当し、13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。

瓦質土器 65・66 は瓦質土器の鍋。65は口縁部の小片だが、復元したような内湾形を呈すると考えられる。66は体部片で、底部は丸底で体部が直線的になる形態のものと考えられる。13世紀後半から14世紀前半にかけてのものと考えられる。

4 経塚容器として用いられた土器

陶器壺 67 は知多（常滑）産の壺。経塚 S X 5 を中心に、各所に破片が散乱していた（第19図参照）が、同一個体になると想定される。

破片ばかりの出土ではあるが、口縁部から底部にかけて a - e の部位が確認できる。各部位から 67 の壺を復元すると、口縁部径 37.4 cm、器高約 62 cm、体部最大径約 56.0 cm のものとなる。a は口縁部で、N 字状を呈する。b・c は頸部から体部上半にかけての部位。肩部には、菊花状のスタンプ文が押印されている。同一部位のスタンプ文が 3箇所以上確認できるため、肩部にはまばらに複数箇所このスタンプが押されていたと考えられる。

この土器は、福住 3・21・22 号窓跡（常滑市）出土品に類似するため、常滑編年 6 a 型式に相当し、13世紀後葉頃のものと考えられる。

5 金属製品類

金属製品では、棺に伴うと考えられる釘がある。棺は火葬されたと見なされるため、これらの出土状況から棺の構成は想定できない。

釘 68 - 75 は鉄釘。68 - 74 の 7 本は焼土坑 S F 17 から、75 は S X 10 から出土した。いずれも断面長方形で、頂部は敲打によって変形している。また、先端部が不自然に曲がっているのは、棺に釘を打ち付けた後に飛び出した先端を折り曲げたためかと考えられる。

いずれも被熱しているはずだが、その痕跡はあまり明確ではなかった。

6 石塔・石仏類

石塔では五輪塔が、石仏では地蔵菩薩立像がある。五輪塔はいずれも組合せ式のもので、結合部にホゾとホゾ孔を伴うものである。

経塚に伴う五輪塔 76（火輪）は E 区北斜面から、77（水輪）・78（地輪）は経塚 S X 5 の上部から出土したものである。76 の出土地点は異なるが、形態と用材の類似から、この 3 点で同一の五輪塔を構成すると考えられる。いずれも花崗岩である。

76 は頂部を欠損するが、全高 14.4 cm、幅 22.5 cm の火輪。空風輪と組み合う上端には直径 5.0 cm・深さ約 2.7 cm の孔が、水輪と組み合う下端には直径 7.0 cm・深さ 0.8 cm の孔がある。軒幅は約 5.2 cm、軒高は 7.0 cm である。

77 は直径 22.2 cm、高さ 15.8 cm（ホゾを除く）の水輪。最大径部は、中心からやや上方にある。上下の火輪・地輪と組み合う部分は、全体をやや彫り落めてホゾを作り出している。ホゾは、その周囲を鑿で彫り落めて形成している。

側面の 4 方向には墨書きで梵字が書かれ、「バ」（東方）、「バク」（北方）、「パン」（西方）は読み取れるが、「パー」（南方）は滅失している。

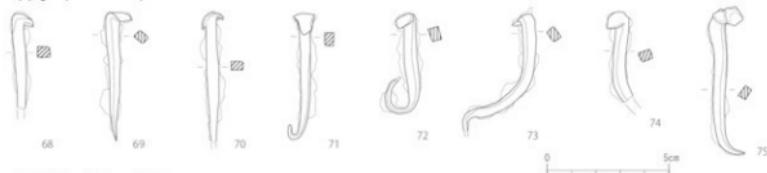
78 は最大幅 22.1 cm、辺高約 12.4 cm、最大高 13.2 cm の地輪。中心から周囲に向かって水落し状に下がっている。上面と 4 側面は丁寧に調整されているが、下面の調整は粗い。ただ、上下面の調整は、いずれも外側から中心に向かって鑿調整している点では共通する。上面中央の水輪と組み合う部分には、直径 5.1 cm・深さ 1.2 cm の孔がある。

側面には墨書きの梵字があり、「アク」（北方）のみ確認できる。他面にも梵字らしき墨痕があるが解読は不可能であった。年号等の銘は無いようである。

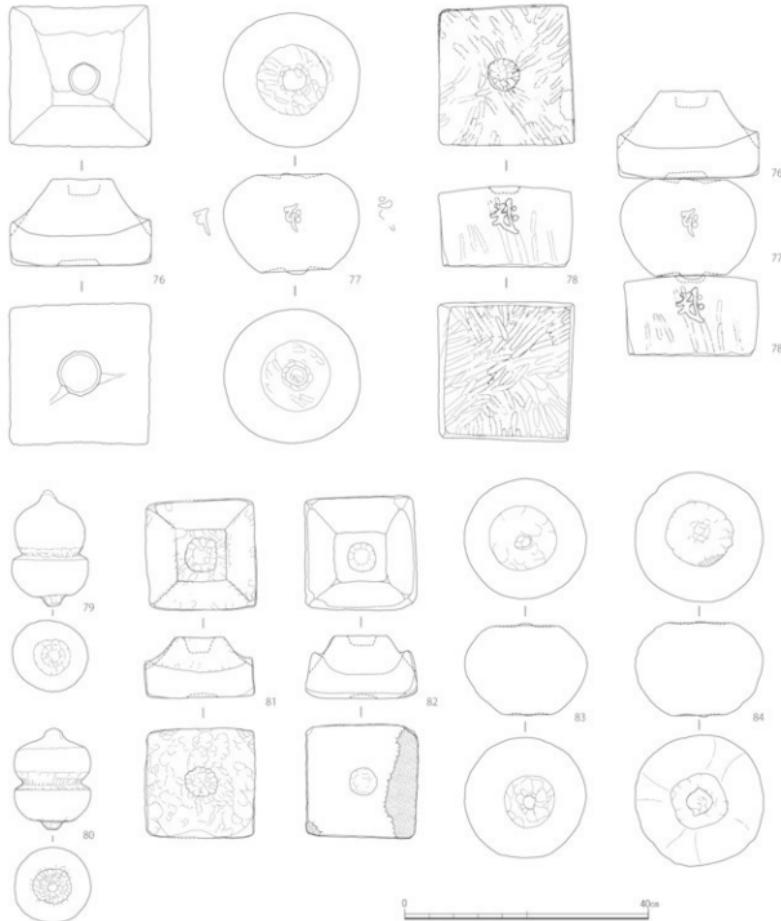
経塚に伴う五輪塔は、地輪の高さが低く、水落しを伴うという特徴がある。経塚の容器（陶器壺、67）に伴い、13世紀後葉頃のものと考えられる。

その他の五輪塔 丘陵の北斜面・南斜面からは、経塚に伴う五輪塔以外の五輪塔部材が出土している。い

鉄釘 (68 ~ 75)



石塔類 (76 ~ 84)



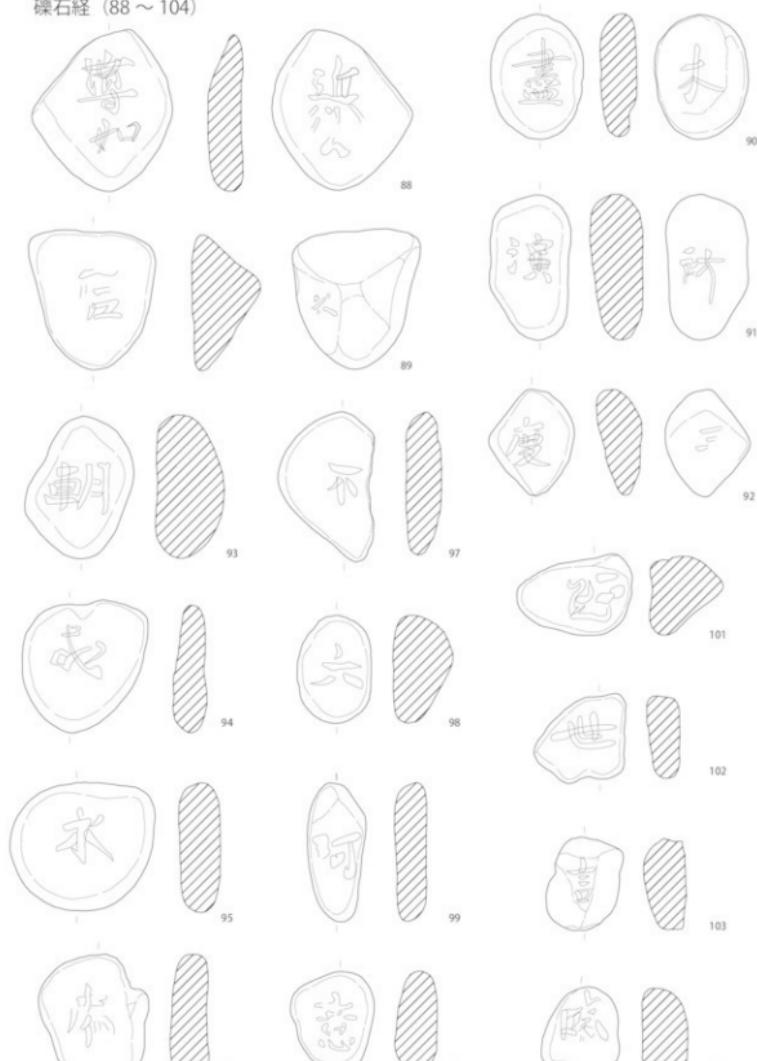
第29図 沖打越中世墓出土遺物実測図(3) 鉄製品・石塔類 (1:2、1:8)

石仏 (85 ~ 87)



第30図 沖打越中世墓出土遺物実測図(4) 石仏 (1:8)

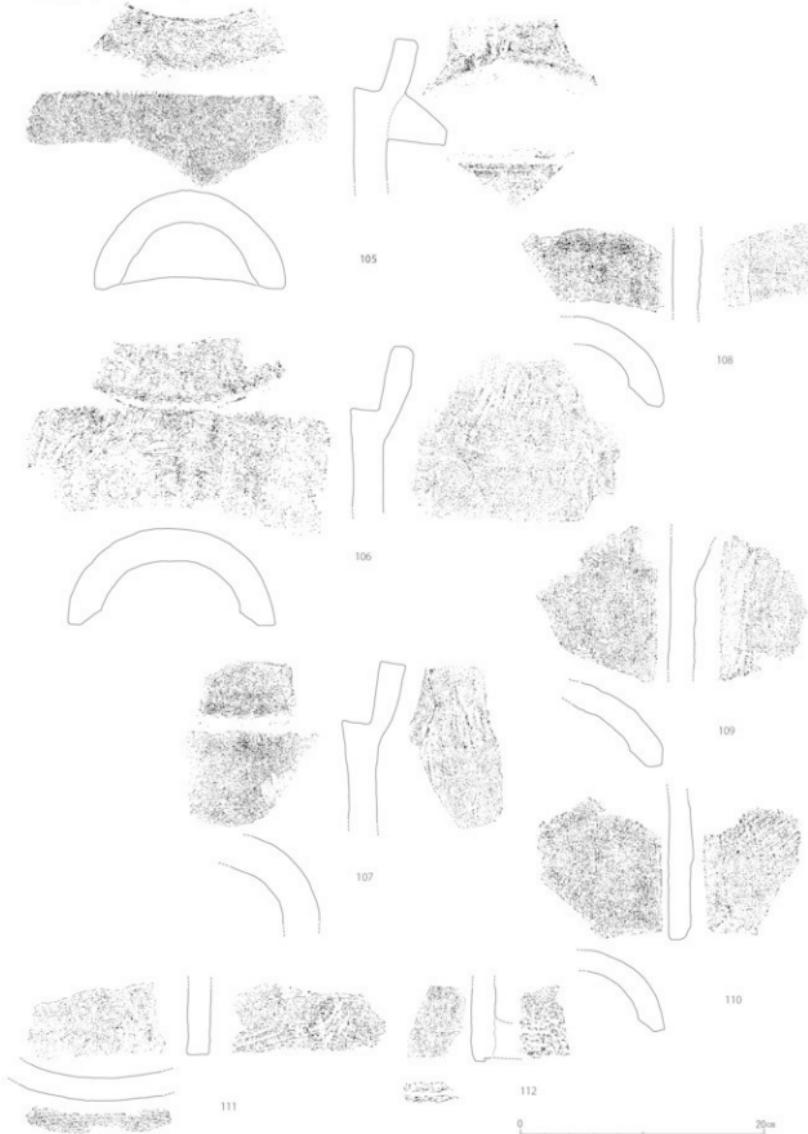
砾石経 (88 ~ 104)



0 10cm

第31図 沖打越中世墓出土遺物実測図(5) 砂石経

瓦類 (105 ~ 112)



第32図 不動寺周辺出土遺物実測図 瓦類

ずれも組み合うものは無い。

79・80は空風輪で、いずれも花崗岩で、自然面は見られず、全て調整面である。79は空輪部分が丸く、風輪の側面も丸みを帯びているため、14世紀代のものかと考えられる。80は空輪の側面が一部直線的になっており、せんぐりした形であるため、15世紀代以降のものと考えられる。

81・82は火輪。81は凝灰岩質安山岩（いわゆる大洞石）製。底面には右回りに細かな鱗痕跡が見られる。82は花崗岩製。角の取れた川原石が原材で、底面の一部に自然面が残っている。

83・84は水輪で、いずれも花崗岩製。最大径部は、83はほぼ中央に、84はやや上方に見られる。上下面ともにホゾを伴う。84の上面には一部自然面がある。84を上面から見るとやや方形を呈しているので、原材は方形の川原石を用いていると考えられる。

石仏 85は方形の枠内に地蔵菩薩立像を半肉彫りするもので、花崗岩製。上端部にはホゾがあり、本来は笠を伴うことがわかる。地蔵菩薩は正面で合掌する形態で、衣の裾は足横を完全に覆っている。正面と上面は丁寧な研磨がなされているものの、側面・裏面・底面の調整は粗い。原材は川原石で、裏面に一部自然面が残る。裏面では、蓋により中央および外側辺部から削り込んで調整している状況がよく観察できる。地蔵菩薩の形態から、古く見ても15世紀末頃、おそらくは16世紀代のものと考えられる。

86は略方形の形態で、その中央に2体の地蔵菩薩立像を並べるもの。花崗岩製。上端部にホゾがあるため、85と同様、本来は笠を伴っていると考えられる。2体の地蔵菩薩はいずれも正面で合掌する形態。衣の裾は長いが、正面で両脚は見えている。足下には沈線状の削り込みを施すが、その下に蓮華座は描かれていない。85と同様、丁寧な研磨がなされているのは正面と上面のみである。原材は川原石で、正面の上下端や裏面に一部自然面が残る。裏面には鱗痕が残る。地蔵菩薩の形態から、16世紀初頭以降、17世紀前半以前のものと考えられる。

87は上部を欠損するが、やはり地蔵菩薩立像と考えられる。花崗岩製。像の部分が前に突出した形であり、おそらく舟形光背を作らうものと考えられる。像様は、正面で合掌をする形か、あるいは宝珠を掲げ

る形かと考えられる。衣の裾は短く、脚部は全体が出ていて、足下に蓮華座の表現は無い。調整は、正面のみが丁寧に研磨され、他の面は荒削りのままである。裏面には鱗の痕跡が残っているが、あまり鮮明ではない。これらの特徴から、15世紀後半から16世紀代にかけてのものと考えられる。

7 碓石経

全体数 碓石経と考えられる小円鍬は、散乱した状態で調査区内各所から出土した。その合計は、全部で345点である。しかし、墨痕が確認できたのは図示した17点のみで、いずれも経塚S X 5の土坑内からの出土であった。また、出土量が実際に埋納された全てとは考えられず、本来はもっと多くの碓石経があつたものと考えられる。

確認された墨書 文字を確認した碓石経は、1石に1文字のみを記したものほか、1石に2文字のもの、1石の表裏に文字を記載したものなどがある。また、筆跡を見ると、88・90は比較的類似するものの、93・102などはそれとは明らかに異なる。このように筆跡に関しては2種類以上あるため、複数名の識字層が関与していると考えられる。

8 その他

沖打越中世墓の北方にある不動寺の、事業地に隣接する地点で採集した瓦類である。いずれも室町時代（15世紀代）以前と考えられるものである。

105～110は丸瓦。61は凹面にひつかけがあるもの。109と110の凹面にはコビキA痕が明瞭に残る。

111は平瓦。軒先側の端部には板目状圧痕が見られる。112は軒平瓦で、波瀬状の文様が一部観察できる。

（伊藤）

＜文献＞

- ・日本福祉大学知多半島総合研究所編『中世常滑焼をおって』資料集、1994年)
- ・福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」(『中近世土器の基礎研究』20、2006年)
- ・伊藤裕像「南伊勢・志摩地域の中世土器」(『三重県史』資料編考古2、2008年)
- ・小林謙一・佐川正敏「平安時代一近世の軒丸瓦」(『法隆寺

昭和資料帳 10 伊列留我』(小学館、1989 年)

・坪井利弘『日本の瓦屋根』(理工学社、1976 年) 昭和資料帳 10 伊列留我』(小学館、1989 年)

・森田克行『第 5 章考察第 2 節遺物IV星瓦』(『浜津高槻城本丸跡発掘調査報告』高槻市教育委員会、1984 年)
・山崎信二『近世瓦の研究』(同成社、2008 年)

第 4 表 沖打越中世墓出土遺物（土器）観察表

番号	器種 器名	縦・質	直径等	グリッド	遺構・層名等	その他の出土地点	直徑(cm)	測定・技術的特徴	胎土	色・調	残存度	特記事項
44	8-1	土器類	小皿	d 17	遺構面上		11.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	黄黄褐	0層1/12	薄手 小盤に油墨痕
45	8-6	土器類	小皿	c 17	表土		9.5 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	褐	0層1/12	
46	8-7	土器類	小皿	c 17	表土		11.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	赤	0層1/12	
47	8-3	土器類	皿	c 16	表土		11.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	褐	0層1/12	罐體外部に無い面をつくる
48	8-4	土器類	皿	c 17	SX2		11.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	褐	0層1/12	
49	8-5	土器類	皿	d 17	SX5		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	黄褐	0層1/12	罐體に油墨痕
50	8-8	瓦器	鏡	d 17	SZ1		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰白	0層1/12	
51	8-7	瓦器	鏡	d 17	SZ1		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰白	0層2/12	
52	8-9	瓦器	鏡	d 17	SZ1		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰白	0層1/12	
53	8-10	瓦器	鏡	d 17	遺構面上		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰	0層1/12	
54	3-1	陶器 (実物)	瓶	c 17	SX3		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	赤	0層1/12	側面に赤或瓦孔2個
55	3-2	陶器 (実物)	瓶	d 17	S 2.1.1	d 17S 2.1.1	10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	暗赤	0層4/12	
56	3-1	陶器 (実物)	瓶	c 18	SX9		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	暗赤	0層1/12	側面光沢
57	3-2	陶器 (実物)	瓶	c 17	SX4	h 1.5表土, h 1.1 表土	10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	赤	0層6/12	
58	3-3	陶器 (実物)	瓶	d 17	表土		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	暗赤	0層3/12	沈澱は削除の形に残す
59	3-4	陶器 (実物)	瓶	c 17	表土		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	赤	0層1/12	体積2升
60	3-5	陶器 (実物)	瓶	b 16	遺構面上		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰赤~灰	0層2/12	
61	3-6	陶器 (実物)	瓶	c 17	遺構面上	a 1.7 表土	10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰	0層7/12	
62	3-1	陶器 (実物)	瓶	c 18	表土		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	赤	0層2/12	
63	3-1	陶器 (実物)	瓶	h 17	表土	+19表土, [10表土, +20表土, +15 表土], 表面無	10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰白~灰 表面に赤い赤	0層4/12	表面に軽微 上部は様化しない 表面2升
64	3-1	土器類 (実物)	瓶	d 17	SX13		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	黄	既定存	
65	3-1	瓦器	鏡	f 1.9	表土		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰	0層1/12	0層部分は玉環状
66	3-2	瓦器	鏡	f 1.6	表土		10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰	0層10 1/12	
67	3-1	陶器 (実物)	便	c 17	SX5	+16表土, +15表土, +15表土, g 15表土, +17表土, d 17 [19表土, 19表土, 1 20表土], 上部, c 1.8 表土, c 15表土上, c 15表土, g 15表土 上,	10.0 縦走	内:ナガーナコナガ 外:ナガーナコナガ	赤	灰白 赤:オマーリー 表面無	0層1/12	多量の碎片となっている スタンプ文字は腹間に3箇所以上

第 5 表 沖打越中世墓出土鉄製品一覧

番号	実測番号	名称	グリッド	遺構・層名等	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	断面形	特徴ほか
68	028-05	鉄釘	f 1.9	SPF1515	3.9+	0.5	0.4	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ
69	028-01	鉄釘	f 1.9	SF1513	5.2	0.5	0.3	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ
70	028-04	鉄釘	f 1.9	SF1514	5.2+	0.5	0.4	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ
71	028-06	鉄釘	f 1.9	SF1517	5.1	0.5	0.4	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ 先端部が曲げられている
72	028-02	鉄釘	f 1.9	SF1511	4.1	0.5	0.4	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ 先端部が曲げられている
73	028-03	鉄釘	f 1.9	SF1512	5.8+	0.5	0.3	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ 先端部が曲げられている (2回屈曲)
74	028-07	鉄釘	f 1.9	SF1516	3.7+	0.5	0.3	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ 热見見られる
75	028-08	鉄釘	d 17	SX10	6.0	0.5	0.4	長方形	頂部は鍛打によるつぶれ 热見見られる

第6表 沖打越中世墓出土石塔・石仏一覧

報告番号	実測番号	名称	グリッド	遺構・層名等	高さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	材質	調整・技法の特徴
76	011-01	五輪塔・火輪	f 1 5	北斜面落土	14.4	23.2	23.0	花崗岩	上面に組み合せの穴穴 文字は見えない(風化?)
77	024-01	五輪塔・水輪	d 1 7	S X 5 - s 2	16.3	22.3	22.3	花崗岩	上下に組み合せの穴穴 西面に墨書き文字(バ・バク・バシ)は削除可能
78	025-01	五輪塔・地輪	d 1 7	S X 5 - s 3	13.2	22.2	22.6	花崗岩	上下に組み合せの穴穴 西面に墨書き文字(アクのみ形状確認可能)
79	010-01	五輪塔・空塔輪	g 1 9	東側斜面落土2	18.4+	12.5	12.4	花崗岩	空輪先端は欠損 下面の側は大きく面取りをする
80	010-02	五輪塔・空塔輪	g 1 9	東側斜面落土1	16.5+	12.5	12.3	花崗岩	空輪先端は欠損 下面の側は細かい面取りをする
81	014-01	五輪塔・火輪	e 2 1	黄灰色土 s 1	9.8	18.0	17.8	福井県賀茂山石	石材は通称「大瓶石」 全体に細かい調整で整形
82	015-01	五輪塔・火輪	e 3 4	北斜面落土	10.2	18.3	18.6	花崗岩	下面に原材自然面一部残る 原材は川原石
83	012-01	五輪塔・水輪	g 1 8	北斜面 s 3	15.3	20.0	19.9	花崗岩	
84	013-01	五輪塔・水輪	g 1 8	北斜面 s 4	15.7	21.0	20.6	花崗岩	上面に原材自然面 原材は方形の川原石
85	016-01	平行石仏 (地蔵菩薩像)	e 1 5	北斜面落土	46.3	29.4	13.1	花崗岩	表面欠損 前面のみ研磨 裏面に堅板帶 表面は原材自然面もしくは川原石
86	017-01	平行石仏 (二輪地蔵菩薩立像)	e 1 5	北斜面落土	30.2	19.9	12.1	花崗岩	表面欠損 前面の後部のみ研磨 裏面に堅板帶 表面は原材自然面一部埋込 原材は川原石
87	018-01	火骨形石仏 (地藏菩薩立像)	e 2 1	黄灰色土	27.2+	21.2	12.5	花崗岩	上面を欠損 前面の後部のみ研磨 裏面に堅板

第7表 沖打越中世墓出土碌石經一覧

報告番号	実測番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	記載文字(表)	記載文字(裏)
88	026-01	6.6	5.8	1.4	84.0	花崗岩(川原石)	「尊」	「近」
89	027-12	5.8	5.4	2.8	99.8	花崗岩(川原石)	「延」?	「六」?
90	026-03	5.2	3.9	1.5	45.6	砂岩(川原石)	「鑑」	「木」
91	026-06	5.9	3.4	2.2	65.3	花崗岩(川原石)	「眞」	「跡」?
92	027-11	4.3	3.5	1.8	29.7	花崗岩(川原石)	「鑑」	「三」?
93	026-02	5.9	4.5	2.6	93.5	花崗岩(川原石)	「鑑」	
94	027-13	5.4	5.2	1.4	53.2	花崗岩(川原石)	「成」か「威」	
95	027-15	6.9	5.3	1.7	84.3	花崗岩(川原石)	「永」	
96	027-16	5.1	4.6	1.5	58.5	花崗岩(川原石)	「□(不明)」	
97	026-09	6.1	4.0	1.4	46.4	花崗岩(川原石)	「不」	
98	026-04	4.4	3.0	2.4	40.4	花崗岩(川原石)	「元」	
99	027-10	5.8	2.4	1.3	29.3	砂岩(川原石)	「圓」	
100	027-17	4.1	3.5	1.7	35.1	花崗岩(川原石)	「圓」	
101	026-07	4.7	3.4	3.1	50.5	花崗岩(川原石)	「正」?	
102	026-05	3.7	3.5	1.4	26.2	花崗岩(川原石)	「世」	
103	026-08	3.8	3.0	1.7	24.1	花崗岩(川原石)	「世」	
104	027-14	3.4	3.3	1.9	28.0	花崗岩(川原石)	「輪」	

第8表 瓦類一覧

報告番号	実測番号	瓦名	グリッド	遺構・層名等	古量(g)	調整・技法の特徴	色調	特記事項
105	022-01	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅15.6	凸面:ケズリ 四面:布目板(一組)	10BG5/1 寶冠	玉縁部四面に「拂り止め」が付く
106	023-01	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅17.0	凸面:ケガキ・ケズリ 凹面:布目板(擦経あり)→斜め方向コビキ板	10FR1/1 にぶい黄緑	
107	021-01	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅2.9	凸面:ケガキ 凹面:布目板	10YR5/1 橙	
108	019-02	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅2.2	凸面:ケガキ 凹面:布目板	10YY4/1 橙	
109	010-02	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅2.0	凸面:織目板→ケガキ	2.5YT7/3 浅黄	
110	014-01	丸瓦	-	不動寺北西面 採集	幅1.8	凸面:織目板→ケガキ 凹面:布目板(斜め方向コビキ板)	10YR7/1 淡白	
111	013-01	平瓦	-	不動寺北西面 採集	幅1.6	凸面:ハナレ紺注痕 凹面:ナダ 四面:ナダ	10YR1/3 にぶい黄緑	兩斜面に板目並
112	012-01	軒平瓦	-	不動寺北西面 採集	幅1.9	凸面:ナダ 四面:ナダ	10YR6/1 淡	瓦当面は技術文ないしは唐草文

VIII 古墳と中世墓の自然科学分析

1 分析の目的と結果の認識

分析の目的 沖打越1号墳・沖打越中世墓の発掘調査に關し、つぎの分析を実施した。

【沖打越1号墳】

- ①埋葬施設1南部の有機質（骨状物質）の同定
- ②東周溝内埋土の花粉分析

①は、棺内に見られた有機質が、骨（人骨）に相当するのかどうかを確認するためである。②は、沖打越1号墳が築造された時期の自然環境を把握するためのものである。

【沖打越中世墓】

- ③火葬人骨の分析
- ④火葬施設（茶毘跡）内に残された炭の分析

③は、各遺構に埋納された火葬骨の分析により、性別・年齢のほか、可能であれば血縁関係も追求できればと考えた（これは結果的に無理であった）。④は、火葬に際しての用材に何らかの特徴があるのか、あるいは、中世墓形成時期の自然環境に関する資料が得られることを目的とした。

分析結果の認識 科学分析の結果は、当初の予想以上の成果が挙がった部分がある一方、予想に反してあまり判然としなかったことも多かつた。

①は、当初の予想通り、有機物質が人骨であることが判明した。これにより、棺痕跡の東側に寄つて埋葬遺体のあることがわかった。棺内の利用方法を探る上で重要な成果である。

②では、当地的土質が砂礫層を基本としていたため、あまり良好な情報を引き出し得なかった。しかし、④との比較により、当地の時代毎の違いは見出すことができる。

③では、人骨であることが分かっても、その性別や年齢などは予想以上によく分からなかつた。火葬された人骨の限界なのかも知れない。しかし発掘調査資料を提示する側としては、なぜ分からなかつたのかという情報も大切なことで、今後分析委託機関とも議論を重ねたい。

④では、2基確認された火葬施設の差が顯れた。時期によって用材の種類が異なることは、当地の植生の変化を示すものとして興味深い。

課題 科学分析の結果は、当然のことながら委託者の期待どおりのものになるとは限らない。予想に反して重要な成果が得られることもあれば、その逆もあり得る。今回の分析についても、この両方の側面があつたといえる。

今後の課題として、なぜ結果が出なかつたのかの情報と共有することが必要であることが判明した。この共有により、より一層意義のある分析を実施することにつながるであろう。

（伊藤）

2 科学分析報告

本報告では、4世紀末（沖打越1号墳）及び13世紀末頃の古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を、古墳および13世紀末の火葬骨の詳細、古植生、火葬灰の痕跡等に関する情報を得ること目的として、灰像分析、炭化材同定、土壤理化分析、骨同定を実施する。

a 1号墳および中世墓出土人骨の鑑定

調査区で検出された火葬埋納土坑、藏骨器などから多数の人骨が出土している。ここでは、これら人骨の特徴について観察記載を行い、遺構内での個体数、推定性別、推定死亡年齢に関する情報を得る。

火葬人骨の場合、土葬人骨に比較して一般的に保存状態が良いが、被熱による消失・変形・収縮などが生じている。橋崎（2007）によると、被火葬者の場合、個体数把握において有効な側頭骨や歯が破損している場合が多く、上下顎骨、上腕骨、大腿骨、頭骨、膝蓋骨が個体数把握で有意な部位となるとされる。性別については、土葬人骨の場合、寛骨・頭蓋骨・四肢骨・歯や、様々な部位の測定値により推定される。しかし、火葬人骨ではこれらの部位が細片化あるいは収縮している場合が多く、性別推定に有意な部位は頭蓋骨片・下顎骨骨頭・上腕骨骨頭・大腿骨骨頭等に限られてくる。これらも收骨により検出されない場合が

多く、被火葬者の性別はどうしても不明となる場合が多いとされる。死亡年齢の推定は、土葬人骨の場合、未成年であれば歯の萌出状態、成人では頭蓋骨縫合の癒合度・歯の咬耗度・寛骨の恥骨結合部の変化から推定されるが、火葬人骨では、歯のエナメル質が破損しており、他の部位も破損していることが多く、詳細な年齢を推定することが難しいとされる。このように火葬人骨の場合、土葬人骨と異なる観察が必要となり、今回の調査でもそのような観点から観察を行った。

(1) 人骨資料

対象人骨試料は、蔵骨器 SX3・SX9・SZ1 上・SX4、人骨埋納土坑 SX26、火葬骨埋納土坑 SX6 ～ 8・SX10・SX11 北・SX12 北・SX13・SX14・SX16 ～ 21・SX23 ～ 25 から出土したもの（試料 1 ～ 11, 13 ～ 23）、5 世紀後半の 1 号墳埋葬施設 1 の墓壙（棺内）から出土骨（試料 28）である。このうち、火葬骨埋納土坑 SX7 は北側と南側、火葬骨埋納土坑 SX23 が E 区 d17 と E 区 d23 に位置別に取り上げが行われている。また、蔵骨器 SX9 内の人骨は、器埋土の上部（①）・中下部（②）・最下部の 3 層準に区分して取り上げを行った。

以上、分析対象とする人骨試料の合計は、23 遺構 28 試料であり、詳細は結果と併せて第 9 ～ 14 表に示す。

(2) 方法

出土骨に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串・ブラシで静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。自然乾燥後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、年齢に関しては、胎児が出生前、乳児が 0 ～ 1 歳未満、幼児が 1 ～ 5 歳程度、小児が 6 ～ 15 歳程度、成人が 16 歳程度以上、成年が 16 ～ 20 歳程度、壮年が 20 ～ 39 歳程度、熟年が 40 ～ 59 歳程度、老年が 60 歳以上を示す。

(3) 結果

同定結果を第 9 ～ 14 表に示す。出土骨の状態から、全て火葬人骨と判断される。馬場ほか（1986）によると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされる。これに基づくと、今回出土した人骨は、いざれも 800℃以上で火葬され、収骨

された人骨と判断される。また、横崎（2007）によると、通常の遺体をそのまま火葬にした骨は横に曲がった亀裂が生じる、縱に不規則な亀裂が生じる、歪みや捻れが生じるが、再葬墓のように白骨化したものを受けた場合、ひび割れが生じるが歪みや捻れは生じないとされる。今回の出土骨の多くは破片となっているが、保存状態の良い骨をみると、歪みや捻れているものが認められる。このことから、今回調査を行った火葬人骨は全て通常の遺体をそのまま火葬にしたと推定される。

<蔵骨器 SX 3 ; 試料 1 >

頸頂骨、側頭骨、後頸骨、下頸骨、下顎大臼歯、歯牙、胸椎、椎骨、肩甲骨？、上腕骨、右尺骨、橈骨／尺骨、左手根骨（舟状骨）、大腿骨、脛骨？、足根骨（舟状骨）などが確認される。本人骨は、左右頭頂骨がみられ、矢状縫合の内側が閉じており、外側が閉じかけていることから、熟年後半以降と推定される。性別は不明である。

<蔵骨器（破碎）SX 4 ; 試料 2 >

大臼歯、歯牙、頭蓋骨、頸椎、胸椎、椎骨、肋骨、鎖骨、大腿骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから 1 個体と推定される。本人骨は、頭蓋骨の縫合で内側が閉じ、外側が開いている状態から、熟年程度と推定される。性別は不明である。

<火葬骨埋納土坑 SX 6 ; 試料 3 >

四肢骨、肋骨／四肢骨などが確認される程度である。数量的にも少ない。重複する部位が存在しないことから 1 個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

<火葬骨埋納土坑 SX 7 ; 試料 4 >

前頸骨、左側頭骨、後頸骨、下頸骨、頭蓋骨、第 1 頸椎？、頸椎、椎骨、肋骨、鎖骨？、右尺骨、橈骨／尺骨、左第 4 中手骨、大腿骨、距骨、中手骨／中足骨、中節骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから 1 個体と推定される。本人骨は、右尺骨が頸丈であることから男性の可能性がある。また、左第 1 大臼歯と右第 2 大臼歯部において歯槽が吸収していることから生前から歯牙が脱落していたとみられる。

<火葬骨埋納土坑 SX 8 ; 試料 5 >

下頸骨、頭蓋骨、四肢骨などが確認される。数量的にも少ない。年齢、性別ともに不明である。重複する部位が存在しないことから 1 個体と推定される。

第9表 骨同定結果(1)

番号	調査区	遺構名	性格	種類	部位	左	右	部分	数量		被焼	備考				
									左	右						
1	E区 e17 SX3	藏骨器	匕卜	頭頂骨	頭頂骨	左	右	破片	21	○						
								破片	21	○						
				側頭骨				塊体	11	○						
				後頭骨				破片	11	○						
				下顎骨				右	破片	2	○					
									破片	1	○					
				下顎大臼歯					破片	1	○					
				歯子					塊极	1	○					
				頭蓋骨					破片	24	○					
				胸椎					塊体	8	○					
				椎骨					塊体	1	○					
									破片	7	○					
				肩甲骨?					破片	1	○					
				上腕骨					塊极	1	○					
				尺骨			右	遠位端欠			1	○				
				橈骨/尺骨					破片	1	○					
				手根骨(舟状骨)	左				左近位存			1	○			
				大臘骨					破片	1	○					
				脛骨?					破片	1	○					
				足根骨(距骨)					破片	1	○					
				四肢骨					破片	17	○					
				筋骨/四肢骨					破片	24	○					
				中手骨/中足骨					遠位端	1	○					
				不明					破片	123.2g	○					
										6.6g						
2	E区 e17 SX4	藏骨器(破碎)	匕卜	大臼齒					破片	21	○					
				前臼齒					塊极	5	○					
				頭蓋骨					破片	12	○					
				頸椎					破片	1	○					
				胸椎					破片	1	○					
				椎骨					塊体	1	○					
									破片	1	○					
				肋骨					破片	2	○					
				鎖骨					破片	1	○					
				大臘骨					遠位端	1	○					
				四肢骨					破片	15	○					
				筋骨/四肢骨					破片	11	○					
				不明					破片	70.6g	○					
										1						
3	E区 d17 SX6	火葬骨埋納土坑	匕卜	土器片						1154.2g						
				残渣												
4	E区 d17 SX7 北半	火葬骨埋納土坑	匕卜	四肢骨					破片	21	○					
				筋骨/四肢骨					破片	21	○					
				不明					破片	6.8g	○					
										1.5g						
				頭蓋骨												
				前頭骨	左				破片	1	○					
				後頭骨					破片	1	○					
				下顎骨	右				12~M3	1	○		第2大臼齒吸收			
				頭蓋骨					破片	20	○					
				第1頸椎?					破片	1	○					
				椎骨					破片	1	○					
				肋骨					破片	3	○					
				尺骨	右				近位端	1	○					
				橈骨/尺骨					破片	1	○					
4	E区 d17 SX7 南半	火葬骨埋納土坑	匕卜	第4中手骨	左				近位端	1	○					
				大臘骨					破片	4	○					
				足根骨(距骨)					破片	1	○					
				四肢骨					破片	23	○					
				筋骨/四肢骨					破片	4	○					
				肋骨/四肢骨					遠位端	1	○					
				中手骨/中足骨					遠位端欠	1	○					
				中前骨					遠位端欠	1	○					
				不明					破片	140.8g	○					
										605.9g						
				残渣												
4	E区 d17 SX7 南半	火葬骨埋納土坑	匕卜	頭蓋骨					破片	23	○					
				側頭骨	左				破片	1	○					
				下顎骨	左				11~P2,M2~3	1	○		第1大臼齒吸收			
				頸椎						1	○					
				椎骨						6	○					
				肋骨						1	○					
				橈骨/尺骨						2	○					
凡例)I;切齒 C;犬齒 P;小臼齒 M;大臼齒				大臘骨						33	○					
				四肢骨						13	○					
				中前骨						1	○					
				不明						151.9g	○					
										1028.2g						
				残渣												

第10表 骨同定結果(2)

番号	調査区	遺構名	性格	種類	前位	左 右	部分	数量	被納	備考
5	E区 d17 SX8	火葬骨埋納土坑	七ト		下顎骨		破片	1	○	
					頭蓋骨		破片	4	○	
					四肢骨		破片	5	○	
					肋骨/四肢骨		破片	5	○	
					不明		破片	36.8g	○	
				残渣				807.0g		
6	E区 e18 SX9 ①	藏骨器	七ト		前頭骨		破片	1	○	
					側頭骨	左	破片	1	○	
					頸骨	左	破片	1	○	
					頭蓋骨	右	破片	1	○	
					四肢骨		破片	24	○	
					肩甲骨	右	破片	1	○	
					肩甲骨	左	剪峰	1	○	
					頸骨		破片	1	○	
					第1腰椎		破片	1	○	
					第2腰椎		破片	1	○	
					肋骨		破片	10	○	
					大腸骨		遠位端片	1	○	
					中足骨		兩端欠	1	○	
					上腕骨/大腸骨		近位端片	2	○	
					四肢骨		破片	25	○	
					肋骨/四肢骨		破片	12	○	
					中手骨/中足骨		破片	3	○	
					中節骨		破片	11	○	
					累積/中節骨		遠位端	1	○	
					不明		破片	95.7g	○	
				残渣				983.4g		
6	E区 e18 SX9 ②	藏骨器	七ト		頭頂骨	左	破片	1	○	
					側頭骨	左	破片	1	○	
					上顎骨	右	破片	1	○	
					下顎骨	左	破片	1	○	J-C開放
					下顎骨	右	破片	1	○	J-C開放
					歯牙		歯根	2	○	
					頭蓋骨		破片	51	○	
					椎骨		破片	1	○	
					肋骨		破片	6	○	
					大腸骨		破片	1	○	
					上腕骨/大腸骨		近位端片	1	○	
					四肢骨		破片	14	○	
					肋骨/四肢骨		破片	21	○	
					中手骨/中足骨		破片	2	○	
					不明		破片	119.8g	○	
					不明		細破片	28.5g	○	
				残渣				115.4g		
6	E区 e18 SX9 最下部	藏骨器	七ト		下顎骨	左	破片	1	○	
					下顎骨	右	破片	1	○	
					歯牙		歯根	2	○	
					頭蓋骨		破片	4	○	
					腰椎/仙骨		破片	1	○	
					大腸骨		近位端	1	○	
					四肢骨		破片	1	○	
					不明		破片	26.2g	○	
					不明		細破片	8.0g	○	
				残渣				40.6g		
7	E区 d17 SX10	火葬骨埋納土坑	七ト		腰椎		破片	1	○	骨壇頸有
					椎骨		椎体	3	○	
					椎骨/尺骨		破片	1	○	
					大腸骨		破片	2	○	
					四肢骨		破片	15	○	
					肋骨/四肢骨		破片	4	○	
					不明		破片	66.1g	○	
				残渣				606.5g		
8	E区 e17 SX11 北半	火葬骨埋納土坑	七ト		頭蓋骨		細体	1	○	
					歯牙		歯冠	1	○	
					頭蓋骨		破片	42	○	
					椎骨		破片	1	○	
					上腕骨		破片	1	○	
					四肢骨		破片	26	○	
					肋骨/四肢骨		破片	56	○	
					不明		破片	45.2g	○	
				残渣				830.4g		
9	E区 e17 SX12 北半	火葬骨埋納土坑	七ト		肋骨		破片	2	○	
					肋骨/四肢骨		破片	4	○	

凡例):切面 C; 天面 P; 小臼面 M; 大臼面

第11表 骨同定結果(3)

番号	測定区	遺構名	性格	種類	部位	左	右	部分	数量	被焼	備考
9	E区 e17	SX12 北半	火葬骨埋納土坑	匕卜	不明			破片	11.2g	○	
				残渣					321.2g		
10	E区 e17	SX13	火葬骨埋納土坑	匕卜	側頭骨 頭蓋骨	左		難体	11	○	
								破片	22	○	
								破片	17	○	
					肋骨			破片	1	○	
					第1肋骨?			破片	1	○	
					碑骨/尺骨			破片	2	○	
					大腸骨			破片	2	○	
					中足骨?			達位端	1	○	
					四肢骨			破片	73	○	
					肋骨/四肢骨			破片	5	○	
					中手骨/中足骨			達位端	1	○	
					不明			破片	175.0g	○	
				残渣					2177.7g		
11	E区 d17	SX14	火葬骨埋納土坑	匕卜	上顎骨 四肢骨 不明	左		破片	1	○	
								破片	1	○	
								破片	3.5g	○	
				残渣					1.2g		
13	E区 d17	SX16	火葬骨埋納土坑	匕卜	前頭骨 側頭骨 頸骨 上顎骨 下顎骨 四肢骨 肋骨/四肢骨 基部/中節骨 指蹠骨 不明	右		眼窩上 破片	1	○	
						左		破片	1	○	
					頸骨	右		破片	1	○	
					上顎骨	左		破片	1	○	
					下顎骨	左		間筋突起	1	○	
								破片	2	○	
					四肢骨			破片	68	○	
					前甲骨	左		鳥口突起	1	○	
						左		破片	1	○	
					第2顎椎?				1	○	
					椎骨			椎突起?	1	○	
					肋骨			破片	9	○	
					大腸骨			達位端	1	○	
								破片	1	○	
					四肢骨			破片	12	○	
					肋骨/四肢骨			破片	2	○	
					基部/中節骨			近位端欠	2	○	
					指蹠骨			同端欠	1	○	
								破片	1	○	
					不明			破片	112.3g	○	
				残渣					431.5g		
13	E区 d17	SX16	火葬骨埋納土坑	匕卜	下顎骨 齒牙 不明	右		破片	1	○	
								破片	3	○	
					齒牙			破片	2	○	
					不明			破片	0.7g	○	
									2.1g		
14	E区 d17	SX17	火葬骨埋納土坑	匕卜	四肢骨			破片	1	○	
					残渣				0.5g		
15	E区 d17	SX18	火葬骨埋納土坑	匕卜	側頭骨 下顎骨 頭蓋骨 第1頸椎 胸椎 椎骨 肋骨 仙骨? 前甲骨 上腕骨 尺骨 掌骨 大腸骨 膝蓋骨? 脛骨 足根骨(距骨) 足根骨(舟状骨?) 第1跖骨 中足骨 趾骨(基節骨) 中手骨/中足骨 基節/中節骨	右		破片	1	○	
								難体	2	○	
						左		間筋突起	1	○	
					頭蓋骨	右		破片	1	○	連心側面骨吸収
								破片	38	○	
					第1頸椎			破片	44	○	
					胸椎			難体	1	○	
					椎骨			破片	4	○	
								難体	24	○	骨增殖有
								破片	3	○	
					肋骨			破片	2	○	
					仙骨?			破片	1	○	
					前甲骨	右		破片	1	○	
					上腕骨	左		達位端	1	○	
					尺骨	左		近位端片	1	○	
					掌骨			破片	4	○	
					大腸骨			近位端	5	○	
					膝蓋骨?			破片	1	○	
					脣骨			破片	1	○	
					足根骨(距骨)	左		破片	1	○	
					足根骨(舟狀骨?)			破片	1	○	
					第1跖骨			達位端	1	○	
					中足骨			近位端片	1	○	
								破片	1	○	
					趾骨(基節骨)			近位端欠	1	○	
					中手骨/中足骨			遠位端片	1	○	
					基節/中節骨			近位端欠	1	○	

凡例)1;切歯 C;犬歯 P;小臼歯 M;大臼歯

第12表 骨同定結果(4)

凡例) I: 切歯 C: 犬歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯

第13表 骨同定結果(5)

番号	測定区	測定名	性格	種類	部位	左	右	部分	数量	被納	備考
19	E区 d17	SX21	火葬骨埋納土坑	匕卜	下顎骨			下頸枝	1	○	
					左	左		破片	1	○	
					右	右		破片	1	○	
								破片	1	○	
					上顎大臼齒			齒根	1	○	
					下顎大臼齒			齒冠	1	○	
					大臼齒			齒根	3	○	
					側牙			齒根	13	○	
					頭蓋骨			破片	57	○	
					第1頸椎			破片	3	○	
					第2頸椎			破片	1	○	
					頸椎			椎体	5	○	
					胸椎			椎体	6	○	
					椎骨			椎体	8	○	
								破片	7	○	
					仙骨			破片	2	○	
					尾骨			椎体	1	○	
					肋骨			破片	47	○	
					肩甲骨	左	右	破片	1	○	
								剪峰	1	○	
					上腕骨	左	左	遠位端	1	○	
								遠位端	3	○	
								破片	1	○	
					橈骨	左		破片	11	○	
								近位端	11	○	
					尺骨	左		近位端	1	○	
								破片	1	○	
					橈骨/尺骨			破片	1	○	
					観音骨	左		破片	1	○	
								破片	2	○	
					観音骨?			破片	5	○	
					大腸骨			近位端	1	○	
								遠位端	2	○	
								破片	6	○	
					脛骨?			破片	1	○	
					腓骨			破片	2	○	
					足根骨(距骨)			破片	1	○	
					距骨(基節骨)			近位端	1	○	
					大腸骨/脛骨			破片	1	○	
					四肢骨			破片	71	○	
					四肢骨/四肢骨			破片	59	○	
					基節骨			向端欠	1	○	
					基節/中節骨			近位端	4	○	
								破片	1	○	
					不明			破片	485.4g	○	
									4470.4g		
					残渣						
20	E区 d17	SX23	火葬骨埋納土坑	匕卜	頭頂骨			破片	5	○	
					後頭骨			剝台	1	○	
					頸骨			破片	1	○	
					上顎骨			破片	1	○	
					下顎第1小臼齒	左		齒冠	1	○	
					下顎第1大臼齒	左		齒冠	1	○	
					下顎大臼齒			齒根	1	○	
					側牙			齒冠	3	○	
					頭蓋骨			齒根	1	○	
								破片	27	○	
					第2頸椎			破片	1	○	
					肋骨			破片	7	○	
					橈骨/尺骨			破片	1	○	
					第1中足骨			向端欠	1	○	
					四肢骨			破片	20	○	
					四肢骨/四肢骨			破片	12	○	
					中手骨/中足骨			破片	3	○	
					基節/中節骨			向端欠	1	○	
								破片	1	○	
					不明			破片	65.7g	○	
									1661.7g		
					残渣						
20	E区 d23	SX23	火葬骨埋納土坑	匕卜	側頭骨	右		破片	1	○	
					下顎骨	左	右	左第2切齒-右第2切齒部	1	○	
						右		齒突起	2	○	
					下顎大臼齒			齒根	1	○	
					側牙			齒冠	4	○	
					頭蓋骨			齒根	6	○	
					幼骨			破片	29	○	
								破片	41	○	

凡例)I:切齒 C:犬齒 P:小臼齒 M:大臼齒

第14表 骨同定結果(6)

番号	開発段(遺構名)	性格	種類	部位	左/右	部分	数量	縮刷	備考
20	E区 d23 SX23	火葬骨埋納土坑	匕卜	上腕骨		破片	1	○	
				頸骨/尺骨		破片	1	○	
				上腕骨/大腸骨		近位端	1	○	
				四肢骨		破片	12	○	
				肋骨/四肢骨		破片	24	○	
				中手骨/中足骨		両端欠	1	○	
				基節骨		近位端欠	1	○	
				中節骨		遠位端欠	1	○	
				末節骨		遠位端欠	1	○	
				指蹠骨		両端欠	3	○	
				不明		破片	86.3g	○	
			残渣				1181.9g		
21	E区 d17 SX24	火葬骨埋納土坑	匕卜	骨干		肅模	2	○	
				頭蓋骨		破片	25	○	
				第2腰椎		椎突起	1	○	
				椎骨		椎体	1	○	
				肋骨		破片	11	○	
				上腕骨		近位端	1	○	
				膝蓋骨	左	111#完存	1	○	未化骨脊
				胫骨		近位端	1	○	骨端未化骨外れ
				四肢骨		骨端部	4	○	骨端未化骨外れ
				肋骨/四肢骨		破片	15	○	
				指蹠骨		破片	12	○	
				不明		遠位端欠	1	○	近位端未化骨外れ
			残渣			破片	92.4g	○	
							753.7g		
22	E区 e17 SX25	火葬骨埋納土坑	匕卜	頭頂骨	右	破片	1	○	
				側頭骨	右	破片	1	○	
						椎体	1	○	
				上顎大臼歯	左	111#完存	1	○	
				上顎第1大臼歯	左	破損	1	○	
				上顎第1大臼歯	右	破損	1	○	
				上顎第1大臼歯	右	破損	1	○	
				上顎第2大臼歯	右	111#完存	1	○	
				頭蓋骨		破片	35	○	
				不明		破片	3.8g	○	
			残渣				172.9g		
23	E区 e18 SX26	人骨埋納土坑	匕卜	後頭骨		破片	1	○	
				側頭～後頭骨		破片	1	○	ラムダ小骨有
				頸骨	右	破片	1	○	
				上顎大臼歯	左	破損	1	○	
				下顎骨	左	破片	1	○	
					右	破片	1*	○	
				下顎大臼歯		破片	1	○	
				骨干		肅模	14	○	
				頭蓋骨		破片	57	○	
				頸椎		椎体	4	○	
				胸椎		破損	1	○	
						椎体	3	○	
				腰椎		破片	2	○	
				腰椎		椎体	2	○	
				椎骨		椎体	3	○	
				肩甲骨	右	破片	7	○	
					右	刺繩	1	○	
				肋骨		破片	27	○	
				鎖骨	右	破片	1	○	
				肩甲骨	右	刺繩	1	○	
						闊筋屬	1	○	
				四肢骨		破片	2	○	
				上腕骨		遠位端片	1	○	
				頸骨/尺骨		破片	1	○	
				寢骨		耳状面破片	1	○	
				大腸骨		破片	2	○	
				四肢骨		破片	32	○	
				肋骨/四肢骨		破片	18	○	
				不明		破片	228.3g	○	
			残渣				969.5g		
28	1号墳北廓	墓壙(棺内)	匕卜	頭蓋骨?		破片	3		
				不明		破片	3.8g		
				不明		破片	1*		
			残渣				489.8g		

凡例)1;切妻 C;大妻 P;小臼齒 M;大臼齒

< 藏骨器 SX9 ; 試料 6 >

前頭骨、左頭頂骨、左右側頭骨、左右頸骨、左右上顎骨、下顎骨、歯牙、頭蓋骨、左肩甲骨、右鎖骨、第1頸椎、第2頸椎、腰椎／仙骨、椎骨、肋骨、大腿骨、右膝蓋骨、中足骨、中節骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。上顎骨は左右ともに中切歯一大歯部は開放している。本人骨は、左頭頂骨をみると、内側が閉じており、外側が開いていることから、熟年程度と推定される。性別は不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX10 ; 試料 7 >

腰椎、椎骨、橈骨／尺骨、大腿骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。腰椎において加齢に伴うとみられる骨増殖が認められることから老齢に達していた可能性がある。性別は不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX11 北 ; 試料 8 >

側頭骨、歯牙、頭蓋骨、椎骨、上腕骨、四肢骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。頭蓋骨において内側が閉じており、外側が開いていることから、熟年程度と考えられる。性別不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX12 北 ; 試料 9 >

肋骨などが確認される。数量的に少ない。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX13 ; 試料 10 >

左側頭骨、頭蓋骨、肋骨、第1肋骨？、橈骨／尺骨、中手骨／中足骨、大腿骨、中足骨？、四肢骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。頭蓋骨縫合で内側が閉じている状態が確認されることから、熟年以降とみられる。性別不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX14 ; 試料 11 >

左下顎骨、四肢骨などが確認される。数量的にも少ない。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX16 ; 試料 13 >

前頭骨、左側頭骨、右頸骨、左右上顎骨、下顎骨、頭蓋骨、左肩甲骨、第2頸椎？、椎骨、肋骨、大腿骨、基節／中節骨などが確認される。重複する部位

が存在しないことから1個体と推定される。本人骨は、頭蓋縫合において内側閉じており、外側が閉じてないことから、熟年程度と推定される。性別は、眉上隆起および乳様突起が発達しないことから女性と判断される。

< 火葬骨埋納土坑 SX17 ; 試料 14 >

四肢骨などが確認される。数量的にも少ない。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX18 ; 試料 15 >

右側頭骨、下顎骨、頭蓋骨、第1頸椎、胸椎、椎骨、肋骨、仙骨？、右肩甲骨、左上腕骨、左尺骨、寛骨、大腿骨、膝蓋骨？、脛骨、足根骨（左距骨）、足根骨（舟状骨？）、第1中足骨、中足骨、趾骨（基節骨）などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。下顎骨右側は、遠心側の歯槽が吸収する。椎体に加齢に伴う骨増殖が認められることから、老齢に達していた可能性がある。性別は不明である。

< 藏骨器（散乱）SZ1 上 ; 試料 16 >

肋骨、大腿骨、腓骨？、四肢骨などが確認される。数量的にも少ない。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX19 ; 試料 17 >

頸頂骨、左右側頭骨、下顎骨、頭蓋骨、頸椎、胸椎、腰椎、椎骨、肋骨、左鎖骨、右肩甲骨、上腕骨、手根骨（左大菱形骨、右舟状骨、豆状骨）、左右寛骨、大腿骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。本人骨は、冠状縫合の内側が閉じておらず、また上腕骨近位端が未化骨で外れていることから、小児後半～成年程度の可能性がある。性別は不明である。

< 火葬骨埋納土坑 SX20 ; 試料 18 >

頭蓋骨、第1頸椎、第2頸椎、肋骨、上腕骨、寛骨？、大腿骨？、足根骨（舟状骨）、足根骨？、趾骨（第1基節骨）などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。上腕骨近位端が未化骨で外れた骨端であり、四肢骨にも未化骨端部がみられ、さらに趾骨（第1基節骨）の近位端部が未化骨で外れている。諏訪（1967）によると、指骨近位端の化骨化する時期は、男性で16～17歳程度、女

性で13年6ヶ月～14歳程度とされている。これより、本人骨は、16～17歳以下と判断され、小児程度と推定される。性別は不明である。

＜火葬骨埋納土坑 SX21；試料 19＞

前頭骨？、左右頭頂骨、左右側頭骨、後頸骨、右頸骨、左右上頸骨、下頸骨、上頸大臼歯、下頸大臼歯、歯牙、頸蓋骨、第1頸椎、第2頸椎、頸椎、胸椎、椎骨、仙骨、尾骨、肋骨、左右肩甲骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、橈骨／尺骨、左寛骨、大腿骨、脛骨？、腓骨、足根骨（距骨）、趾骨（基節骨）などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。本人骨は、矢状縫合の外側が一部閉じていることから、熟年後半以降と推定される。性別は、右側頭骨の乳様突起が発達することから男性と判断される。

＜火葬骨埋納土坑 SX23；試料 20＞

頭頂骨、右側頭骨、後頸骨、頸骨、上頸骨、下頸骨、左下頸第1小白歯、左下頸第1大臼歯、下頸大臼歯、歯牙、頸蓋骨、第2頸椎、肋骨、上腕骨、橈骨／尺骨、第1中足骨、中手骨／中足骨、基節骨、中節骨、末節骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。本人骨は、頸頂骨にみられる縫合において内側が閉じており、外側が閉じてないことから熟年程度と推定される。性別は不明である。

＜火葬骨埋納土坑 SX24；試料 21＞

歯牙、頸蓋骨、第2頸椎、椎骨、肋骨、上腕骨、左膝蓋骨、脛骨、指趾骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。頸蓋骨は骨厚が薄く、縫合の内側も閉じていない。また上腕骨近位骨端、脛骨近位端など未化骨であり、しかも指趾骨の近位端が未化骨で外れている。これより、本人骨は、16～17歳以下と判断され、小児程度と推定される。性別は不明である。

＜火葬骨埋納土坑 SX25；試料 22＞

右頭頂骨、右側頭骨、左上頸大臼歯、左上頸第1大臼歯、右上頸第1小白歯、右上頸第1大臼歯、右上頸第2大臼歯、頸蓋骨などが確認される。四肢骨などはみられない。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。永久歯が萌出していることから成人に達していたとみられる。性別は不明である。

＜人骨埋納土坑 SX26；試料 23＞

後頸骨、側頭一後頸骨、右頸骨、左上頸大臼歯、下頸骨、下頸大臼歯、歯牙、頸蓋骨、頸椎、胸椎、腰椎、椎骨、肋骨、右鎖骨、右肩甲骨、上腕骨、橈骨／尺骨、寛骨、大腿骨、四肢骨などが確認される。重複する部位が存在しないことから1個体と推定される。大きさからみて成人に達していたと考えられるが、詳細不明である。また性別も不明である。

＜墓壙（棺内）1号墳埋葬施設 1；試料 28＞

頸蓋骨？などが確認される。数量的にも少ない。1個体と推定される。年齢、性別ともに不明である。

(4) 考察

今回調査した13世紀末頃の出土人骨の遭構別・部位別数量一覧を第16表に示す。各遭構から出土した部位をみると、重複した部位が存在しないことから、いずれも個体数は1個体と判断される。また、骨は被熱を受けており、歪みや捻れが生じているものも認められることから、白骨化させたものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。出土部位をみると、頸蓋の蝶形骨・篠骨・鼻骨・口蓋骨・淚骨・下鼻甲介・鶲骨・舌骨は全く確認されておらず、体幹の尾骨・胸骨、上肢の手根骨・中手骨・指骨、下肢の寛骨・膝蓋骨・脛骨・中足骨・趾骨などは少ないことがうかがえる。これらの部位は、微小な骨、あるいは骨の緻密質が薄く壊れやすい部位などであり、火葬時に消失している可能性がある。また、骨の緻密質が厚い四肢骨も長さを保つものが少ないとから、火葬時の被熱により、骨自体が収縮・硬化・変形し、ひび割れることで骨自体が脆くなり、火葬時・収骨時・埋没後の経年変化の過程で破片になった可能性がある。

このように各遭構から出土した人骨は、保存されやすい部位が主体をなしており、偏った組成になっている可能性がある。しかしながら、火葬骨埋納土坑の SX3・SX4・SX7・SX16・SX11・SX13・SX16・SX18・SX19・SX20・SX21・SX23・SX24・SX26、藏骨器の SX5・SX9では、量や産出部位の多少の違いはあるものの、頸蓋、体幹、上肢、下肢の各部位の骨が確認されており、出土部位が全身に及んでいる傾向がうかがえる。これに対して火葬骨埋納土坑の SX6・SX8・SX10・SX12・SX14・SX17・SX25、藏骨器の SZ1では限られた部位、あるいは出土骨自体が少ない。特

第15表 中世出土骨の遺構別・部位別数量(1)

上部著 C. 大葉 托小葉著 M. 大葉著 p.m. 葉緣端 S. 邊緣帶

第16表 中世出土骨の遺構別・部位別数量(2)

1.很瘦 C. 太瘦 F. 小巨漢

に SX25 は頭蓋に限って出土している。このような各遺構における出土部位の違いは、後世の搅乱の影響を受けていないとすれば、収骨時の状況を反映していると考えられる。すなわち、出土部位が全身に及ぶ遺構は、それ以外のものに比較して、丁寧に集めて収骨していることになる。ただし、出土部位が全身に及ぶものでも、出土量に違いがあり。これらも収骨による影響の可能性もある。また、上記したように埋没後の経年変化の過程の影響も関連している可能性があり、この点については、遺構充填堆積物の堆積構造などを踏まえた、人骨のタフォノミー評価が今後必要である。

また、火葬骨埋納土坑のうち、SX7・SX23 は平面的に数カ所から骨が取り上げられているが、量の多少があるものの、取り上げ箇所の違いで出土部位に大きな偏りは認められない。また、SX9 の蔵骨器内の骨も上部・中下部・最下部層準で骨の部位に大きな違いが認められない。これらのことは、一括して集められて収骨されていることを示している可能性がある。出土人骨の年齢を推定する部位としては、歯牙の萌出状況、骨の成長程度、頭蓋縫合の癒合状況、寛骨の耳状面と恥骨結合部の形状などで推定する。今回の場合、火葬骨のため、歯牙の放出状況、寛骨から年齢を推定することが困難なものが多く、主に骨の成長程度と頭蓋縫合の癒合状況から年齢を推定した。推定される年齢構成をみると、23 個体の内、小児程度が 2 体、小児後半一年成程度が 1 体、成人が 2 体、老年程度が 5 体、老年後半以降が 2 体、老年以降が 1 体、老齢の可能性がある個体 2 体、不明が 8 体であった。老年以降が 10 体と半数近くを占めている。高齢者が多いのは当然であるが、小児程度もみとめられ、体力的に劣る若齢者と高齢者が埋葬されている。

性別推定は、先述したように土葬人骨の場合は頭蓋・寛骨・骨格筋付着部の発達程度・骨の大きさなどから推定するが、火葬骨の場合、頭蓋骨片・下頸骨骨頭・上腕骨骨頭・大腿骨骨頭等に有効部位が限られてくる。今回の火葬骨は、性別推定に有効な部位が破損しているものが多く、性別を特定できる個体が少なかった。そのため、性別が推定できた個体は、火葬骨埋納遺構 SX7・SX16・SX21 の 3 体であり、残り 20 体については残念ながら性別を推定することが

できなかった。性別が推定された SX7 の個体は右尺骨の頑丈さから男性の可能性、SX16 の個体は眉上隆起および乳様突起があり発達したことから女性、SX21 は右側頸骨乳様突起が発達することから男性と判断される。

b 中世墓関連燃料材の樹種について

今回の調査区では、火葬骨埋納土坑 SX1、焼土坑（茶毬跡）SF15・27、落ち込み SZ28 などから炭化材が出土している。これら炭化材は火葬時の燃料材として利用されたもので、樹種同定を行うことで、火葬時の木材利用に関する情報を得る。

(1) 試料

試料は、火葬骨埋納土坑 SX01 の炭化材（試料 7）、焼土坑 SF15 の炭化材（試料 12）、焼土坑 SF27 の炭化材（試料 24）、落ち込み SZ28 の炭化材（試料 25）から出土した炭化材である。このうち、試料 12 には、炭サンブル、北面、南面、西の 4 試料がある。いずれも多数の破片があり、試料 7 からは 5 点、試料 12 の炭サンブルから 9 点、北面から 5 点、南面から 5 点、西から 3 点、試料 24 からは 8 点、試料 25 からは 3 点の、計 38 点を選択し樹種同定を行う。各試料の詳細は結果と併せて表に示す。

(2) 方法

炭化材試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・板目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

結果を第 17 表に示す。炭化材は、針葉樹 1 分類群（マツ属複雑管束亞属）、広葉樹 4 分類群（クリ、キハダ、シャシャンボ、カキノキ属）とマダケ属、イネ科タケ亜科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。
・マツ属複雑管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮

第17表 炭化材同定結果

番号	地区	遺構	性格	試料名	点数	形状	樹種(点数)
7	E区	SX10	火葬骨埋納土坑		5	破片	キハダ(3) カキノキ属(2)
12	E区	SF15	焼土坑(茶毬跡)	炭サンプル	9	破片	クリ(5) カキノキ属(3) 丸木状(直径5mm) イネ科タケ亞科(1)
				北面	5	破片	クリ(3) 板状
				南面	5	破片	マダケ属(2)
				西	3	破片	キハダ(5) カキノキ属(3)
24	E[Ke20]	SF27	焼土坑(茶毬跡)		8	芯持丸木状(直径2cm) 芯持丸木状(直径6mm) 破片	マツ属複維管束亜属(3) マツ属複維管束亜属(1) マツ属複維管束亜属(4)
25	E区	SZ28	落ち込み		3	丸木状(直径6mm) 破片	マツ属複維管束亜属(1) マツ属複維管束亜属(1) シャシャンボ

道管の早材部から晚材部への移行は急一や緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科
キハダ属

環孔材で、孔圈部は3-5列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5 細胞幅、1-40 細胞高。

・シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界に均一に散在し、道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8 細胞高前後のものと5-7 細胞幅、30-60 細胞高のものがある。

・カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では梢円形、単独または2-4個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、10-20 細胞高で階層状に配列する。

・イネ科タケ亞科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中央柱をなす。

いわゆるタケ・ササ類である。組織構造から種類を細分することは困難であるが、SF15 北面の試料は、外観や節の形状から、稈鞘が伸長と共に節から脱落するタケ類であり、節が二重になる特徴からマダケ属に同定される。

(4) 考察

茶毬跡と考えられる焼土坑 SF15 と SF27 の出土炭化材の形状や樹種構成は、遺構間で異なっていた。焼土坑 SF15 の炭化材は、直径 5mm の丸木状の炭化材も 1 点認められるが、ほとんどが破片からなる。樹種構成は、クリ、カキノキ属、キハダ、マダケ属を含むタケ亞科と複数の種類からなる。一方、SF27 の炭化材は、破片と共に直径 2cm と直径 6mm の芯持丸木状を呈す

るもの認められ、全てマツ属複維管束亜属に同定された。芯持丸木の大きさから枝材などを利用されていることがうかがえる。各遭構の炭化材は、いずれも火葬時の燃料材として利用されたものと推定されることから、焼土坑 SF15 と SF27 では、木材利用状況が異なっていたことがうかがえる。

一方、火葬骨埋納土坑である SX10 から出土した炭化材は、いずれも破片からなるが、キハダとカキノキ属が認められる。火葬骨埋納時に取り込まれた炭化材の可能性があり、そうだとすると、上記の茶毬跡である焼土坑 SF15 の組成と類似しているといえる。落ち込み SZ28 の炭化材は、直径 6 mm の丸木状や破片で構成される。丸木状の炭化材は複維管束亜属、破片は複維管束亜属とシャシャンボであった。シャシャンボは暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、周囲の山地に生育していた可能性がある。

なお、同定された樹種の生態性・材質などみると、クリは二次林や山林に普通に見られる他、栽培されることもある落葉高木で、木材は重硬で強度が高い材質を有する。カキノキ属には、落葉性のリュウキュウマメガキや常緑性のトキワガキが自生する他、渡来した栽培種である落葉性のカキノキやマメガキが含まれる。これらの樹種の木材は重硬で強度が高い材質を有する。キハダは、河畔林等を構成する落葉高木で、木材は軽軟な部類に入る。マツ属複維管束亜属は二次林構成種として人里周辺に普通に見られる樹木である。木材は軽軟であるが、保存性と強度は高い材質を有する。なお、木材の発熱量は、ほぼ木材の元素組成によって決まり、一般に針葉樹が広葉樹より、また樹皮が材部よりやや高いとされる（筒本, 1982）。一方、経験的には、比重が軽い（密度が低い）木材の方が、比重が重い（密度が高い）木材より着火しやすい。出土樹種の気乾比重は、マツ属複維管束亜属のアカマツが 0.42–0.62、カキノキ属が 0.59–0.84、クリが 0.44–0.78、キハダが 0.38–0.57、マダケ属マダケが 0.56–0.90 である。

中世の火葬に伴う燃料材については、三重県内では報告例が知られていないが、長谷町遺跡において古代の火葬に伴う燃料材の可能性がある炭化材の樹種同定が実施されている。その結果をみると、アカガシ亜属、スダジイ、シャシャンボ、イヌガヤが確

認されている。

他府県では、群馬県で多くの火葬墓でクリを主体とした結果が見られ、他にタケ、ウツギ、ケヤキ、エノキ、カキノキが確認されている（橋崎, 2007）。静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群では、ヒノキ、マツ属複維管束亜属、アカガシ亜属、シイノキ属、コナラ亜属、クリ、ケヤキなど針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹の利用が確認されている（松谷, 1993）。このように火葬に利用されている木材は、地域によって違いが認められるが、今回の結果も含め、いずれも遺跡周辺で入手しやすい木材が利用されている傾向がうかがえる。ただし、カキノキ属の火葬利用について、橋崎（2007）は、カキノキの小枝を火葬の薪に使つたため、普段はカキノキの小枝を燃やすのを嫌つた」とする民俗事例（須藤, 1988）を紹介し、樹木の忌避について指摘している。火葬墓におけるカキノキ属の出土例に着目すると、横森赤台（東下）遺跡（山梨県旧高根町）の中世の火葬墓・火葬跡からの出土例や、田間東道北遺跡（栃木県小山市）の室町時代とされる火葬墓などでも認確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994; 植田, 2000）。中世のカキノキ属の出土時例をみると、今回の結果も含め、多くが火葬墓に集中しており、カキノキ属の木材利用を考える上で興味深い結果となっている。

c 火葬墓周辺で確認された灰状堆積物の分析

中世墓周辺では、人体火葬灰の可能性がある灰層状の堆積物が確認されている。ここでは、この灰層状堆積物が火葬灰に由来するか否かの可能性を検証することを目的として、灰像分析・リン・カルシウム分析を実施する。灰像分析では、イネ科植物などの燃焼灰に特徴的に観察される珪化組織片などの有無について確認する。また、リン・カルシウム・腐食含量分析では、灰層状堆積物と焼土坑（茶毬跡）、火葬骨埋納遭構埋土、藏骨器堆積物などにおける、人骨の主成分をなすリン・カルシウム含量を調査する。これらの結果を複合的に捉えることで、灰層状堆積物の由来について検討する。

(1) 試料

堆積物試料は、E 区 C17 地点の中世墓周辺の灰層状堆積物（試料 26）、藏骨器 SX09 最下部堆積物（試料 6）、火葬骨埋納土坑 SX10（試料 7）および火葬骨埋納土坑

SX13(試料10)の骨包含土壌、焼土坑SF15(試料12)の下層下サンプル(灰)の計5点である。灰像分析は灰層堆積物(試料26)、リン・カルシウム分析は全試料について実施する。

なお、SX09最下部堆積物には多量の骨片が、SX10およびSX13骨包含土壌には微細骨片および炭化材が混じる。灰状物質が検出されたSF15下層下サンプル(灰)は、肉眼では炭化材および焼土(礫)は認められるが明瞭な灰状物質は確認できない。一方、E区C17地点灰層堆積物も肉眼観察では粗大有機物および微細白色粒が多量に混じるが、灰状物質は確認されなかつた。

(2) 分析方法

【灰像分析】

灰層堆積物試料では、上記したようにイネ科植物の可能性がある灰は明瞭に認められないことから、以下の方法で珪化組織片の濃集と抽出を試みる。

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ボリヤングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレベラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。結果は、検出された分類群の一覧表で示す。

【リン・カルシウム分析・腐食含量分析】

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法、腐植含量はチューリン法(土壤標準分析・測定法委員会、1986)でそれぞれ行う。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの筒でふるい分けをする。この筒通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm筒を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105°C

で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

リン酸、カルシウム含量は、粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加热分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加热減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

腐植含量は、粉碎土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加热減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(0rg-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

(3) 分析結果

【灰像分析】

結果を第18表に示す。E区C17丘陵頂部中世墓周辺の灰層堆積物(試料26)からは、珪化組織片が全く検出されなかつた。単体の植物珪酸体がわずかに認められ、それらは栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体であった。

【リン・カルシウム分析】

分析結果を第19表に示す。多量の骨片が認められ

第18表 灰像分析結果

種類	E区C17 中世墓周辺土壤 灰層堆積物
珪化組織片	26
植物珪酸体	—
イネ属短細胞珪酸体	+
イネ属機動細胞珪酸体	+
想定される分類群	イネ属 (葉部)

1)-:非検出, +:検出。

第19表 土壤理化分析結果

番号	遺構名	試料	性格	土性	土色	腐植含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)
6	SX09	藏骨器最下部堆積物	藏骨器	HC	2.5Y5/6 黄褐	1.09	129.42	185.17
7	SX10	骨包含土壤	火葬骨埋納土坑	SL	5Y2/1 黒	2.78	21.45	20.61
10	SX13	骨包含土壤	火葬骨埋納土坑	SL	10YR5/4にぶい黄褐	1.36	12.30	14.62
12	SF15	下層下サンブル(灰)	焼土坑(茶毬跡)	SL	10YR4/3にぶい黄褐	0.98	0.11	0.06
26	表土	灰層状堆積物	E区C17中世墓周辺	L	10YR2/1 黒	8.41	0.37	0.41

1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

2)土性:土壤調査ハンドブック(プロジェクト懇談会編,1984)の野外土性による。

L…壤土(粘土0~15%, シルト20~45%, 砂40~65%)

SL…砂壤土(粘土0~15%, シルト0~35%, 砂65~85%)

HC…重壤土(粘土45~100%, シルト0~55%, 砂0~55%)

た藏骨器 SX09 (試料 6) ではリン酸 129.42P₂O₅mg/g、カルシウム 185.17CaOmg/g と、高い濃度で検出され、微細骨片が混じる火葬骨埋納土坑の SX10 (試料 7) にもリン酸 21.45P₂O₅mg/g、カルシウム 20.61CaOmg/g、さらに火葬骨埋納土坑 SX13 (試料 10) にもリン酸 12.30P₂O₅mg/g、カルシウム 14.62CaOmg/g と、リン酸とカルシウムが高い濃度で含まれる。

一方、灰状物質が検出された遺構では、茶毬跡である焼土坑 SF15 (試料 12) でリン酸 0.11P₂O₅mg/g、カルシウム 0.06CaOmg/g、丘陵頂部の灰層状堆積物 (試料 26) でリン酸 0.37P₂O₅mg/g、カルシウム 0.41CaOmg/g であり、リン酸、カルシウムとも極めて少ない。

(4) 考察

灰層状堆積物 (試料 26) からは、珪化組織片が検出されなかつたことから、イネ科植物の灰が混入している可能性は低いと判断される。ただし、栽培植物のイネ属がわざかに認められており、中世墓周辺にイネ属の葉部が持ち込まれていたことが考えられる。イネ属の植物体は古くから燃料材のひとつとして利用される場合が多く、ここでも何らかの目的でイネ属の葉部が利用されていた可能性もある。次にリン酸・カルシウムの含量から検討する。

リン酸は特に骨に多量に含まれ、土壤中では比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体・骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。なお、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが (Bowen, 1983; Bolt·Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、こ

れらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0P₂O₅mg/g 程度である。また、人為的な影響 (化学肥料の施用など) を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5P₂O₅mg/g (川崎ほか, 1991) という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では 6.0P₂O₅mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムもリン酸とともに骨の主成分であるため、その濃集状況が遺体埋葬の指標となりうるが、カルシウムの天然賦存量は普通 1~50CaOmg/g (藤賀, 1979) と言われ、含量幅がリン酸よりも大きい。そのため絶対量による評価は難しいが、骨片が残存するような状況においてはリン酸に追従した含量の変化が見られるため、遺体痕跡を検証する上で補助となる。

今回の中世墓周辺の灰層状堆積物では、リン酸 0.37P₂O₅mg/g、カルシウム 0.41CaOmg/g と、リン酸、カルシウムとも極めて少ない。また、比較試料とした焼土坑 (茶毬跡) SF15 でもリン酸 0.11P₂O₅mg/g、カルシウム 0.06CaOmg/g、を示した。両者を比較すると、灰層状堆積物ではリン酸とカルシウムが僅かに多いものの、腐植含量にして 8.41% にあたる粗大有機物によるところが大きく、骨粉によるものではない可能性もある。また、焼土坑以外の比較試料では、多量の骨が収骨されていた藏骨器 SX09 でリン酸 129.42P₂O₅mg/g、カルシウム 185.17CaOmg/g と天然賦存量を遥かに上回る量のリン酸とカルシウムが検出された。微細骨片が混じる火葬骨埋納土坑 SX10 でもリン酸 21.45P₂O₅mg/g、カルシウム 20.61CaOmg/g、SX13 でもリン酸 12.30P₂O₅mg/g、カルシウム 14.62CaOmg/g と、リン酸とカルシウムが高い濃度で

含まれていた。これら骨片や骨粉が含まれている試料ではリン酸・カルシウムの値が高くなる。なお、藏骨器 SX09 と比較して火葬骨埋納土坑 SX10・SX13 では、検出されたリン酸に対するカルシウムの比率が低い傾向がある。リン酸が土壤に固定されて移動しにくい成分であるのに対し、カルシウムが比較的拡散しやすい成分であることを踏まえれば、開放系の火葬骨埋納土坑では骨片や骨粉の溶解が進行し、カルシウムの流失が顕著であることを示唆すると同時に、堆積物中固定されやすいリン酸も流失していることが示唆される。

灰層状堆積物ではリン酸、カルシウム含量が極めて低値であり、天然賦存量を超える値ではないため、骨粉などの遺体成分が含まれる状況を指摘するには至らない。ただし、灰層状堆積物が遺構周辺の表土をなす堆積物であり、遺構内よりもさらにリン酸などの成分が流失しやすい状況に置かれていたことが想定される。そのため、リン酸など成分含量のみから灰層状堆積物が火葬灰に由来しないと否定するものでもない。今回の灰層状堆積物試料は不擾乱試料でなかったため、実施できなかったが、不擾乱柱状試料として採取し堆積物微細形態学的調査を行うことで、人為的要因による堆積物の形成過程や灰の挿在などに関する検討が可能と思われる。なお、今回のリン酸・カルシウム分析結果は、他の遺跡で確認される遺体埋葬の可能性を検討する際に標準的な資料にもなりえる。

d 古墳時代・中世の古植生

古墳時代 4 世紀末および火葬墓が形成された 13 世紀頃の周辺植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を実施する。

(1) 試料

花粉分析に用いる試料は、E 区 1 号墳の古墳のベース堆積物であるサンプル A, B、同じく E 区 1 号墳の中世の遺構検出面を覆う堆積物であるサンプル C, D、及び 13 世紀末の可能性がある焼土坑 SF27 により採取された砂（試料 24）の、計 5 点である。

(2) 分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による歯質の除去、ア

セトリシス（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有的現生標本や島倉（1972）、中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 結果

結果を第 20 表に示す。E 区 1 号墳のサンプル D 以外の試料からは、花粉化石が全く検出されず、わずかにサンプル B, C からシダ類胞子が確認されるのみである。サンプル D においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかつた。木本花粉ではモミ属、ツガ属、クマシデ属・アサガ属、ツツジ属が、草本花粉ではイネ科が、1~2 個体検出された程度である。検出される花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が壊れている状態で産出していた。

なお、焼土坑 SF27（試料 24）は、分析残渣中に、野櫻孔などの木材組織を有する微細炭化植物片が大量に含まれていた。

(4) 考察

今回の分析の結果、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができ

第 20 表 花粉分析結果

種類	E 区 1 号墳 サンプル				SF27 焼土坑 24
	A	B	C	D	
木本花粉					
モミ属	-	-	-	2	-
ツガ属	-	-	-	1	-
クマシデ属・アサガ属	-	-	-	1	-
ツツジ科	-	-	-	1	-
草本花粉					
イネ科	-	-	-	1	-
シダ類胞子					
シダ類胞子	-	11	43	320	-
合計					
木本花粉	0	0	0	5	0
草本花粉	0	0	0	1	0
シダ類胞子	0	11	43	320	0
総計	0	11	43	326	0

なかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1967；徳永・山内、1971；三宅・中越、1998など）。古墳時代のベース堆積物とされるE区1号墳のサンプルA、B、中世の遺構検出面を覆う堆積物であるサンプルC、焼土坑SF27からは、花粉化石が1個体も検出されなかったため、分解消失したのか、もともと堆積物中に取り込まれにくかったのかは不明である。同じく中世の遺構検出面を覆う堆積物であるサンプルDから検出された花粉化石は、保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解していることから、わずかに取り込まれた花粉・シダ類胞子も、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

なお、検出された種類から、少なくとも中世頃の遺跡周辺に、モミ属、ツガ属、クマシデ属-アサダ属、ツツジ属等の木本類、イネ科等の草本類の生育が窺える。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）
(分析者：齊藤崇人・金井慎二)

＜引用文献＞

- 天野 洋司・太田 健・草場 敏・中井 信, 1991. 中部日本以北の土壌型別蓄積率の形態計量、土壤蓄積率の再生循環利用技術の開発、農林水産省農林水産技術会議事務局編, 28-36.
- 馬場 悠男・茂原 信生・阿部 修二・江藤 盛治, 1996. 根古屋道跡出土の人骨・動物骨、龜山根古屋道跡の研究―福島県郡山町根古屋における再調査―、福島県郡山町教育委員会, 93-113.
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M., 1976. SOIL CHEMISTRY. [岩田 進午・三輪 審太郎・井上 隆弘・陽 捷行(訳), 1980. 土壤の化学. 学会出版センター, 303p.]
- Bowen, H.J.M., 1979. Environmental Chemistry of Elements. [浅見 輝男・茅野 充男(訳), 1983. 環境無機化学. 元素の循環と生化学. 博友社, 25p.]
- 土壤標準分析・測定法委員会編, 1996. 土壤標準分析・測定法. 博友社, 35p.
- 藤貫 正, 1979. カルシウム. 地質調査所科学分析法, 82, 57-61.
- 林 瞬三, 1991. 日本木材類 跡微鏡写真集. 京都大学本質科学研究所.
- 伊東 隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学本質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学本質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学本質科学研究所, 63-201.
- 伊東 隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学本質科学研究所, 30-106.
- 伊東 隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学本質科学研究所, 47-226.
- 川崎 弘・吉田 浩・井上 伸久, 1991. 九州地域の土壌型別蓄積率の形態別計量、土壤蓄積率の再生循環利用技術の開発、農林水産省農林水産技術会議事務局編, 23-27.
- 近藤 錠三, 2010. プラント・オーバル園譜. 北海道大学出版社, 38p.
- 松谷曉子, 1993. 一の谷中世墳墓群出土炭化材の樹種同定、「一の谷中世墳墓群遺跡」、磐田市教育委員会.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998. 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967. 花粉分析. 古今書院, 223p.
- 中村 純, 1980. 日本花粉の種微 I II (国版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12.13集, 91p.
- 柄崎 修一郎, 2007a. 火葬人骨と考古学. 「墓と葬送の中世」, 狩川真一編, 高志書院, 107-125.
- 柄崎 修一郎, 2007b. 群馬県出土中世火葬遺構. 研究紀要, 25, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 101-120.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1997. 新版標準土色鉛.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994. 自然科学分析. 田間東道化遺跡一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査、栃木県埋蔵文化財調査報告第149集、栃木県教育委員会・財团法人栃木県文化調査事業団, 123-127.
- ペドロジスト懇談会, 1994. 土壤調査ハンドブック, 150p.
- Richter HG,Groener H,Heinz L and Gesson PE(編),2006.針葉樹材の識別 IWAによる光学的微細的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.[Richter HG,Groener H,Heinz Land Gesson PE(2001)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 狩川真一, 2011. 中世墓の考古学. 高志書院, 24p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織. 地球社, 170p.
- 島食 巳三郎, 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 諭訪 誠三, 1967. 四肢骨連レントゲン像と年齢. 総合臨床 26, 229-241.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971. 花粉・胞子. 化石の研究法. 共立出版株式会社, 50-73.
- 植田 弥生, 2000. 横森赤台(東下)遺跡出土炭化材の樹種同定. 高根町 横森赤台(東下)遺跡 一国道 141 号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書一, 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第171集. 山梨県教育委員会・山梨県土木部, 65-71.
- Wheeler E.A,Bass P. and Gesson PE(編),1998. 広葉樹材の識別 IWAによる光学的微細的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井智之・佐野 浩(日本語版監修), 海青社, 123p.[Wheeler E.A,Bass P. and Gesson PE(1998)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 須藤 功, 1996. 萩式 あの世への民俗. (株)青弓社, 218p.

写真6 出土人骨(1)



- | | | | |
|---------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 左右頭頂骨(SX3:1) | 2. 後頭骨(SX3:1) | 3. 側頭骨(SX3:1) | 4. 下顎骨(SX3:1) |
| 5. 上腕骨遠位端(SX3:1) | 6. 尺骨(SX3:1) | 7. 後頭骨(SX4:2) | 8. 大腿骨遠位端(SX4:2) |
| 9. 四肢骨(SX6:3) | 10. 前頭骨(SX7:4) | 11. 後頭骨(SX7:4) | 12. 後頭骨(SX7:4) |
| 13. 下頸骨(SX7:4) | 14. 下頸骨(SX7:4) | 15. 右尺骨(SX7:4) | 16. 大腿骨(SX7:4) |
| 17. 頭蓋骨(SX8:5) | 18. 下頸骨(SX8:5) | 19. 前頭骨(SX9 ①:6) | 20. 側頭骨(SX9 ①:6) |
| 21. 左鎖骨(SX9 ①:6) | 22. 右鎖骨(SX9 ①:6) | 23. 第2頸椎(SX9 ①:6) | 24. 第2頸椎(SX9 ①:6) |
| 25. 大腿骨遠位端(SX9 ①:6) | 26. 頭頂骨(SX9 ②:6) | 27. 左側頭骨(SX9 ②:6) | 28. 右側頭骨(SX9 ②:6) |
| 29. 左上頸骨(SX9 ②:6) | 30. 右上頸骨(SX9 ②:6) | 31. 下頸骨(SX9 ②:6) | 32. 大腿骨(SX9 ②:6) |
| 33. 頭蓋骨(SX9 最下部:6) | 34. 頭蓋骨(SX9 最下部:6) | 35. 下頸骨(SX9 最下部:6) | 36. 下頸骨(SX9 最下部:6) |
| 37. 大腿骨(SX9 最下部:6) | 38. 腰椎(SX10:7) | 39. 側頭骨(SX11 北:8) | 40. 頭蓋骨(SX11 北:8) |
| 41. 上腕骨(SX11 北:8) | | | |

0 5cm

写真7 出土人骨(2)



0 5cm

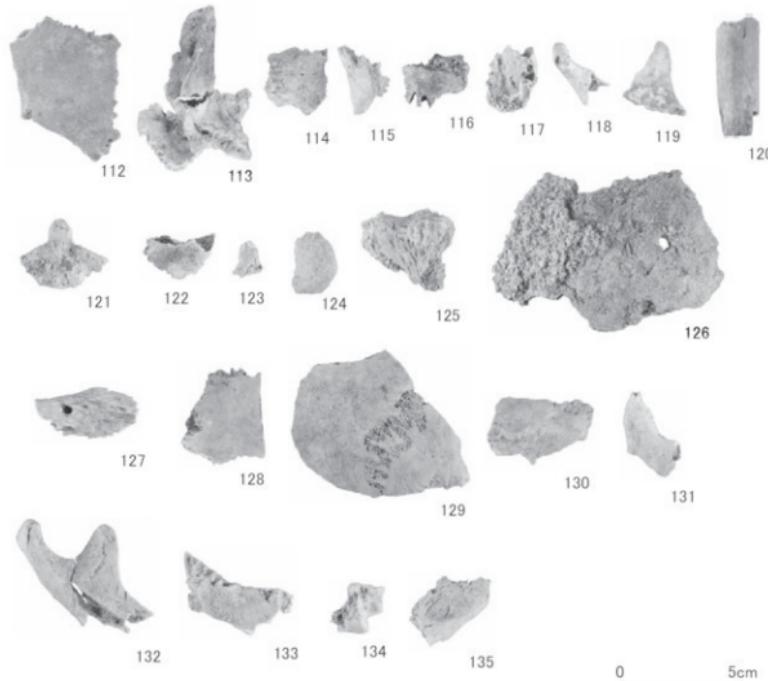
- | | | | |
|---------------------|---------------------|-------------------|---------------------|
| 42. 左側頭骨(SX13:10) | 43. 頭蓋骨(SX13:10) | 44. 大腿骨(SX13:10) | 45. 下頸骨(SX14:11) |
| 46. 前頭骨(SX16:13) | 47. 左側頭骨(SX16:13) | 48. 頭蓋骨(SX16:13) | 49. 右頸骨(SX16:13) |
| 50. 上頸骨(SX16:13) | 51. 下頸骨(SX16:13) | 52. 下頸骨(SX16:13) | 53. 大腿骨遠位端(SX16:13) |
| 54. 四肢骨(SX17:14) | 55. 側頸骨(SX18:15) | 56. 側頸骨(SX18:15) | 57. 側頭骨(SX18:15) |
| 58. 下頸骨(No.15.SX18) | 59. 下頸骨(SX18:15) | 60. 頭蓋骨(SX18:15) | 61. 第1頸椎(SX18:15) |
| 62. 胸椎(SX18:15) | 63. 上腕骨遠位端(SX18:15) | 64. 左尺骨(SX18:15) | 65. 窓骨(SX18:15) |
| 66. 審骨(SX18:15) | 67. 大腿骨近位端(SX18:15) | 68. 大腿骨(SX18:15) | 69. 大腿骨近位端(SZ11:16) |
| 70. 頭蓋骨(SX19:17) | 71. 右側頭骨(SX19:17) | 72. 左側頭骨(SX19:17) | 73. 右頭頂骨(SX19:17) |
| 74. 下頸骨(SX19:17) | 75. 下頸骨(SX19:17) | 76. 上腕骨(SX19:17) | 77. 左寢骨(SX19:17) |
| 78. 右寢骨(SX19:17) | 79. 大腿骨近位端(SX19:17) | 80. 第1頸椎(SX20:18) | 81. 第2頸椎(SX20:18) |
| 82. 上腕骨近位端(SX20:18) | | | |

写真8 出土人骨(3)



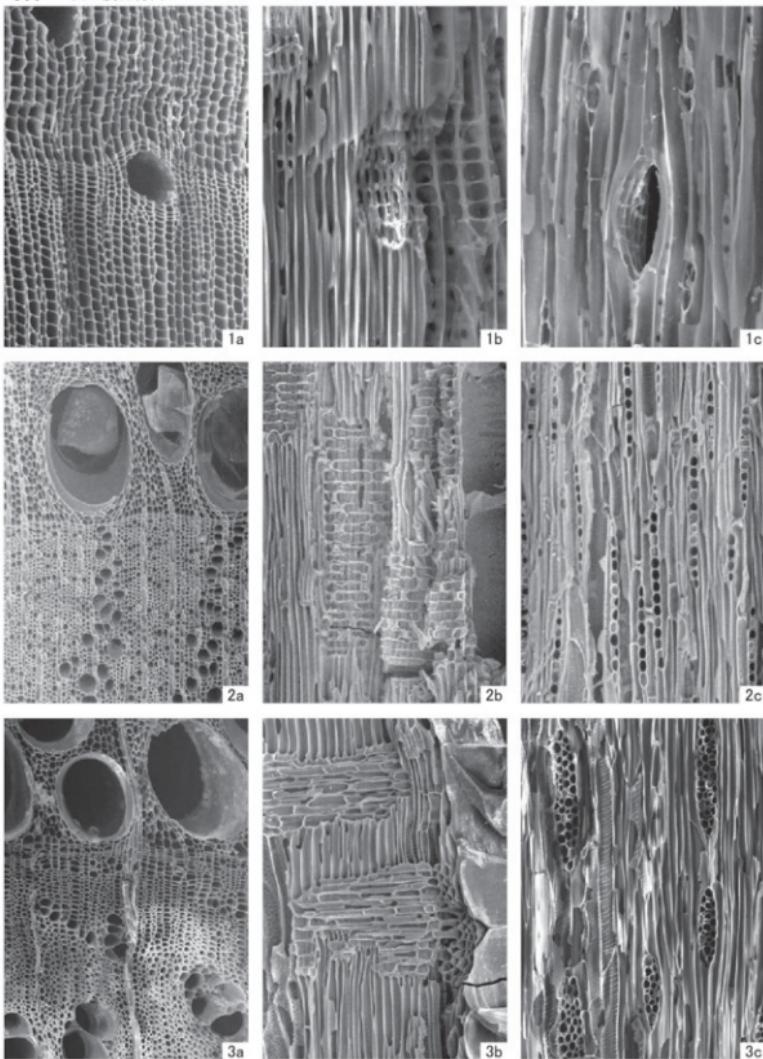
- | | | | |
|----------------------|-------------------|----------------------|----------------------|
| 83. 左頸頂骨(SX21:19) | 84. 右頸頂骨(SX21:19) | 85. 左側頭骨(SX21:19) | 86. 右側頭骨(SX21:19) |
| 87. 右側頭骨(SX21:19) | 88. 後頭骨(SX21:19) | 89. 右頸骨(SX21:19) | 90. 左頸骨(SX21:19) |
| 91. 左上頸骨(SX21:19) | 92. 下頸骨(SX21:19) | 93. 下頸骨(SX21:19) | 94. 下頸骨(SX21:19) |
| 95. 第1頸椎(SX21:19) | 96. 第1頸椎(SX21:19) | 97. 第2頸椎(SX21:19) | 98. 左上腕骨(SX21:19) |
| 99. 上腕骨(SX21:19) | 100. 上腕骨(SX21:19) | 101. 上腕骨(SX21:19) | 102. 左橈骨(SX21:19) |
| 103. 捺骨(SX21:19) | 104. 下尺骨(SX21:19) | 105. 尺骨(SX21:19) | 106. 左橈骨(SX21:19) |
| 107. 大脛骨近位端(SX21:19) | 108. 大脛骨(SX21:19) | 109. 大脛骨遠位端(SX21:19) | 110. 大脛骨遠位端(SX21:19) |
| 111. 腹骨(SX21:19) | | | |

写真9 出土人骨(4)



- | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 112. 頭頂骨 (SX23:20) | 113. 右側頭骨 (SX23:20) | 114. 後頭骨 (SX23:20) | 115. 頸骨 (SX23:20) |
| 116. 上頸骨 (SX23:20) | 117. 上頸骨 (SX23:20) | 118. 下頸骨 (SX23:20) | 119. 下頸骨 (SX23:20) |
| 120. 上腕骨 (SX23:20) | 121. 第2頸椎 (SX23:20) | 122. 頸蓋骨 (SX24:21) | 123. 第2頸椎 (SX24:21) |
| 124. 上腕骨近位端 (SX24:21) | 125. 肩骨近位端 (SX24:21) | 126. 右頸頂骨 (SX25:22) | 127. 側頸骨 (SX25:22) |
| 128. 頭蓋骨 (SX26:23) | 129. 側頭～後頭骨 (SX26:23) | 130. 後頸骨 (SX26:23) | 131. 右頸骨 (SX26:23) |
| 132. 下頸骨 (SX26:23) | 133. 下頸骨 (SX26:23) | 134. 上腕骨遠位端 (SX26:23) | 135. 寬骨 (SX26:23) |

写真10 出土炭化材(1)



1.マツ属複維管束亜属(SF27;24)

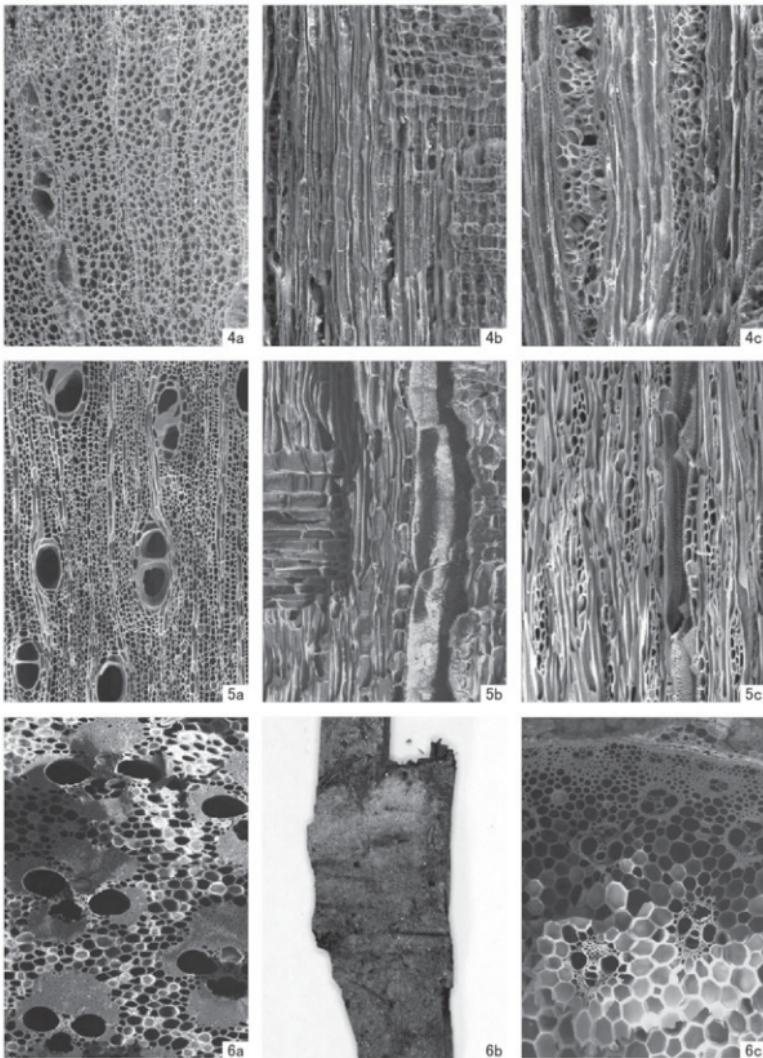
2.クリ(SF15;12 炭サンプル)

3.キハダ(SF15;12 南面)

a:木口,b:柾目,c:板目

200 μm:2-3a
200 μm:1a,2-3b,c
100 μm:1b,c

写真11 出土炭化材(2)



4.シャシャンボ(SZ28:25) a:木口,b:柾目,c:板目

5.カキノキ属(SF15:12 炭サンプル) a:木口,b:柾目,c:板目

6.マダケ属(SF15:12 北面) a:横断面,b:節の形状

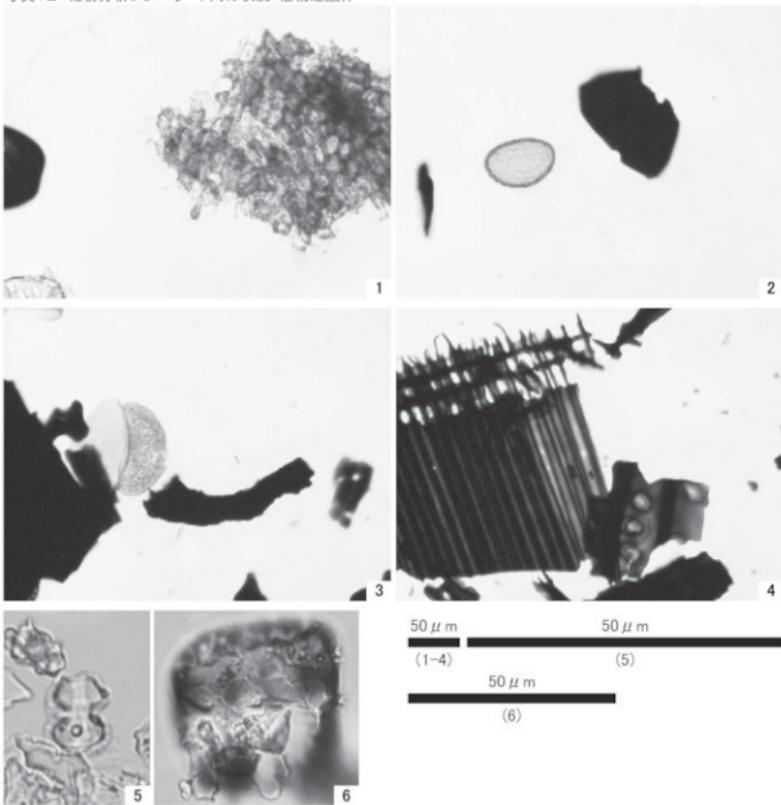
7.イネ科タケ亜科(SF15:12 炭サンプル) 横断面

200 μ m:4-6a,7

200 μ m:4-5b,c

2cm:6b

写真12 花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体



1. プレパラート内の状況(E区1号墳サンプルA)
2. プレパラート内の状況(E区1号墳サンプルC)
3. プレパラート内の状況(E区1号墳サンプルD)
4. プレパラート内の状況(SF27:24)
5. イネ属短細胞珪酸体(丘陵頂部中世墓周辺土壌:26)
6. イネ属機動細胞珪酸体(丘陵頂部中世墓周辺土壌:26)

IX 調査のまとめと検討

1 沖打越1号墳

a 墳形・規模

沖打越1号墳は不定形ながら造り出し付円墳の可能性が高く、墳丘長24m、円丘部長19m、突出部長5mの規模を有する。円丘部はやや梢円形を呈するが、墳丘の自然崩落・流出が著しいため、本来、円丘部が正円を描いていたのかどうかは不明である。

古墳の成形は地山削出しを基本としていたと推察されるが、墳丘の自然崩落・流出により成形の痕跡はきわめて不明瞭であった。また、明確に盛土と判断できる土層は確認されなかつた。したがって仮に盛土が行われていたとしても簡便な工法だったと推測される。

古墳の外表施設として、段築・葺石は認められなかつたが、墳頂に円筒埴輪が巡らされていたと考えられる。埴輪の出土量は限られていることから、芯々間距離は広くとられ、まばらに配置されていたと推測できる。

b 埋葬施設

埋葬施設1 埋葬施設1は2度掘削されており、最初の掘削による墓壙は長さ8.17m、幅3.15m、深さ1.02mの規模を誇り、断面は逆台形を呈する。再掘削に伴う墓壙はほぼ同じ規模だが、幅がやや縮小して2.54mの大きさであった。

墓壙底には木棺安置のために、長さ7.6m、最大幅81cm、断面半円形の掘り込みが設けられていた。この掘り込みには長さ6.5m、東端幅66cm、西端幅52cmの割竹形木棺が西側に偏って据えられた。木棺西小口には長側板を挟むように小口板が設置されていた。東小口では小口板の手がかりを得られなかつたが、長側板が小口板を挟み込んでいた可能性も想定できる。

埋葬施設1では再掘削後の土器から埴輪片・直刀・鎌・刀子が出土した。墓壙底・木棺内において副葬品・赤色顔料は確認されなかつたが、木棺の東寄りで人骨がわずかに検出された。木棺底は東側が8cm高く、棺幅も東側の方が14cm広いことを勘案すれ

ば、東頭位の可能性が考えられる。

埋葬施設2 埋葬施設2は埋葬施設1の形成後に造営された。墓壙は上端で長さ3.64m、幅1.51m、深さ64cmの規模を有し、断面は逆台形を呈する。

墓壙底には長さ3.37cm、西側の幅51cm、東側の幅41cmの割竹形木棺が据えられていた。木棺の両端には溝状の掘り込みが設けられていることから、長側板を挟むようにして小口板が据えられていたと考えられる。棺幅から推測すると被葬者の頭位は西頭位となるが、棺底は東小口のほうが4cm高いことが難点といえる。埋葬施設2では人骨・副葬品・赤色顔料などは確認されなかつた。

ピット 埋葬施設1の周辺で4つのピットを検出した。検出したピットの位置関係と傾きから、墳丘上に建物を想定することは困難である。このピットの性格については、立柱を伴う葬送儀礼などの可能性が考えられる。岡林孝作氏は、棺の周囲を取り囲むように並ぶ柱・杭について、埋葬とそれにかかる儀礼の場に仮設の遮蔽物を設けて区域標示する場合があることを指摘している¹⁰⁾。沖打越1号墳の事例がこれに該当する可能性もある。いずれにしても沖打越1号墳における立柱の評価は、今後の事例増加・研究に託されよう。なお、埋葬施設1の再掘削が最初の墓壙よりわずかに狭い範囲を見事に掘削しており、何らかの目印があったことが推察される。立柱はこの目印として設置された可能性も考慮すべきだろう。

埋葬施設の形成順 2つの埋葬施設の形成順は、まず埋葬施設1の墓壙が掘削され、最初の埋葬が行なわれた。この埋葬に伴う埋め戻しでは、木柱が數本立てられたと想定される。次に埋葬施設2が形成され、さらに何らかの事情によって埋葬施設1が再び掘り返された。掘り返しに際しては、木柱を目印にしてその内側を掘削した可能性がある。この再掘削は、埴輪の摩滅度などから最初の埋葬から時間を隔てることななく行われたと推測される。

埋葬施設の規模とその評価 埋葬施設1の墓壙は長さ8.17m、幅3.15mと非常に大きな規模を有する。古墳時代前期には堅穴式石室-粘土構-木棺直葬とい

う埋葬施設の種類と規模において秩序が表現されており、中期初頭に長持形石棺が登場することを完成をみる。この「棺制」^⑩とでも呼ぶべき秩序は、古墳に葬られる首長層の拡大に伴って下層へと浸透する。しかし中期初頭頃から小規模な古墳が大規模な埋葬施設への志向を強めるようになり、秩序の持つ意義は次第に曖昧なものとなる。これを受けた中期中葉以降、埋葬施設の規模が相対的に縮小する。沖打越1号墳は埴輪規模に対して、大規模な埋葬施設を有する。埋葬施設1は再掘削を受けており、本来の副葬品が不明なことが惜しまれるが、「棺制」の推移を探る良好な事例と評価できる。

c 出土品

副葬品として、埋葬施設1再掘削後の埋土から埴輪片・直刀鎌・刀子・東周講から埴輪・鉄鎌・土師器などが出土した。

円筒埴輪 円筒埴輪は3条4段構成で、円形の透かし孔を各段2ヶ所、段の上下で90度方向を逆て穿つ配置と考えられる。器面調整にB種ヨコハケが認められること、黒斑の付着から野焼き焼成と考えられることから、沖打越1号墳の円筒埴輪は川西宏幸氏のⅢ期に相当する^⑪。なお、B種ヨコハケにはBb種ヨコハケ^⑫ととらえ得る資料が確認された。

突帯間隔は古墳時代中期を通して狭くなる傾向にある。突帯間隔だけでなく透かし孔の形態・口縁部形態・器面調整なども考慮して近隣の古墳と比較すると、石山古墳→殿塚古墳→沖打越1号墳→わき塚1号墳→女良塚古墳という新古をとらえることができる。これらの検討から、沖打越1号墳の埴輪は川西氏によるⅢ期、埴輪検討会のⅢ期2段階^⑬に相当し、『前方後円墳集成』(以下、「集成」)の5期^⑭と捉えることができる。

形象埴輪 形象埴輪として家形埴輪が出土した。家形埴輪の壁にあたる破片には竹管による円形文が確認されており、珍しい事例だが、類例として石山古墳例が知られている。この点から両古墳の関係の深さがうかがえよう。

鉄器 鉄器のうち鉄鎌は腸抉を有する柳葉形だが、長身化が進みつつあること、腸抉が深くなりつつあること、頭部が扁平な長方形であることが特徴といえる。その時期は中期初頭から前葉と考えられる。直

刀鎌については古墳時代の当初からみられるものの、中期前葉、すなわち「集成」6期を下限として急速に姿を消すことが指摘されている^⑮。

なお、近隣ではわき塚1号墳から曲刀鎌が出土している。曲刀鎌は折り返しを表に向けた時、先端が左を向くものを折り返し甲技法、右を向くものを乙技法に分類され^⑯、後者は「集成」5期から、前者は「集成」6期から見られる。わき塚1号墳の曲刀鎌は折り返し甲技法であることから「集成」6期といえる。

したがって沖打越1号墳は鉄鎌から「集成」4期後半、和田晴吾氏による編年の5期^⑰を上限とし、鎌から集成6期すなわちTK73型式期^⑱を下限とし、わき塚1号墳よりも先行するとみなせる。

土器 小型丸底壺は寺沢薰氏のいう小型丸底壺E・Fに相当し、布留3~4式に相当する^⑲。布留形甕は口縁部g4にあたり、布留2~4(古)式に多く見られる。これらの点から沖打越1号墳の土師器は布留3~4(古)式と評価できる。

集成3期後半から4期前半の東大寺山古墳からは布留2式、4期後半の津堂城山古墳から布留3式の土師器が出土していること、集成6期以降と布留4(新)式が対応することから、沖打越1号墳の布留3~4(古)式の土師器は「集成」4期後半から5期に当たる。

出土品の評価 金属製品として鉄鎌・直刀鎌・刀子などが出土したが、鏡・甲冑は確認されなかった。当該期には甲冑類をはじめとする鉄器の多量副葬品の事例が知られているが、そうした片鱗はうかがえなかつた。埋葬施設1は再掘削を被っており、本来の副葬品セットが不明であることが惜しまれる。なお、沖打越1号墳では鉄製品・埴輪・土師器が出土しており、併行関係を探る上で良好な一括資料といえる。中期初頭における定点として評価できよう。

d 築造時期

沖打越1号墳の円筒埴輪は野焼きで焼成し、B種ヨコハケを器面調整に採用していることから、川西氏のⅢ期に相当する。ただし、伊賀では窯窓導入が遅れることからⅢ期の下限が明瞭ではない。この点を解決する上で、土師器・鉄器があわせて出土することは大きな意義を持つ。土師器から「集成」5期、鉄製品から「集成」6期を下限として区切ることが

暦年代	集成編年	埴輪	土師器	須恵器	鉄製品 (鎌)	伊賀の古墳	代表的な古墳
-300-	2期	I	布留 1式	直 刃			桜井茶臼山 メスリ山
							行灯山 東大寺山
-350-	3期	II	2式				佐紀陵山
-400-	4期 後	III	3~4 (古)式	TG232	曲 刃 (乙)	石山	津草城山
						殿塚	仲津山
-400-	5期	IV	TK73		曲 刃 (甲)	沖打越	墓山
						わき塚1号	若田御廟山

集成編年は註(6)文献、埴輪は註(3)文献、土師器は註(11)文献、須恵器は註(10)文献を参照

第33図 沖打越1号墳と関連古墳編年案

できる。さらに近隣のわき塚1号墳では曲刀鎌が出士していること、円筒埴輪の突帯間隔が沖打越1号墳より縮小していることを確認できる。この点から、沖打越1号墳は「集成」6期のわき塚1号墳よりも先行するといえる。

このように円筒埴輪・土師器・鉄製品を総合的に判断すれば、沖打越1号墳は「集成」5期に位置づけできる。さらに、円筒埴輪の相対的な新古関係から、石山古墳・殿塚古墳→沖打越1号墳→わき塚1号墳→女良塚古墳という築造順を把握できる。

以上をまとめると、沖打越1号墳は古墳時代中期初頭、集成5期に築造されたと考えておきたい(第33図)。暦年代については、年輪年代法による成果を考慮すればTG232型式期を4世紀末、TK73型式期を5世紀前葉ととらえることができる。したがって沖打越1号墳は4世紀末ごろに築造されたと評価しておく。

● 首長系譜と沖打越1号墳

沖打越1号墳は石山古墳・殿塚古墳よりも後出し、わき塚1号墳よりわずかに先行することが判明した。次に地域における首長系譜⁽¹⁰⁾への位置づけを試みてみたい。伊賀の首長系譜については山本雅靖氏がまとめている⁽¹¹⁾。山本氏は、伊賀盆地を阿伴地域・山田地域・伊賀地域・名張地域の4地域に区分し、伊

賀地域を美旗古墳群のある上流域、石山古墳のある比自岐川流域、糠塚古墳のある中流域に細分している。この区分に従えば、沖打越1号墳は伊賀地域の中流域に該当すると思われる。

沖打越1号墳に関しては家形埴輪の円形文(第17図24)から石山古墳との親縁性あるいは影響を指摘できる。この点を重視すれば、石山古墳を築いた首長の基盤は比自岐盆地にとどまらない可能性がある。これまで首長墳の消長のみで地域間の優劣・影響関係が論じられることが多かったが、沖打越1号墳の事例によって有機的なつながりが見出された点は高く評価されよう。

石山古墳の築造後、比自岐川流域において顕著な首長墳は認められず、上流域において美旗古墳群が台頭する。この時点で当該地域における盟主権は上流域に移った可能性が指摘できる。この後、古墳時代中期を通じて盟主的古墳が美旗古墳群において築造されたと考えられる。こうした美旗古墳群の隆盛の一方で、比自岐川流域・中流域においても墳丘長20~40m程度の造出し付円墳が散発的に築かれているようである。これらには、新たに確認された古墳も含まれるため、詳細は才良山ノ谷古墳群・才良吉田谷古墳群の発掘調査報告に託したい。盟主的古墳が築かれる一方で、小地域を基盤とした中小首長も

一定の自立性を保ちつつ小規模な古墳を造営していたことを鮮明にとらえられる稀有な事例と言えよう。これらの成果によって首長間の具体的な関係に迫れることがある。沖打越1号墳ならびに周辺での調査成果の持つ意義は大きいのである。

(高松)

2 沖打越中世墓

a 中世墓の展開

沖打越中世墓は、13世紀後半から14世紀初頭を中心とし、一部16世紀代頃まで続く火葬墓群である。この年代観は出土遺物として確認できた藏骨器を中心とした土器類と石塔類から考えられるものである。確認された構には、火葬人骨のみを直接小土坑内に埋納したもの（火葬骨埋納土坑）もあるため、正確な時期比定は困難であるが、およよその変遷をたどつておく。

成立 13世紀後葉頃、礎石経を納めた陶器甕を埋納し、その上に石塔が立てられた。これが当世墓のシンボルとなる施設で、五輪塔は經塚標識塔にあたる。ほぼ同時に、陶器甕類を藏骨器とした火葬墓が周囲に形成された。

展開 14世紀代の藏骨器は、実際に埋納されたものとしては確認されていないが、遺跡の周辺に破片が散乱した状態で確認されている（第26図、第27図63の信楽産甕など）。したがって、藏骨器を埋納する行為は14世紀代までは継続していたと考えられる。また、それと前後する時期から、火葬骨を直接土中に埋納する火葬墓（火葬骨埋納土坑）も形成されていたと考えられる。

終焉 15世紀代後半以降は、五輪塔や石仏を伴う墓が形成されたと考えられる。これらは藏骨器を伴わず、火葬骨埋納土坑と組み合わさっていると考えられる。出土遺物を見る限り、当世墓は遅くとも17世紀前半には廃絶していたと考えられる。

前期中世墓・後期中世墓 なお、15世紀前半代の時期を示す遺物が明確ではない。そのため、当世墓を「經塚+藏骨器」の時期（前期）と、「石塔+火葬骨埋納土坑」の時期（後期）の2時期に区分し、その間に墓地が形成されない時期（具体的には15世紀

前半頃）という見方を示すこともできるかも知れない。

b 個別遺構と遺物に関して

經塚の形態 SX5とその周辺からは、合計345点の円錐が出土し、うち17点には墨書きが見られた。このことから、SX5は礎石経を中心とした經塚と考えた。

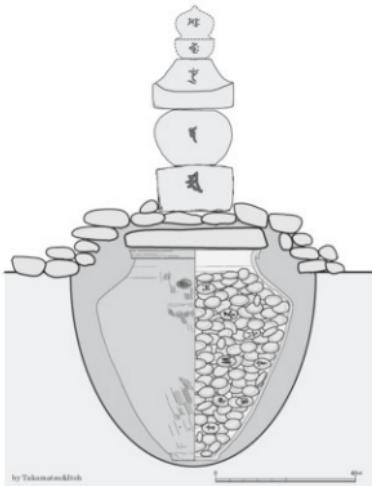
SX5周辺では、知多（常滑）産陶器甕片が散乱しているとともに、五輪塔の地輪と水輪も出土している。また、拳大から50cmほどまでの川原石がSX5付近からまとまって出土した。

これらの要素から、SX5は陶器甕内に礎石経を納め、上部を積石塚状に成形し、その上に石塔（五輪塔）を立てた形態だったと考えられる（第34図）。

なお、SX5の東にあるSK29も、SX5と同種の土坑である。これについても經塚である可能性が考えられるが、出土遺物が全く無いため、性格については保留せざるを得ない。

五輪塔 経塚SX5の上に建てられていたと考えられる五輪塔は、水輪・地輪は構造上部で確認され、火輪は北側斜面部で出土した。火輪の出土地点は原位置から離れているが、使用石材の雰囲気と全体寸法から、經塚に伴う五輪塔の一部と判断した。

五輪塔の地輪は側面形が横長となるもので、上面は水落しのために斜面となっている。これらの特徴は



第34図 経塚想定復元図



第35図 沖地区周辺の中世前期遺跡

比較的古い五輪塔に見られる⁽¹⁴⁾。のことから、経塚の陶器甕が示す13世紀後葉頃の年代観を与えておきたい。ちなみに、この年代観が妥当であれば、石造物の五輪塔としては、伊賀地域での最古事例となる。

この五輪塔は、四方の梵字を墨書きしている。墨書きが経年変化によって風化しやすいことを踏まえても、このような事例はこれまでにほとんど確認されていない。思想的背景や時代的・地域的位置づけなど、今後の検討課題である。

穢石經 経塚SX5とその周辺から出土した穢石經は、知多（常滑）産陶器甕を容器としたものと把握できる。したがって、穢石經の時期も13世紀後葉頃に位置づけることができる。

穢石經は、全国的に見れば平安時代後期から存在

するようであるが、列島規模で広がるのは江戸時代になってからである⁽¹⁵⁾。沖打越中世墓の事例は、現段階における三重県下で最古のものである⁽¹⁶⁾。また、供伴遺物から確実に13世紀代の事例として押さえられるという点でも貴重な事例といえる。

夫婦墓の可能性 確認された遺構には、2基単位のいくつかのまとまりが見られる。例えば、SX3・4、SX7・8、SX16・18、SX19・21などである。とくにSX7・8は、他の一群よりも離れた位置にあり、相互が意識して造営された遺構であることを示している。

沖打越中世墓が数世代にわたる家族墓であると見なされるのであれば、これら2基単位でまとまる一群はそれぞれが夫婦墓であることを示しているので

はないかと考えられる。このように見た場合、造構の状況を見る限り、男女の格差は見出しつらい。火葬骨埋納造構としては、どちらが主でも從でもなく、均質化されていると見なされる。

無遺物土坑の意味 検出した造構の中には、火葬骨も藏骨器も確認されなかつた造構がいくつかある。これらの造構規模は、火葬骨埋納造構とそれほど大差の無いものである。これらは、第VI章で述べた通り、元々は藏骨器が納まっていた土坑で、盃掘等で滅失したものと考えられる。

最も良好な事例が経塚SK5の西にあるSK22とSK31である。この2基は無遺物土坑だが深さは30cmを越え、接近して造営されている。先の認識を踏まえれば、元々は藏骨器が納められていた夫婦墓であつたと考えられる。

c 造営者像

経塚と宗教者の関連 当中世墓のシンボルとなつてゐるのが経塚（礎石経・五輪塔）である。そのため、当中世墓の造営背景には仏教信仰があることは明らかである。また、礎石経の書体には2種類以上見られるので、経をしたためた人物（僧）が2名以上いたと考えられる。教典の名称は今のところ分からぬ（法華経だろうか）が、後述の律宗と神地区との関係を踏まえれば、律宗の僧が関与していた可能性が考えられる。つまり、そのような宗教者を招請できる程度の有力者が造墓主体者であると考えられる。

藏骨器の状況から 当中世墓で見られた藏骨器は、知多半島産陶器（常滑）の壺類を中心で、少量だが伊賀信楽産陶器や瓦質土器鍋・土師器鍋などもある。同じ時期にあたる他地域の中世墓を見ると、瀬戸産施釉陶器壺類を多量に用いる事例（松阪市小谷赤坂中世墓⁽³⁷⁾、四日市市経塚中世墓⁽³⁸⁾、鈴鹿市椎山中世墓⁽³⁹⁾など）があり、それに比べると、採用器種がやや見劣りすることは否めない。

沖打越中世墓との比較に最適な事例は、安田中世墓（伊賀市青山町寺脇）である⁽⁴⁰⁾。この遺跡は、後述する『西大寺諸国末寺帳』記載の「地蔵堂」に指定される宝嚴寺の裏山にあり、条件的にも沖打越中世墓と類似する。この中世墓は13世紀末から16世紀前半にかけて形成され、13世紀後半から14世紀前半代の瀬戸産施釉陶器壺を複数点含んでいる。沖打

越中世墓の内容が安田中世墓のそれを凌駕するものではないことは明らかである。

造営者像と中世墓 以上のことから、沖打越中世墓の造営者はそれほど突出した勢力を有する集団ではないが、かといって庶民層とも考えにくい。在地の有力名主層あたりを想定するのが妥当であろう。

造墓域とその規模からは、沖打越中世墓は一家族が数世代にわたって造営したものと考えられる。つまり、一族墓の一種と考えられる。

これに類した中世墓が近隣に見られる。沖打越中世墓から南に約150m、同じ丘陵の南斜面部に1基の石仏がある（写真13）。この石仏は、阿弥陀如来と地蔵菩薩の立像を並べた2体仏の様相で、幅約36cm、全長37cm以上の箱式笠付石塔である。この石仏のある地点から北へ上がった丘陵高所にある崖面には炭屑が見られるため、この付近一帯が中世墓であると考えられる（沖打越中世墓、第35図）。石仏の所属時期はおよそ15世紀代と考えられる。これらの状況から、沖打越中世墓についても丘陵頂部を利用した小規模な中世墓群と考えられる。

以上のことから、沖打越中世墓を含む神地区周辺部の中世墓に関しては、次のように考えられる。当地は、13世紀頃から一般名主層の造墓がはじまるが、それは個々の家（一族）単位で造営されるものであった。おそらく、近隣の丘陵部には、沖打越中世墓・沖打越中世墓のような小規模な中世墓が他にも散在していると考えられる。これらが解消し、村落単位での造墓へと変換するのが16世紀中葉から17世紀にかけてと考えられる。

この意味で、沖打越中世墓は中世の家族墓（一族墓）を示す典型的な事例と考えられる。

d 不動寺（律宗）との関係

当中世墓の北にある不動寺は、『西大寺諸国末寺



写真13 沖打越中世墓の石仏

帳』⁽²⁰⁾に記載のある「不動寺」と考えられる。

[史料1]

伊賀国	
八ヶ寺	和田
大闢寺四室	三間
御靈院	二間
妙覺寺東二	七仏薬師院大慈院
シケ	七仏
長福寺	良福寺
長樂寺トヨノダ	阿弥陀寺三室
報恩寺順性房	無量寿福寺
地藏堂	不動寺

(中略)

明徳二年九月廿八日書改之了

懇合二百十八箇寺 文亀三年壬戌五月日 交合了

『西大寺諸國末寺帳』は、鎌倉時代中後期に活躍した収尊が拠点とした律宗寺院である。伊賀国では12ヶ寺が記載されている。ただしこの史料は、明徳2(1391)年に「書改」され、最終的に「交合」されたのが文亀3(1503)年である。そのため、元々記された寺々が明徳2年を数十年遅る可能性がある一方、文亀3年までの間に書き足された寺々も存在する可能性は考えなければならない。とくに、不動寺は末尾に記載されており、明徳2年以降に書き足された可能性や、そもそもこの史料に見える不動寺が沖地区にある不動寺と見なせるかどうかかも検討する必要がある。実際、『西大寺諸國末寺帳』に見られる乏しい記載から、当史料に見える「不動寺」を沖地区に現存する不動寺と結びつけるのには慎重な意見もある。

これに関しては、沖地区で今回新たに確認した石塔台座に注目したい。この石塔台座(写真14)は、沖地区的集落内にある(第35図)。道の傍らに置かれ、装飾性に乏しいことからこれまでその存在すら認識されていなかったものである。しかし、この台座は側面を意図的に無装飾とした「縁形座」と呼ばれるもので、本来は宝篋印塔や五輪塔の台座として用いられるものである。とくに律宗では、大型五輪塔の台座として縁形座は多用されている。

沖地区的縁形座は、形態の特徴から遅くとも14世紀後半以前のものであることは間違いない。ちなみに、伊賀国の縁形座は、この沖地区事例がはじめての確認となる。



写真14 沖地区の縁形座

また、第VII章で見たように、不動寺近隣からは中世の瓦類が出土している。瓦類は、形態や技法の特徴から15世紀以前のものである。さらに、不動寺境内には14世紀代と見られる宝篋印塔基礎や層塔などがあり、遅くとも14世紀代には寺院としての体裁を整えていたと考えられる。

以上の状況から、『西大寺諸國末寺帳』記載の不動寺は沖地区の不動寺そのものと判断して妥当と考えられる。そして縁形座の存在から、少なくとも14世紀代の沖地区は地域全体として律宗と密接に関連していた可能性を考えることができる。

沖打越中世墓の意義 以上を踏まえれば、沖打越中世墓の成立期には、律宗の大多な関与があったと見られる。しかし、収尊を中心とする律宗の活動は、およそ13世紀後葉以降に活発化する⁽²¹⁾。沖打越中世墓の開始時期は、微妙ではあるがこれよりもやや先行する可能性が高い。つまり、西大寺末寺として不動寺が活動をはじめる直前に沖打越中世墓の造営がはじまっていると考えられる。

なお、成立後の中世墓がどのような意識の下で継続したのかは不明と言わざるを得ない。律宗の継続的関与も勿論考えられるが、15世紀代以降に関してはそれを示す確証はない。

しかし、13世紀後葉頃に成立し、16世紀代に終焉を迎える沖打越中世墓は、中世墓の典型的な盛衰を示しているといえる。最も重要なのは、比較的長期に亘るものでありながら、その規模から基本的には1家族程度の継続墓地と見なされることと、茶毘の場と火葬骨埋納地が一定エリアにまとまるという点

にある。つまり沖打越中世墓は、中世の一家族＜造墓可能という点では一定程度の富裕層＞が示す中世の造墓形態を典型的に示す事例として評価できるのである。

(伊藤)

3 総括～丘陵遺跡の発掘調査について～

沖打越1号墳・沖打越中世墓は、沖地区、ひいては伊賀盆地南部を眺望できる絶好の立地である。今回の調査は、当初は中世墓のみを認識して実施したのだが、その下部から新たに古墳が発見されたことにより、2ヶ年にわたる調査となった。

2つの遺跡は、いずれも眺望がよいという点で一致する。つまり時代こそ違え、眺望の善し悪しが遺跡の存在意味として大きいことを示している。

最後に、当遺跡の調査によって明らかとなった、遺跡の認識と調査に関する課題を記す。調査前の状況からは、中世墓としての当遺跡はさておき、古墳という認識はかなり困難であった。調査の結果、古墳築造後にかなりの出土物があったことが判明した。これが調査以前に古墳と認識できなかった理由である。

当遺跡には、たまたま中世墓があつたため、その調査進展で下部の古墳を認識することができたが、もしも中世墓が無ければ、古墳の存在は認識されず、自然地形として調査対象から外れていた可能性は高い。その意味で周辺を見渡すと、外形から古墳とは断定しにくいが、かといってその可能性をも捨て去ることまではできないような微妙な場所が点在している。

現在の文化財保護行政では、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないところを（原因者負担を前提として）行政的に発掘調査するのはかなり困難である。そのため、掘ってみなければ分からぬいような、古墳かどうか微妙な場所への対処はどうしても不充分となる。目視で確定できない遺跡に対しても遺漏のない文化財保護を進めるためにはどうすればよいのか、未だ良好な解決策は無いが、当遺跡のあり方は、その課題を明確にしたという点からも意義付けておきたい。

(伊藤)

＜註＞

- (1) 同林孝作「木柱・木樋と葬送祭祀」『古墳時代の考古学』3（同成社、2011年）

- (2) 都出比呂志『堅穴式石室の地域性の研究』（大阪大学文学部、1986年）
- (3) 川西安幸『円筒埴輪総論』（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）
- (4) 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」（『大水川改修にともなう発掘調査概要』V、大阪府教育委員会、1988年）
- (5) 墓輪検討会「円筒埴輪共通編年（案）」（『埴輪論叢』第4号、2003年）
- (6) 広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」（『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992年）
- (7) 魚津知克「曲刀鍔とU字形鍔鉗先」（『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集、2003年）
- (8) 都出比呂志「農具鐵器化の二つの期面」（『考古学研究』第13巻第3号、1967年）
- (9) 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」（『考古学研究』第32巻第2号、1987年）
- (10) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』（平安学園考古学クラブ、1966年）、同『須恵器大成』（角川書店、1981年）
- (11) 小寺薰「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」（『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所、1988年）
- (12) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」（『待兼山論叢』第22号、大阪大学文学部、1988年）
- (13) 山本雅准「伊賀」（『前方後円墳集成』中部編、山川出版社、1992年）
- (14) 五輪塔の時期については、藤澤典彦「石造物」（『上野市史』文化財編、2004年）を参照した。
- (15) 繩石経については、坂詰秀一編「繩石経の世界」（『考古学論究』3、立正大学、1994年）を参照した。
- (16) 三重県内で確認されている繩石経に関しては、駒田利治「繩石経の地域相 東海」（前掲『考古学論究』3）、木野本和之「調査のまとめ」（『勢武谷經塚』三重県埋蔵文化財センター、2002年）がある。また、三重県埋蔵文化財センター『三重県石造物調査報告書I』（2008年）では、三重県東紀州地域の經塚標識塔を伴う資料について報告がなされている。
- (17) 三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告書』III-1（2005年）
- (18) 三重県埋蔵文化財センター『經塚中世墓発掘調査報告』（研究紀要19-2、2010年）
- (19) 鈴鹿市教育委員会『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』（1978年）
- (20) 青山村教育委員会『安田中世墓発掘調査報告』（1988年）
- (21) 松尾剛次「西大寺末寺帳考」（同氏「袖進と破戒の中世史」吉川弘文館、1995年）
- (22) 松尾剛次『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館、2010年）

写真図版



1号墳全景（東方・乙）

写真図版 1

調査前風景



調査前風景（北から）



調査前風景（東から）

沖打越一號墳
墳丘



1号墳全景（南から）



1号墳全景（東から）

写真図版 3

沖打越一号墳
埋葬施設
(1)



埋葬施設全景（東から）

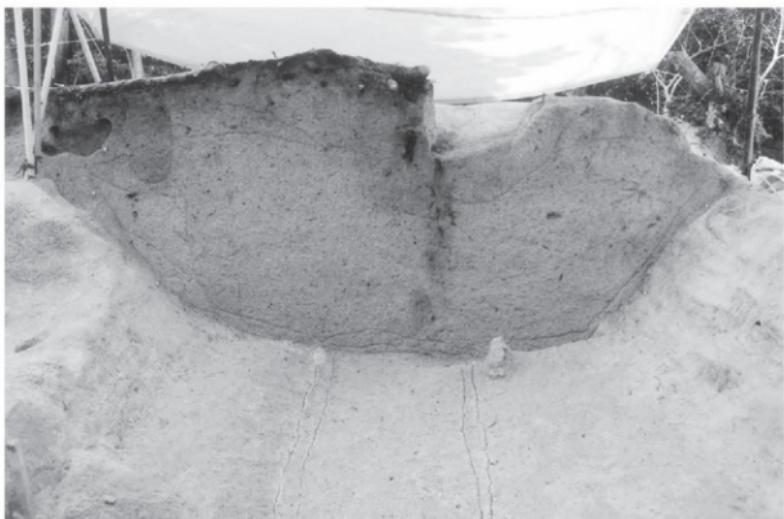


埋葬施設全景（西から）

沖打越一号墳 埋葬施設(2)



埋葬施設全景（北東から）



埋葬施設 1 土層（東から）

写真図版 5

沖打越一号墳
埋葬施設(3)



埋葬施設 1 木棺痕跡検出状況（西端部、南から）



埋葬施設 2 木棺痕跡検出状況（西から）

沖打越一号墳
周溝



東周溝全景（東から）



東周溝全景（北から）



東周溝遺物出土状況（西から）



東周溝遺物と土層（北から 右側が墳丘）



東周溝土層と遺物出土状況（西から）

写真図版 7

調査区土層・範囲確認調査坑



E区東壁土層（北部、西から）



E区東壁土層（北端部、西から）



H区全景（西から）



G区全景（北東から）



I区全景（西から）

沖打越一号墳
出土遺物(1)



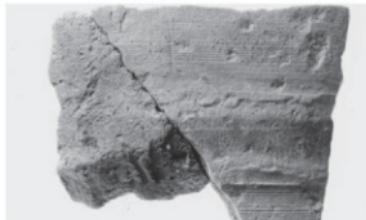
1



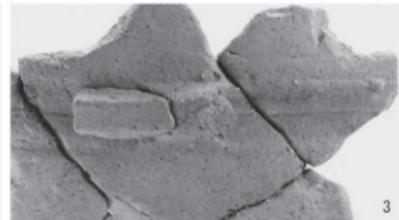
2



3



5



3

写真図版 9

沖打越一号墳
出土遺物(2)



24



25



23



31

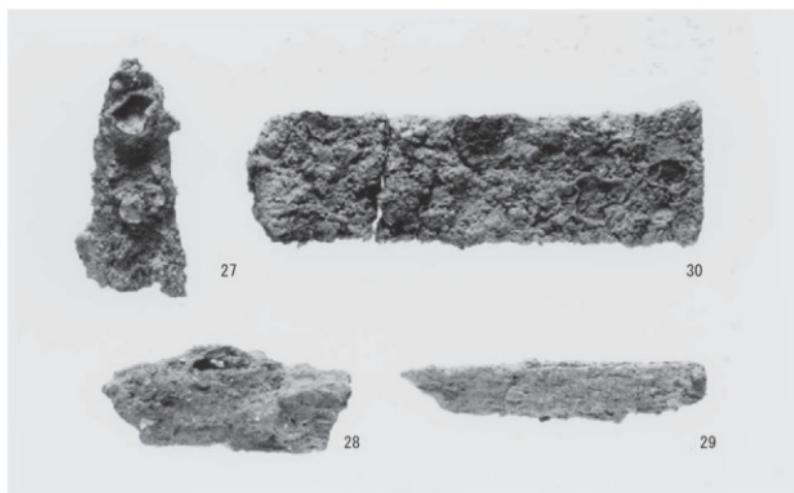
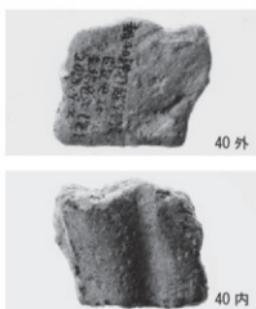


32



33

沖打越一號墳
出土遺物(3)



写真図版 11

沖打越中世墓

全景(1)

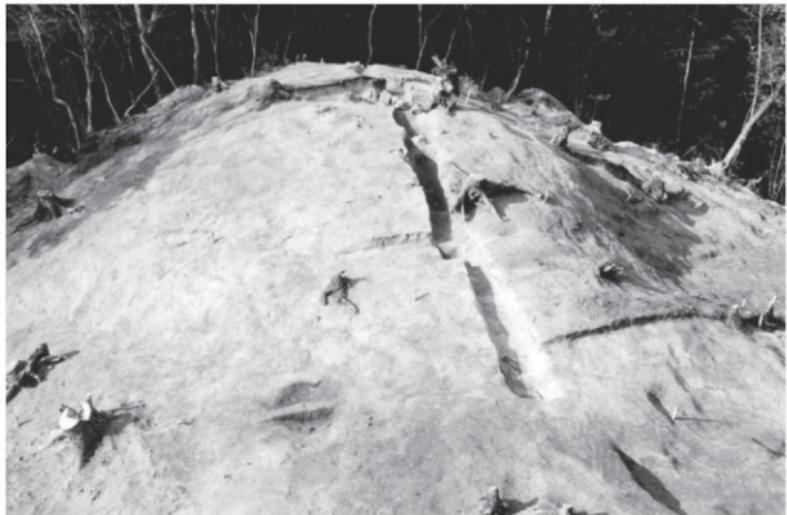


中世墓全景（南から）



中世墓全景（東から）

沖打越中世墓
全景(2)



中世墓全景（東から）



中世墓近景（東から）

写真図版 13

沖打越中世墓

個別遺構(1)

経塚・火葬墓



経塚 SX 5 (東から)



S X 11 (手前) S X 4 (奥) (北から)



S X 7 (東から)



S X 4 (南から)



S X 7 立面 (東から)

沖打越中世墓
個別遺構(2)

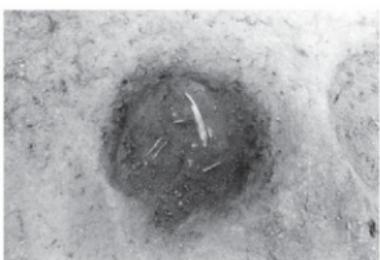
火葬墓



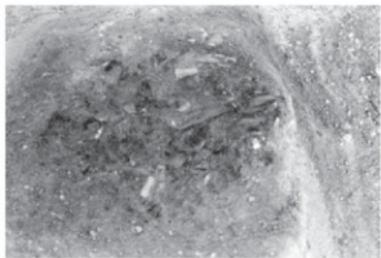
S X 19 - 23 (西から)



S X 14 (右手前) S X 16 (中央) S X 18 (左) (西から)



S X 12 (南から)



S X 7 (南から)



S X 26 (北から)

写真図版 15

沖打越中世墓

個別遺構(3)

火葬墓



S X 10 (東から)



S X 19 (西から)



S X 26 (北から)



S X 23 (集石一部除去後、南から)



S X 13 (南から)



S X 25 (東から)



S X 25 (石蓋除去後、東から)

沖打越中世墓
個別遺構(4)
焼土坑



焼土坑 S F 15 (東から)



空風輪出土状況 (1号墳東周溝上層部) (南から)



S F 27・S Z 28 (西から)



水輪出土状況 (西から)



焼土坑 S F 27 (南から)

写真図版 17

沖打越中世墓

出土遺物(1)

集合・土器類



中世墓出土遺物集合（主要なものを抽出）



54



57



56



55



63

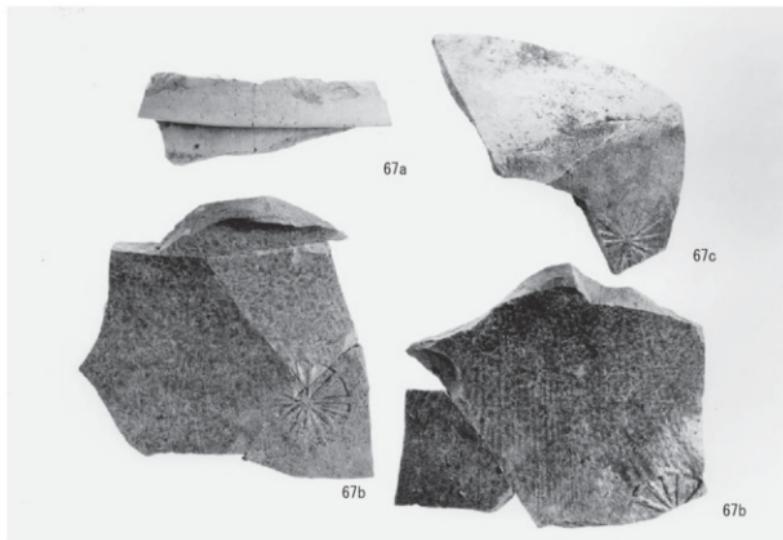
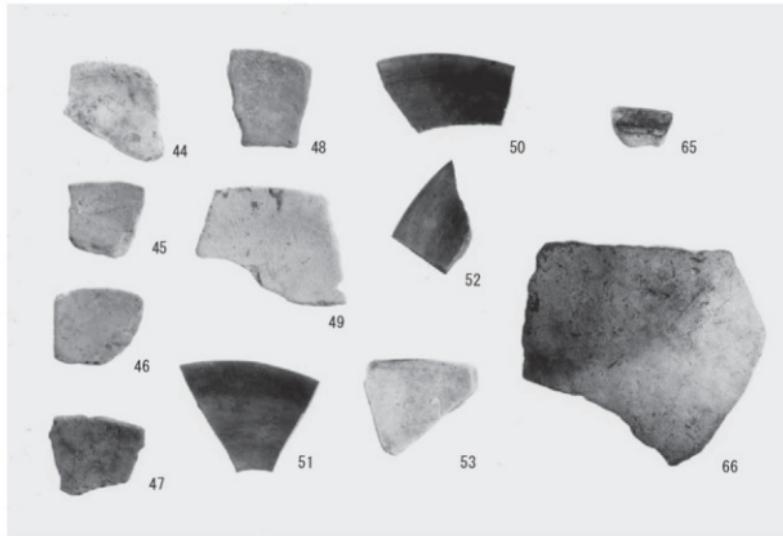


64

沖打越中世墓

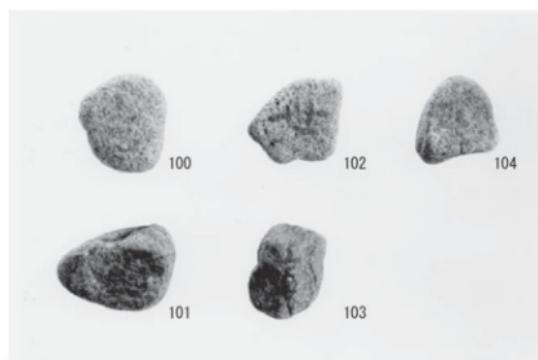
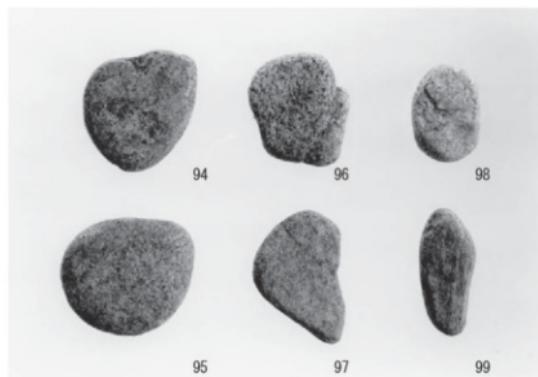
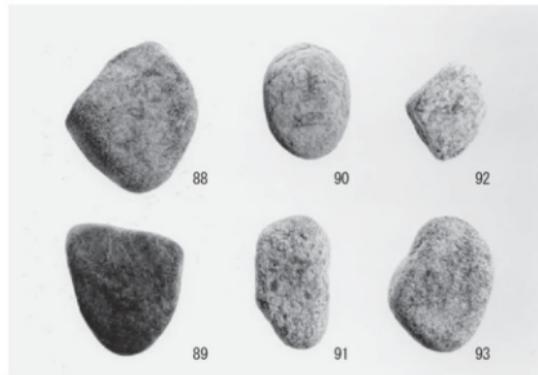
出土遺物(2)

土器類



写真図版 19

沖打越中世墓
出土遺物(3)





報告書主文

ふりがな	おきうちこし1ごうふん・おきうちこしちゅうせいほはつくつちょうさほうこく							
書名	沖打越1号墳・沖打越中世墓発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	329							
編著者名	伊藤裕偉・高松雅文・谷口文隆							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel 0596(52)7031							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
沖打越1号墳	伊賀市沖字打越	24216	34° 42' 45"	136° 9' 50"	20091019～ 20100226 20100622～ 20101029	556 588	平成21・22年 度農免道依 那古2期地区 整備事業	
冲打越中世墓		a1302 a1247						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沖打越1号墳	古墳	古墳	埴丘長約24mの造出 付円墳 埋葬施設2基（割竹 形木棺）、周溝	刀子・鉄鎌・鉄繩（各 1点）、土師器 円筒埴輪（有黒斑） 形象埴輪	埋葬施設は掘り返しが 見られる（古墳時代の 行為か）			
沖打越中世墓	その他の墓	鎌倉 室町	経塚、火葬墓、 焼土坑（茶毘躰）	藏骨器（常滑窯・壺） 経塚容器（常滑窯） 磯石絆、五輪塔 石仏（地蔵菩薩）	経塚・火葬墓・茶毘躰 がコンパクトにまとま っている			
要約	<p>沖打越1号墳は、4世紀末頃の古墳。長軸約8.2mの長大な埴形に割竹形木棺を用いた埋葬施設と、長軸約3.6mの埴形に同じく割竹形木棺を用いた埋葬施設の2基を主体とする。墓域内からの遺物は少なく、木棺埋設後、短期間のうちに再度掘り起こされたものと考えられる。周溝からは埴輪（有黒斑）・土師器類がまとめて出土しており、良好な共伴資料である。</p> <p>沖打越中世墓は、13世紀後半から開始される火葬墓群。中央に礫石縁（現状では三重県下最古）を常滑窯に埋納し、上部に五輪塔を建てて標識（シンボル）とし、その周囲に火葬墓を形成している。13-14世紀前半では藏骨器を伴うが、その後は火葬骨を直接埋納しており、時期の判断は難しいが、石塔類から15世紀後半頃、あるいは16世紀代にかけても継続して営まれたと見られる。斜面部には茶毘躰と見られる焼土坑があり、小さいながらも中世墓の典型的なやり方をコンパクトに示している。</p> <p>人骨・花粉分析・土壤理化分析報告を掲載。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告329

沖打越1号墳・沖打越中世墓発掘調査報告

2012（平成24）年3月
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 衛ミフジ印刷